

一般国道475号東海環状自動車道

権 現 坂 遺 跡

発掘調査報告

2002.3

三重県埋蔵文化財センター





序

三重県と滋賀県の県境をなす鈴鹿山脈、そして三重県と岐阜県の県境をなす養老山地、これらの山々にはさまれた員弁川流域は四季折々の自然の恵みを受ける豊かな地域です。周辺一体は、現代は言うにおよばず、古代の人々にとっても重要な生活の場であり、遺跡も多く存在しております。

権現坂遺跡は員弁川右岸の河岸段丘状に立地し、縄文時代および飛鳥時代から鎌倉時代にかけての遺跡であることが判明し、この地に人々が連綿と生活を続けてきたことがわかりました。また、その出土品から他地域とつながりをもって、広域的な交易活動を行っていたことも確認されました。

調査を終えたところには、やがては新しい道路が開通し、かつて員弁川を介して行われていたころのように地域と地域を結ぶ新しい文化活動の動脈となることでしょう。

この報告書は失われた先人達の足跡を記録保存し、広く一般に公開していくために刊行されたものです。そして今後、本書が地域の歴史解明の一助となることを念願するところです。

最後になりましたが、調査にあたりご協力いただきました関係諸機関および地元の皆様に心からお礼申し上げるとともに、今後とも県民の皆様の文化財へのより一層のご理解とご協力をお願い申し上げる次第です。

平成14年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 桂川 哲

例 言

- 1 本書は、平成6年度に当時の建設省中部地方整備局から委託を受けて実施した一般国道475号東海環状自動車道建設予定地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査にかかる報告書のうち、ごんげんざか権現坂遺跡の報告書である。
- 2 権現坂遺跡は、三重県員弁郡北勢町東村字治田外面に所在する。
みえけんいなべぐんほくせいちらひがしむらあざはつたぞも
- 3 調査にかかる費用は、国土交通省中部地方整備局の負担による。
- 4 発掘調査は、次の体制で行った。
 - ・調査主体 三重県教育委員会
 - ・調査担当 三重県埋蔵文化財センター
 - ・調査協力 東員町教育委員会
北勢町教育委員会
 - ・現地作業 社団法人中部建設協会
- 5 当報告書の執筆は、清水正明、森川幸雄、片岡博、角正芳浩が分担して行い、全体の編集は角正が行つた。文責は目次に示した。遺構写真は各調査担当者が、遺物写真は、森川、角正が撮影した。
- 6 当報告書の作成業務は、担当職員が行ったほか、以下の者の協力を得た。

室内整理員 釜谷実加代 宮本理美 浜中有紀（旧姓藤田） 新貝里美 山中陽子 長野恵子
調査補助員 日紫喜勝重
- 7 発掘調査およびその後の整理・報告書作成にあたっては、下記の方々のご指導・ご教示を賜りました。記して感謝の意を表します。（順不同・敬称略、所属は当時）

岩野見司（東海学園女子短期大学） 田中欣治（三重短期大学） 松本 覚（藤原町立白瀬小学校）
青木哲哉（立命館大学） 中野晴久（常滑市民俗資料館） 尾野善裕（京都国立博物館）
大下 明（雲雀丘学園中・高等学校） 梶村寛之（斎宮歴史博物館） 濱辺一機（北勢町文化振興課）
- 8 権現坂遺跡については、既に『一般国道475号東海環状自動車道埋蔵文化財発掘調査概報』I・III（三重県埋蔵文化財センター 1995・1997および『東海環状自動車道発掘調査ニュース』No.3・8に調査概要を報告しているが、本書をもって正式報告とする。
- 9 本書での用語は、以下の通り統一した。

つき……………「坏」「杯」があるが「杯」を用いた。
わん……………「碗」「碗」「椀」があるが「椀」を用いた。
- 10 本書で用いた遺構表記記号は、下記のとおりである。

S A	柱列	S B	掘立柱建物
S D	溝	S H	堅穴住居
S K	土坑	S X	墓

11 本書で用いた地図および遺構実測図等は、国土調査法の第VI座標系を基準とし、方位の表示は座標北とする。当遺跡では、真北は座標北に対して $0^{\circ} 18'$ 西偏し、磁北は真北に対して $6^{\circ} 50'$ 西偏する。
(平成5年現在)

12 本書で報告した記録類および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターにおいて管理・保管している。

13 本書で使用した土層および遺物の色調は、小山・竹原編『新版 標準土色帖』(1994年版)を用いた。

14 スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本文目次

I	前言(角正)	(1)
1	事業の概要	(1)
2	調査に至る経過	(1)
3	調査の体制	(1)
4	調査の方法	(3)
5	調査の経過	(4)
II	位置と環境(角正)	(7)
1	地理的環境	(7)
2	歴史的環境	(7)
III	基本層序(角正)	(12)
IV	遺構と遺物	(17)
1	縄文時代の遺構と遺物(清水・森川)	(17)
(1)	遺構	(17)
(2)	遺物	(18)
2	飛鳥・奈良時代の遺構・遺物(角正・清水)	(30)
(1)	竪穴住居	(30)
(2)	掘立柱建物	(30)
(3)	土坑	(33)
(4)	包含層出土遺物	(35)
3	平安時代の遺構・遺物(角正・清水)	(38)
(1)	掘立柱建物	(38)
(2)	柱列	(39)
(3)	土坑	(41)
(4)	包含層出土遺物	(42)
4	中世の遺構・遺物(清水・片岡・角正)	(43)
(1)	掘立柱建物	(43)
(2)	土坑	(43)
(3)	溝	(45)
(4)	包含層出土遺物	(45)
5	近世の遺構・遺物(角正・清水)	(46)
(1)	包含層出土遺物	(46)
6	時期不明の遺構(角正・清水)	(48)
(1)	土坑	(48)
7	その他の遺構出土遺物(角正・清水)	(48)
IV	まとめ	(68)
	遺構の変遷について(角正)	(68)

「乗名国依」および施印須恵器について	(角正)	(70)
円面鏡について	(角正)	(71)
緑釉陶器について	(角正)	(71)
清郷型鍋について	(角正)	(71)
条里制について	(角正)	(72)
権現坂遺跡について	(角正)	(73)

挿 図 目 次

第1図 調査区位置図	(3)		
第2図 範囲確認調査試掘坑配置図	(4)	第22図 掘立柱建物 S B 6・8 実測図	(40)
第3図 調査区地区割図	(6)	第23図 掘立柱建物 S B 23・24 実測図	(41)
第4図 周辺遺跡位置図	(11)	第24図 出土遺物実測図(2)	(42)
第5図 第2次調査区土層断面図(1)	(12)	第25図 掘立柱建物 S B 1~4、 土坑 S K 5 実測図	(44)
第6図 第2次調査区土層断面図(2)	(13)	第26図 出土遺物実測図(3)	(45)
第7図 第1次調査区土層断面図	(14)	第27図 出土遺物実測図(4)	(46)
第8図 遺構実測図及び等高線図	(15・16)	第28図 土坑 S K 10・12・15・17・30 実測図	(47)
第9図 S X 34・35 実測図	(17)	第29図 出土遺物実測図(5)	(49)
第10図 繩文土器実測図(1)	(20)	第30図 出土遺物実測図(6)	(50)
第11図 繩文土器実測図(2)	(21)	第31図 出土遺物実測図(7)	(51)
第12図 繩文土器実測図(3)	(22)	第32図 出土遺物実測図(8)	(52)
第13図 繩文土器実測図(4)	(23)	第33図 出土遺物実測図(9)	(53)
第14図 繩文土器実測図(5)	(24)	第34図 出土遺物実測図(10)	(54)
第15図 石器・石製品実測図	(25)	第35図 出土遺物実測図(11)	(55)
第16図 石器実測図	(26)	第36図 出土遺物実測図(12)	(56)
第17図 壁穴住居 S H 9・19 実測図	(31)	第37図 出土遺物実測図(13)	(57)
第18図 壁穴住居 S H 31 実測図、竈実測図	(32)	第38図 遺構変遷図	(69)
第19図 掘立柱建物 S B 13・16・20~22 実測図	(34)	第39図 条里関連字名	(72)
第20図 出土遺物実測図(1)	(36)	第40図 員弁郡における奈良・平安時代の遺跡 および御厨	(73)
第21図 掘立柱建物 S B 18・28・29 実測図	(37)		

表 目 次

表1 周辺遺跡一覧表	(10)	表6 壁穴住居一覧	(58)
表2 繩文土器観察表(1)	(27)	表7 掘立柱建物一覧	(58)
表3 繩文土器観察表(2)	(28)	表8 柱列一覧	(59)
表4 繩文土器観察表(3)	(29)	表9 土坑一覧	(59)
表5 石器・石製品観察表	(29)	表10 溝一覧	(59)

表11 遺物観察表(1)	(60)	表15 遺物観察表(5)	(64)
表12 遺物観察表(2)	(61)	表16 遺物観察表(6)	(65)
表13 遺物観察表(3)	(62)	表17 遺物観察表(7)	(66)
表14 遺物観察表(4)	(63)	表18 遺物観察表(8)	(67)

写 真 目 次

写真1 作業風景	(4)	P L 11 出土遺物(3)(縄文土器)	
写真2 現地説明会	(5)	出土遺物(4)(縄文土器)	(86)
P L 1 調査区全景		P L 12 出土遺物(5)(縄文土器)	(87)
調査区全景(2)	(76)	P L 13 出土遺物(6)(縄文土器)	(88)
P L 2 S X34・35出土状況		P L 14 出土遺物(7)(縄文土器)	(89)
S X34出土状況	(77)	P L 15 出土遺物(8)(石器・石製品)	(90)
P L 3 S H 9		P L 16 出土遺物(9)(須恵器)	(91)
S H 9 瓢	(78)	P L 17 出土遺物(10)(須恵器)	(92)
P L 4 S H19		P L 18 出土遺物(11)(須恵器・土師器)	(93)
S H31	(79)	P L 19 出土遺物(12)(土師器)	(94)
P L 5 S B 13		P L 20 出土遺物(13)(土師器)	(95)
S B 20~22	(80)	P L 21 出土遺物(14)(灰釉陶器)	(96)
P L 6 S B 21・22		P L 22 出土遺物(15)(綠釉陶器・陶器)	(97)
S B 23・24	(81)	P L 23 出土遺物(16)(陶器)	(98)
P L 7 S K 12		P L 24 出土遺物(17)(磁器・墨書き土器)	(99)
S K 15	(82)	P L 25 出土遺物(18)(墨書き土器)	(100)
P L 8 S K 10		卷頭カラー	
S K 17	(83)	調査区遠景	
P L 9 S K 37		「葉名国依」施印須恵器	
S D 25	(84)		
P L 10 出土遺物(1)(縄文土器)			
出土遺物(2)(縄文土器)	(85)		

I 前 言

1 事業の概要

一般国道475号東海環状自動車道は、名古屋市を中心とする30～40km圏に位置する四日市市、大垣市、岐阜市、瀬戸市、豊田市などの諸都市を有機的に結ぶ延長約160kmの高規格幹線道路である。そして名古屋市と周辺都市の機能分担を効果的に進め、都市内外の交通混雑緩和を図り、都市全域の道路網の拡充、四日市港集積の拡大による活性化、また内陸部の適正な開発等に寄与することが期待されている。

三重県内における当自動車道は、四日市北JCTで近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）と分岐後、員弁川の右岸を北上し、東員町、員弁町、大安町、北勢町を経た後、岐阜県養老町と連絡する計画となっている。

当事業は、平成2年度に「一般国道475号東海環状自動車道（北勢～四日市）」として員弁郡北勢町阿下喜～四日市市北山町の区間、延長14.4kmが事業化された。また、平成4年1月21日に三重県知事により「東海環状自動車道」の都市計画化が決定された。

計画区間は、四日市市伊坂町から員弁郡北勢町阿下喜まで、計画延長は18.7kmである。

2 調査に至る経過

一般国道475号東海環状自動車道計画地内の埋蔵文化財発掘調査については、平成2年度の事業化に対して、同年度に計画路線内の詳細分布調査を行った。その結果をもとに、三重県埋蔵文化財センターは平成4年度に四日市市、北勢町、藤原町、員弁町、東員町、大安町の各教育委員会と「東海環状自動車道等にかかる文化財保護連絡会議」を開催し、計画予定地内の文化財保護および関連開発事業計画にかかる文化財保護について協議を行った。平成5年度には当時の建設省中部地方整備局（現 国土交通省中部地方整備局、以下国土交通省）と三重県教育委員会が、埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行い、現状保存が困難な遺跡については事前に発掘調査を実施し、記録保存をはかることとなった。

事業の実施にあたって、平成6年4月1日付けで国土交通省中部地方整備局と三重県との間で、事業地内に存在する埋蔵文化財の適切な保護措置を講じるための事前調査について、「協定書」を締結した。さらに、平成13年3月13日付で事業の進捗状況から「変更協定書」を締結した。

なお、事前調査の調査主体は三重県教育委員会で、調査担当は三重県埋蔵文化財センターである。

調査にあたっては「県教育委員会・市町村教育委員会職員人事交流実施要綱」に基づき、平成7年～9年度に東員町教育委員会から、平成10年～12年度に北勢町教育委員会から一名ずつ職員の派遣を得た。

3 調査の体制

一般国道475号東海環状自動車道建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査は、三重県教育委員会が主体となり、三重県埋蔵文化財センターが担当した。

また、現地作業は調査の円滑な推進を期して、国土交通省中部地方整備局が社団法人中部建設協会に委託した。このため、事業の実施にあたっては、国土交通省中部地方整備局・三重県・社団法人中部建設協会の三者間で、「一般国道475号東海環状自動車道（北勢～四日市）埋蔵文化財発掘調査協定書」を締結し、また、県は協会に「作業要領」を提示し、事業を推進している。その後も、事業の進捗状況により必要に応じて三者協議を行い、工程の細部調整や計画および見直しを行っている。

各年度の調査体制は、以下の通りである。

【平成6年度】

調査第二課

主幹兼課長 伊藤克幸

主査兼

第一係長 河北秀実

主 事 清水正明

主 事 小菅文裕

室内整理員 釜谷実加代 宮本理美

【平成 7 年度】

調査第二課

主幹兼課長 伊藤克幸

主査兼

第一係長 清水正明

技 師 竹内英昭

主 事 小菅文裕

主 事 清水弘之

(東員町教育委員会から派遣)

調査補助員 日紫喜勝重(別府大学学生)

長野恵子(奈良大学学生)

室内整理員 釜谷実加代 宮本理美 藤田有紀

主 事 今尾宏記

(北勢町教育委員会から派遣)

室内整理員 新貝里美 山中陽子 長野恵子

【平成11年度】

調査第二課

主幹兼課長 吉水康夫

主査兼

第一係長 本堂弘之

技 師 角正芳浩

主 事 今尾宏記

(北勢町教育委員会から派遣)

室内整理員 新貝里美 山中陽子 長野恵子

【平成 8 年度】

調査第二課

主幹兼課長 山田 猛

主査兼

第一係長 清水正明

主 事 片岡 博

技 師 竹内英昭

主 事 清水弘之

(東員町教育委員会から派遣)

室内整理員 長野恵子(奈良大学学生)

調査補助員 釜谷実加代 宮本理美 樋口 愛

【平成12年度】

調査第二課

主幹兼課長 吉水康夫

主 幹 新田 洋

主査兼

第一係長 森川幸雄

技 師 角正芳浩

主 事 今尾宏記

(北勢町教育委員会から派遣)

室内整理員 新貝里美 山中陽子 長野恵子

【平成 9 年度】

調査第二課

主幹兼課長 山田 猛

第一 係 長 森川幸雄

主 事 片岡 博

技 師 杉崎淳子

主 事 清水弘之

(東員町教育委員会から派遣)

室内整理員 宮本理美 樋口 愛 並河かおり

新貝里美

【平成13年度】

調査第二課

主幹兼課長 新田 洋

主査兼

第一係長 森川幸雄

主 事 山口 聰

技術補助職員 田中美穂

室内整理員 新貝里美 山中陽子 長野恵子

・調査協力 北勢町教育委員会(平成 7 ~ 9 年度)

東員町教育委員会(平成10~12年度)

・現地作業 社団法人中部建設協会

【平成10年度】

調査第二課

主幹兼課長 吉水康夫

第一 係 長 森川幸雄

技 師 杉崎淳子

4 調査の方法

調査区の地区割りは、国土座標第VI系に合わせてX = -95,600、Y = 47,500を起点とし、A～Cの大地区として100mを1単位とする方格に区割りした。さらに大地区の中に4m×4mを1単位として25分割するグリッド（小地区）を設定した。各グリッドは北西隅を原点とし、調査区の西から東へは1～25の算用数字、北から南へはA～Yのアルファベットを付与した。各遺構や遺物の出土地点は、大地区と小地区の組み合わせで表示した。

発掘調査にあたって、表土除去は重機（バックホー）を用いて行い、包含層掘削および各遺構の掘削は人力をもって行った。

遺構の重複関係など検出状況を記録するための遺構略測図（遺構カード）の作成は1/40の縮尺で小地区ごとに行った。

遺構番号は、ピットについてはグリッドごとに通し番号を与えた。土坑や溝など複数のグリッドにま

たがることのある他の遺構については、調査区全体で通し番号を与えた。ただし、本報告にあたって、既に概報などで報告された遺構番号はすべて改称し、新たに与えた遺構番号を正式のものとする。

個別遺構の実測、遺物出土状況図および土層断面図等については調査の進捗状況に応じて適宜1/10ないしは1/20等の縮尺で実測図を作成した。

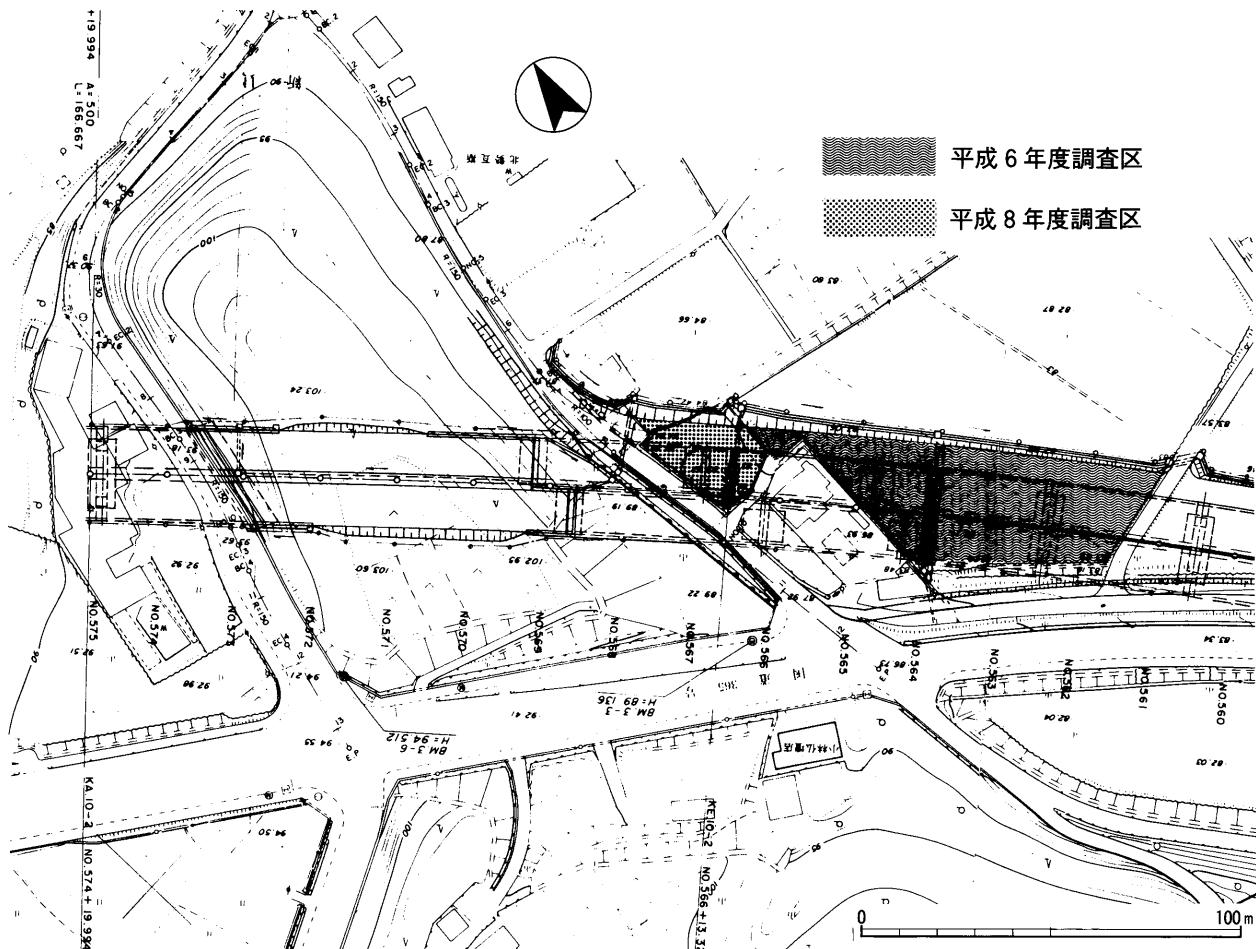
調査区全体の遺構図および等高線図、標高点図の作成は1/50の縮尺で空中写真測量にて行った。

写真撮影は、検出状況や掘削完了状況などの遺構写真についてはモノクロネガとカラーリバーサルフィルムを用い、35mm、ブローニー判（6×7cm、6×9cm）、4×5判を使用した。また作業状況などについては、適宜35mmカラーNEガも併用した。

遺跡全体写真についてはヘリコプターにより空中写真撮影を行った。

調査区の埋め戻しは調査終了後、重機を用いて速やかに行なった。

出土遺物は、洗浄・接合、遺跡名・出土地点・出



第1図 調査区位置図 (1 : 2,000)

土年月日の注記を行った後、出土地点ごとに分類した。さらに実測すべき遺物を選別し、実測を行った。実測された遺物は実測図との照合ができるよう遺物と図面の両方に「R」を付した登録番号（「R-〇〇〇〇」）を与える、さらに報告書記載遺物には報告書番号と同じ番号を与えた。なお、登録番号は、第1次調査出土遺物は三桁数字で、第2次調査出土遺物は、2,000番台で表記した。

遺物の写真撮影には、主に6×9cmのモノクロネガを使用した。

現地説明会は、各調査終了後開催し、地元のみならず遠方からの参加者を多数得た。

調査の概要は、各年度で概要を『一般国道475号東海環状自動車道発掘調査ニュース』No.3・8（1995・1997）、および『一般国道475号東海環状自動車道発掘調査概報』I・III（1995・1997）にまとめている。

5 調査の経過

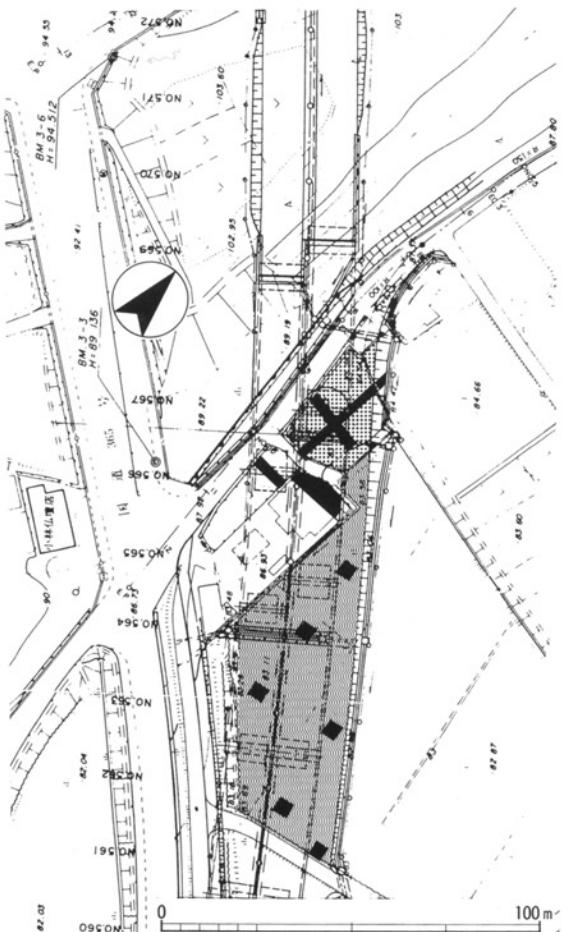
一般国道東海環状自動車道建設工事に伴う権現坂遺跡の現地調査は、東海環状自動車道計画予定地内において平成6・8年度に実施し、整理・報告書作成業務は平成13年度に行った。

現地調査に先立って平成2年度に実施された東海環状自動車道建設予定地内埋蔵文化財分布調査によると、東西約60m、南北約140mの範囲に山茶椀や近世陶器など遺物の散布が認められ、鎌倉から近世にかけての集落遺跡であろうと報告されている。^①この時点では3,980m²が対象とされた。

また、当該事業以前の昭和53年度には一般国道365号線道路改良事業に伴う発掘調査が行われており、明確な遺構は確認されなかったものの、縄文時代晩



写真1 作業風景



第2図 範囲確認調査試掘坑配置図 (1:2,000)

期から中世にかけての遺物が出土したことが報告されている。^②

平成6年度の範囲確認調査は稲の刈り取りが終了した10月4日から7日にかけて実施した。調査は6カ所に4m×4mの試掘坑を設定した。その結果、5カ所の試掘坑で遺構・遺物の存在が確認されたため、本調査が必要であると判断された。第1次調査は、範囲確認調査の結果を受けて平成6年11月21日から翌平成7年3月3日にかけて、水田部分の2,430m²の範囲を対象とした。

調査の結果、縄文時代晩期の土器棺墓や奈良・平安時代の棟方向を揃えた掘立柱建物等の遺構が検出された。出土遺物は、縄文土器や須恵器、灰釉陶器、山茶椀の他、特筆すべきものとして「葉名国依」と刻印された須恵器、円面鏡、数十点におよぶ綠釉陶器片、清郷型鍋、墨書き土器等が出土した。

空中写真測量は平成7年2月8日に実施した。現地説明会は、2月11日に開催し、170名の参加を得

た。

その後、第1次調査区西側の家屋が撤去されたため、平成8年3月に宅地部分および隣接する田畠地において7ヵ所の試掘坑を設定し、範囲確認調査を実施した。その結果、複数のピットや須恵器、土師器、山茶椀等の遺物が確認されたため756m²について本調査が必要であると判断された。

第2次調査は範囲確認調査の結果を受けて、第1次調査の西側部分において平成8年10月1日から同年11月20日にかけて実施した。調査対象面積は756m²である。

検出された遺構は掘立柱建物がある。これらの建物は棟方向を揃えて重複し合っており、同一場所で建替えを行ったものと判断される。しかし、第1次調査で検出された掘立柱建物とは棟方向が異なり、時期的な差があるものと考えられる。出土遺物は、第1次調査と同様に、縄文時代後期から中世にかけのものが見られる。調査終了後には下層の地質調査を行い、立命館大学青木哲哉氏の現地指導を得た。

同年11月に開催された北勢町産業文化祭りに、同じく東海環状自動車道建設に伴う発掘調査が行われた上惣作遺跡、東村城跡とともに権現坂遺跡の出土遺物も出展し、464名の入場者数を記録した。

この間、平成6・8年度に『一般国道475号東海環状自動車道埋蔵文化財発掘調査概報』I・IIIおよび『一般国道東海環状自動車道発掘調査ニュース』No.3・8を刊行し、調査の概要を報告した。

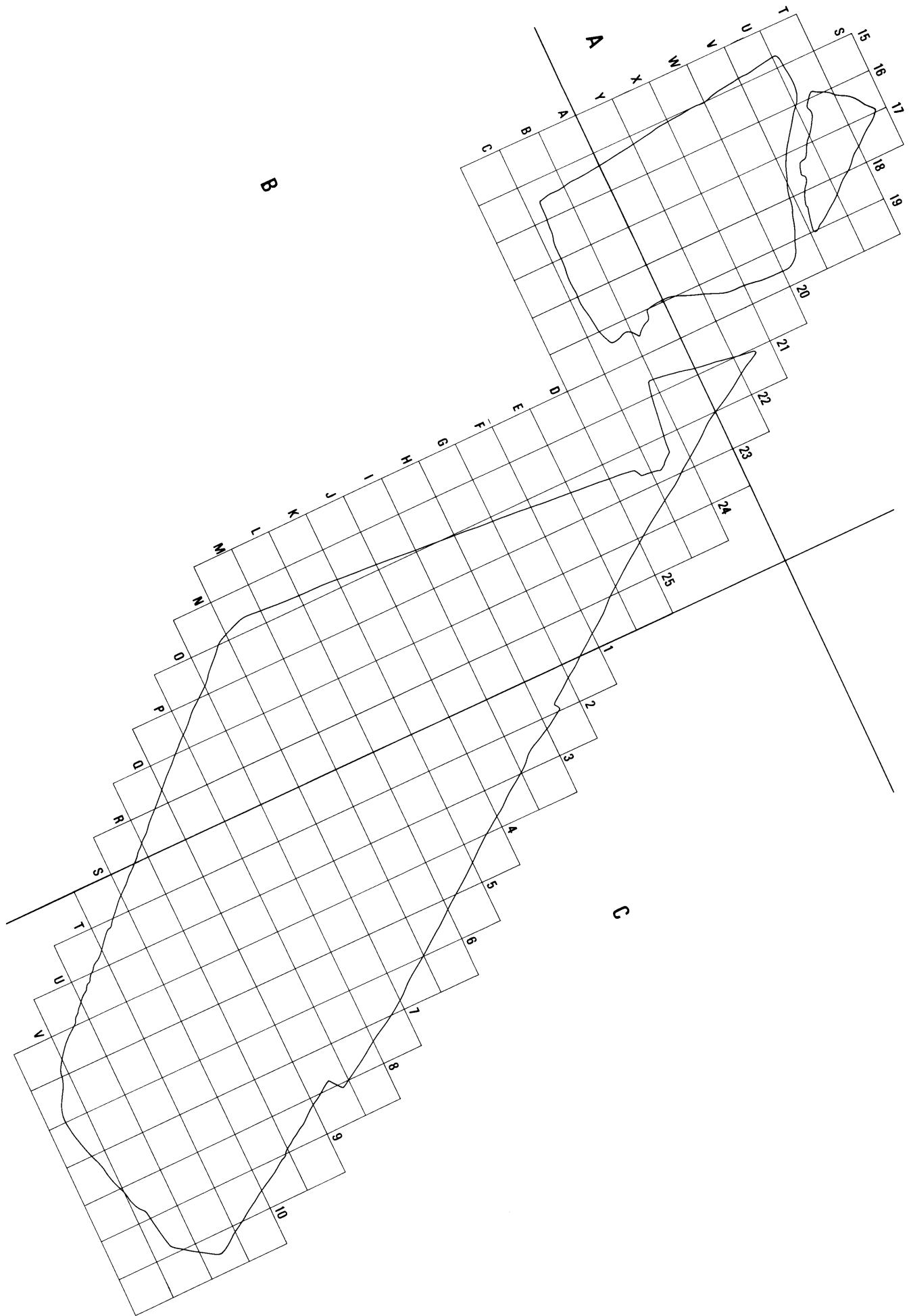
第1次、第2次調査を合わせた最終的な調査面積は、3,186m²である。

【註】

- ①『東海環状自動車道建設予定地内埋蔵文化財分布調査報告』
三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター 1990
- ②『員弁郡北勢町東村権現坂遺跡調査概要』三重県教育委員会
1979



写真2 現地説明会



第3図 調査区地区割図 (1 : 500)

II 位置と環境

1 地理的環境

遺跡は、員弁郡北勢町に所在する。員弁郡は藤原・北勢・大安・員弁・東員の5町から成り、三重県の最北部を形成する郡である。北・東は標高600～800mの養老山地を隔てて岐阜県と、また西は標高1,000m前後の鈴鹿山脈を隔てて滋賀県とそれぞれ境を成す。

員弁郡の中央部には、鈴鹿山脈北端の烏帽子岳や三国岳に源を発する員弁川が西から東へ貫流する。真川、青川、宇賀川といった郡内の小河川は全て員弁川に合流し、下流域では町屋川と名をかえ伊勢湾へと注いでいる。員弁川とその支流はこの地域の平野の形成に貢献し、中流域には河岸段丘、下流域には小規模ながら沖積平野が形成され、また鈴鹿山脈東麓には扇状地が発達している。

北勢町から大安町にかけて蛇行する員弁川の右岸に東村の集落が広がる中位段丘面がある。員弁川の支流である多志田川と青川にはさまれたこの段丘面は東に向かって緩やかに傾斜しており、その北端に通称「権現山」あるいは「権現坂」と呼ばれる尾根が半島状に突き出している。権現坂遺跡（1）は、この半島状に突き出した丘陵の北東側の裾部に立地する。標高は83～85mを測り、北西から南東方向に向かって緩やかに傾斜する。前面の下位段丘には水田が広がる。

2 歴史的環境

員弁郡の郡名は古代、この地に猪名部氏（為奈部、伊奈部）が居住していたことに由来する。当地域の埋蔵文化財調査については、戦後早くから鈴木敏雄氏や員弁高等学校郷土史研究部などによって踏査され、旧石器・縄文時代を中心とした資料の蓄積がなされてきた。近年は、東海環状自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査によって新たな発見がなされている。

旧石器時代 この時期の遺跡の存在する可能性については古くから江坂輝弥氏により指摘されていた。^①

その後、員弁高等学校郷土史研究部や鷲野憲成氏の分布調査により里畠遺跡（2）、芽指遺跡（3）、深田遺跡（4）、権現坂遺跡など旧石器時代に属すると考えられる遺跡が数箇所確認されている^②。表面採集された石器は地元産のチャート製のものが多数を占めるが、中には、サヌカイトや黒曜石、下呂石など外来産のものも見られる。発掘調査で確認された例としては、北勢町瀬木の川向遺跡（5）からナイフ型石器と思われる遺物が出土している^③。

縄文時代 この時代の遺跡はかつて「員弁川左岸には縄文時代の遺跡が少ない。」と言われたように、員弁川右岸に多く分布する。

宇賀川流域の照光寺（西南）遺跡（6）は纖維土器や有舌尖頭器などの石器が採集されたほか、県内で初めて早期の押型文土器が確認された遺跡として知られている^④。また、照光寺遺跡の南東に位置する野々田遺跡（7）からも早期の楕円押型文土器、纖維土器が採集されている^⑤。前期の遺跡としては、中山遺跡（8）、奥仙遺跡（9）、照光寺（西南）遺跡、野々田遺跡、中大野遺跡（10）、北野遺跡（11）があり、北白川下層式を中心とする遺構・遺物が確認されている。なかでも北勢町中山の中山遺跡は、旧中山神社跡採集の石斧や石棒をはじめとする石器の種類の多様性が注目されている^⑥。

大安町石榑の中大野遺跡は、昭和26年に縄文時代の遺跡としては県内初となる発掘調査が員弁高等学校郷土研究部や名古屋大学考古学研究室によって実施され、土器や石器が出土している^⑦。また、遺跡周辺では押型文土器や有舌尖頭器が採集されており、早期の遺跡の存在が推測される。員弁町上笠田の北野遺跡からは前期後半と考えられる竪穴住居が4棟検出されており、員弁川左岸に立地する遺跡として貴重な資料を提供している^⑧。

中期の遺跡としては、前述の川向遺跡や東員町瀬古泉の村前遺跡（12）で竪穴住居が確認されている^⑨。

後期では、北勢町阿下喜の覚正垣内遺跡（13）で中津式を主体とする土器が出土している^⑩。また、川向遺跡からは同時期の竪穴住居が検出されている。

晩期としては、大安町片樋の宮山遺跡(14)で平地住居跡の可能性も考えられる柱穴群が確認されている^㉑。この宮山遺跡を含め権現坂遺跡、東員町山田の山田遺跡^㉒(15)からは深鉢を転用した晩期の合口土器棺墓が確認されている。宮山遺跡の南に隣接する大久保城跡(16)からは石棒や石剣が採集されている。

この他、北勢町垣内の中垣内遺跡（加毛神社境内遺跡）(17)、同町奥村の奥村遺跡(18)で石棒・石鏃・石匙などの石器が採集されている^㉓。

弥生時代 弥生時代の遺跡はこの地域ではあまり知られていなかったが、北勢町東村の東村城跡(19)の調査で前期の土器が出土するとともに、遠賀川文化の影響がこの地域まで及んでいたことが判明した^㉔。

宮山遺跡からは、鈴鹿山系に分布するハイアロクラスタイトと呼ばれる玄武岩質の石材を用いた磨製石斧が大量に出土したが、大半が未成品であることから石斧の製作遺跡として注目されている。また、同遺跡では、中期の竪穴住居や倉庫と考えられる掘立柱建物、末期の墳墓も確認されている。員弁町東一色の奥田・大谷遺跡(20)でも中期の竪穴住居が確認されている。

後期になると、東村城跡、川向遺跡、見性寺遺跡(21)、正邸遺跡(22)、下小原遺跡(23)、照光寺（西南）遺跡、野々田遺跡で少量の遺物が採集されている。

古墳時代 古墳時代の集落と考えられる遺跡は北勢町阿下喜周辺に多く分布する。正邸遺跡、見性寺下遺跡(24)、八幡山遺跡(25)、西広遺跡(26)、堂ノ上遺跡(27)、二俣遺跡(28)、西別当遺跡(29)などが知られているが、発掘調査が行われていないため詳細は不明である。

集落遺跡としては、北勢町阿下喜の上惣作遺跡^㉕(30)、同町塚原遺跡^㉖(31)で、地床炉を伴った元屋敷期の竪穴住居や遺物が確認されている。

この地域の古墳の分布は、北勢町阿下喜周辺・宇賀川流域・山田川流域・戸上川流の4つの地域に分けられる。そのほとんどは、前方後円（方）墳である麻積塚1号墳、岡1号墳を除き、二、三基から十数基程度の円墳を中心とした小古墳群である。

北勢町阿下喜周辺には、別当古墳(32)、町割古墳^㉗(33)、鳥坂古墳(34)、堂ノ上古墳(35)、大西神社古

墳群(36)がある。大西神社古墳は大西神社の敷地内に所在し、現在は1号墳および2号墳がかろうじて墳丘の高まりを残している。昭和4年の道路拡張工事により横穴式石室が露呈し、鉄刀や玉類、須恵器などが出土した^㉘。

宇賀川流域には最も多くの古墳が分布しており、左岸に南林古墳群^㉙(37)、野々田古墳群^㉚(38)、上小原古墳群(39)下小原古墳群^㉛(40)、右岸に宇賀新田古墳群^㉜(41)、大辻古墳群(42)、野添古墳群(43)がある。宇賀新田古墳群と下小原古墳群は一部が発掘調査され、横穴式石室を主体とする7世紀後半の群集墳であることが判明している。

山田川流域には、全長43mの前方後方墳である麻積塚1号墳を主体とする麻積塚古墳群(44)の他、二子塚古墳、楚原南古墳(45)、北野中古墳群(46)などがある。

戸上川流域の岡古墳群(47)は、前方後円墳と推定される1号墳を含む3基の古墳が分布する。このうち3号墳は片袖式で狭長な羨同をもつ横穴式石室を埋葬施設とし、6世紀前半代の須恵器が出土している^㉚。戸上川流域にはこの他に、町名古墳(48)、平古古墳群(49)、鳥取塚古墳群(50)、築山古墳(51)、猪名部神社古墳群(52)、西畠古墳(53)などが分布し、このうち前方後円墳は猪名部神社1号墳、西畠古墳の2基が知られている。

岡古墳群と同じ丘陵麓に後期の須恵器窯である岡古窯址が存在したが、土砂採取によってすでに消滅している。

飛鳥時代 この時代の遺跡は、この地域ではほとんど知られていない。上惣作遺跡や東員町中上の西山遺跡、新野遺跡で竪穴住居や掘立柱建物等の遺構、遺物が確認されている程度である^㉚。

奈良・平安時代 この時代になると、沖積地の微高地に立地する川向遺跡、塚原遺跡、村前遺跡以外にも、それまで遺跡の存在があまり知られていなかつた中位段丘上にも広く分布するようになり、権現坂遺跡、里畠遺跡、北野遺跡、芽指遺跡、旭遺跡(54)、段遺跡^㉗(55)、名部坂遺跡(56)、奥田・大谷遺跡、栗ノ木遺跡(57)、山田遺跡、西山遺跡(58)、広山A遺跡(59)、広山B遺跡(60)などが知られる。特に員弁町から東員町にかけての員弁川左岸の自然堤防上に多

ぐの遺跡が立地する。

塚原遺跡では平安時代後期から鎌倉時代と考えられる竪穴住居が確認されており、この時期としては貴重な資料といえる。

権現坂遺跡からは緑釉陶器、円面鏡等の他、「乗名国依」と刻印された須恵器が出土している。奥田・大谷遺跡は奈良時代の竪穴住居を主体とする集落遺跡であり、川向遺跡は奈良時代の、段遺跡、山田遺跡、村前遺跡は平安時代の掘立柱建物を主体とする集落遺跡である。

西山遺跡のA地区からは、フイゴの羽口や多数の鉄滓が出土しており鍛冶専業遺跡の可能性も考えられている。

東員町山田の周辺では、単弁八葉蓮華文軒丸瓦や偏行唐草文軒平瓦が採集されている。^⑦これらは山田廃寺（員弁廃寺・六把野廃寺）に関わるもの想定され、延喜式内社、員弁十座の一つ猪名部神社との関係が注目される。^⑧また、周辺の奥田・大谷遺跡、山田遺跡、村前遺跡などの戸上川流域の遺跡からは布目瓦や多量の緑釉陶器、円面鏡が出土しており、山田廃寺や猪名部神社と併せて、猪名部氏との関わりが考えられる。他に、北野遺跡からも緑釉陶器の出土が知られている。

また、戸上川の上流には奈良時代の須恵器窯である奴女溜古窯址(61)があり、採集資料が大安町郷土資料館に所蔵されている。

中世 鎌倉時代の『神鳳抄』・『外宮神領目録』によると、平安時代末には員弁川左岸の中位段丘上に、多くの御厨・御園が成立したことが知られる。権現坂遺跡の所在する北勢町治田についても、『神鳳抄』に「治田御厨」の記載があり、御厨が置かれていたと考えられる。

集落遺跡としては、東員町山田・穴太地域の下貝戸遺跡(62)、天野A・B遺跡(63)、西街途遺跡(64)などが知られているが、発掘調査が行われていないため詳細は不明である。

北勢地域には、北方一揆等の国人領主が割拠し、各地に多くの城館が築かれた。員弁郡内の中世城館としては、藤原町の山口城、白瀬城、野尻城、東禅寺城、北勢町の田辺城^⑨、上木城(65)、麻生田城(66)、治田城(67)、東村城、大安町の丹生川上城^⑩(68)、大

久保城、大井田城(69)、梅戸城(70)、員弁町の上笠田城(71)、下笠田城、金井城(72)御園城、大泉城、東員町の大木城(73)、長深城(74)、中上城(75)、山田城^⑪などが知られている。

昭和48年、大安町石榑下に所在する経塚中世墓群(76)の発掘調査が行われた。頂上部を壇上に整形し経塚をおさめ、その東斜面で20個所の火葬址、南斜面では土葬と考えられる墓跡が確認されている。^⑫

【註】

①江坂輝弥「縄文式文化以前の遺跡」『猪名部』第8号 員弁高等学校郷土研究部 1954

②鷺野憲成「三重県員弁郡に於ける考古学的新知見」『猪名部』第23号 1981

③松本覚他『川向遺跡発掘調査報告』北勢町教育委員会 1993

④江上辰男「山郷村大字麻生田の遺跡及遺物」『猪名部』第6号 1952

⑤平岡 容「照光寺遺跡の考察」『猪名部』第4号 1951

篠木二郎「員弁郡石榑村照光寺西南遺跡出土遺物」『猪名部』第9号 1955

⑥並河 豊「野々田遺跡と遺物について(上)・(下)」『猪名部』第4・5号 1951

⑦並河 豊「治田村中山遺跡」『猪名部』第2号 1950

” 「続・治田村中山遺跡」『猪名部』第3号 1950

川瀬 聰「北勢町中山遺跡とその遺物」『研究紀要』第8号 三重県埋蔵文化財センター 1999

⑧江上辰男「石榑村中大野発見の磨製石斧」『猪名部』第6号 1952

並河 豊「三重県員弁郡石榑村中大野遺跡発掘調査概要」『猪名部』第8号 1954

⑨鷺野憲成他『北野遺跡発掘調査報告書』員弁町教育委員会 1981

⑩『村前遺跡現地説明会』東員町教育委員会 1992

⑪清水弘之他「覚正垣内遺跡」『一般国道475号東海環状自動車道埋蔵文化財発掘調査概報』II・III・V・VI 三重県埋蔵文化財センター 1996・1997・1999・2000

⑫竹内英昭『一般国道475号東海環状自動車道宮山遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 1999

⑬清水弘之他『権現坂遺跡』『一般国道475号東海環状自動車道埋蔵文化財発掘調査概報』I・III 三重県埋蔵文化財センター 1995・1997

1 権現坂遺跡	16 大久保城跡	30 上惣作遺跡	45 楚原南古墳	60 広山B遺跡	75 中上城
2 里畠遺跡	17 垣内遺跡	31 塚原遺跡	46 北中野古墳群	61 奴女溜古窯址	76 経塚中世墓群
3 芽指遺跡	(加毛神社境内)	32 別当古墳	47 岡古墳群	62 下貝戸遺跡	
4 深田遺跡	18 奥村遺跡	33 町割古墳	48 町名古墳	63 天野A・B遺跡	
5 川向遺跡	19 東村城跡	34 鳥坂遺跡	49 平古古墳群	64 西街途遺跡	
6 照光寺(西南)遺跡	20 大谷・奥田遺跡	35 堂ノ上古墳	50 烏取塚古墳群	65 上木城	
7 野々多遺跡	21 見性寺遺跡	36 大西神社古墳群	51 築山古墳	66 麻生田城	
8 中山遺跡	22 正邱遺跡	37 南林古墳群	52 猪名部神社古墳群	67 治田城	
9 奥仙遺跡	23 下小原遺跡	38 野々多古墳群	53 西畠古墳	68 丹生川上城	
10 中大野遺跡	24 見性寺下遺跡	39 上小原古墳群	54 旭遺跡	69 大井田城	
11 北野遺跡	25 八幡山遺跡	40 下小原古墳群	55 段遺跡	70 梅戸城	
12 村前遺跡	26 西広遺跡	41 宇賀新田古墳群	56 名部坂遺跡	71 上笠田城	
13 角正垣内遺跡	27 堂ノ上遺跡	42 大辻古墳群	57 奥田・大谷遺跡	72 金井城	
14 宮山遺跡	28 二俣遺跡	43 野添古墳群	58 栗ノ木遺跡	73 大木城	
15 山田遺跡	29 西別当遺跡	44 麻績塚古墳群	59 広山A遺跡	74 長深城	

表 1 周辺遺跡一覧

⑭山田 猛『山田遺跡発掘調査報告—縄文時代編一』東員町教育委員会 1991

⑮岩野見司『考古学上から見た北伊勢』三岐鉄道株式会社

1956

鈴木敏雄「治田の古代遺物と加毛神社」『猪名部』第11号
1965

⑯清水弘之他『一般国道475号東海環状自動車道東村城跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 2000

⑰角正芳浩『一般国道475号東海環状自動車道上惣作遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 2001

⑯『塚原遺跡』現地説明会資料 北勢町教育委員会 2001
田中欣治「阿下喜町割りの古墳発掘調査報告」『猪名部』
第2号 1950

⑯鈴木敏雄『員辨郡阿下喜町考古誌考』 1937

⑯員弁高等学校郷土研究部「南林第3号古墳調査概報」『猪名部』第9号 1955

⑯「伊勢国石榑村野々田第3号古墳調査概報」『猪名部』第13号 1961

⑯松本覚他『下小原古墳群発掘調査報告』大安町教育委員会 1993

⑯『大安町の古墳を掘る』宇賀新田古墳群発掘調査見学会資料
三重大学人文学部考古学研究室・大安町教育委員会 1999

⑯三重大学「三重県員弁町岡古墳群調査報告」『古代学研究』
63号 1972

⑯小玉道明『西山遺跡・新野遺跡』東員町教育委員会 1983

⑯蔭山誠一『段遺跡発掘調査報告』員弁町教育委員会 1994

⑯鈴木敏雄『三重懸古瓦圖録』 1933

三重県の古瓦刊行会編『三重県の古瓦』 1996

⑯鈴木敏雄「考古学よりみたる稻部の猪名部神社」『猪名部』

第9号 1955

⑯田中欣治他『北勢町田辺城趾隣接地遺跡調査報告書』北勢町教育委員会 1980

⑯杉谷正樹他『丹生川上城発掘調査報告』三重県教育委員会 1985

⑯松本覚他『山田城発掘調査報告』東員町教育委員会 1984

⑯その他の城館については、『三重の中世城館』、三重県教育委員会 1977『三重の中世城館補遺』三重県教育委員会 1981 伊藤徳也「北伊勢における中世城郭の現況」『研究紀要』第6号 三重県埋蔵文化財センター 1997などを参照した。

⑯三重の考古器物編集委員会編『図録三重の考古遺物』

1981

大安町教育委員会編『大安町史』大安町 1986



第4図 周辺遺跡位置図 (1 : 50,000) [国土地理院 1 : 25,000 (阿下喜・菰野・桑名・弥富)]

III 基本層序

調査区の基本層序は、上層から黒褐色土層（耕作土）、赤褐色ないしは赤橙色粘質土層（床土）、遺物包含層、暗灰黄色～褐色シルト層・砂礫層（遺構検出面）となる。遺物包含層は場所により異なった様相を示しており、面的な連続性が見られない。遺構検出面についても同様のことが言える。（第5図）

調査区の南東側に見られる青灰色～黒色の粘質土層は、水田の影響によるものである。

遺跡の立地する場所は、員弁川右岸の多志田川と青川にはさまれた中位段丘面の縁辺にあたり、低位段丘面に広がる水田面とは明確な段をもつ。したがって、員弁川の氾濫の影響はあまり受けっていないものと考えられる。土層の観察からも、複数の耕作面の形成が認められることはなく、安定した状態であったことがうかがわれる。

第2次調査では発掘調査終了後、下層の地質調査を行った。^① その結果、砂層と粘土層が互層となって

堆積する状況が確認された。（第5図）これは、桑名・員弁地方に見られる新生代新第三紀に形成された桑名層群（東海層群）のうちの大泉層に相当するものと考えられる。桑名層群は下層から、美鹿層・古野層・市之原層・暮明層・大泉層・米野層・東禅寺層・千司久連層に分けられる。

大泉層は砂と粘土によって形成された層である。桑名層群のうちでも比較的新しいものであり、北勢町内では町の中央部に広がっていることが知られている^②。

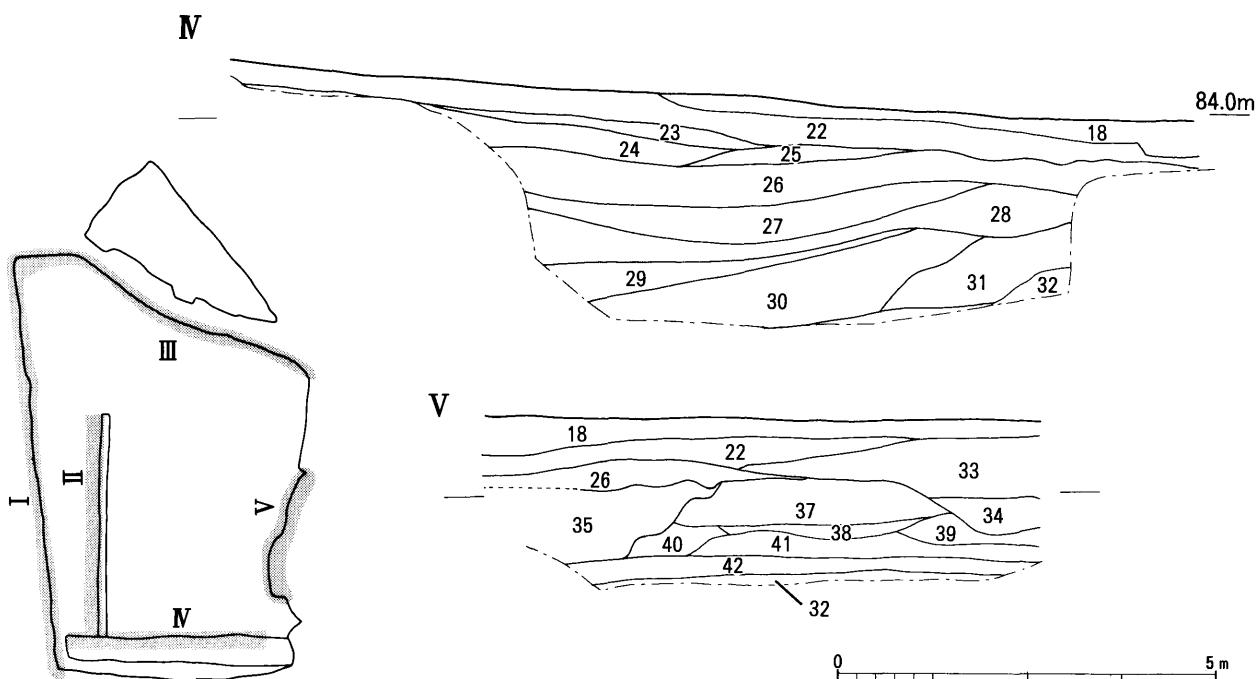
【註】

①下層調査にあたっては、立命館大学青木哲哉氏に現地指導をして頂いた。

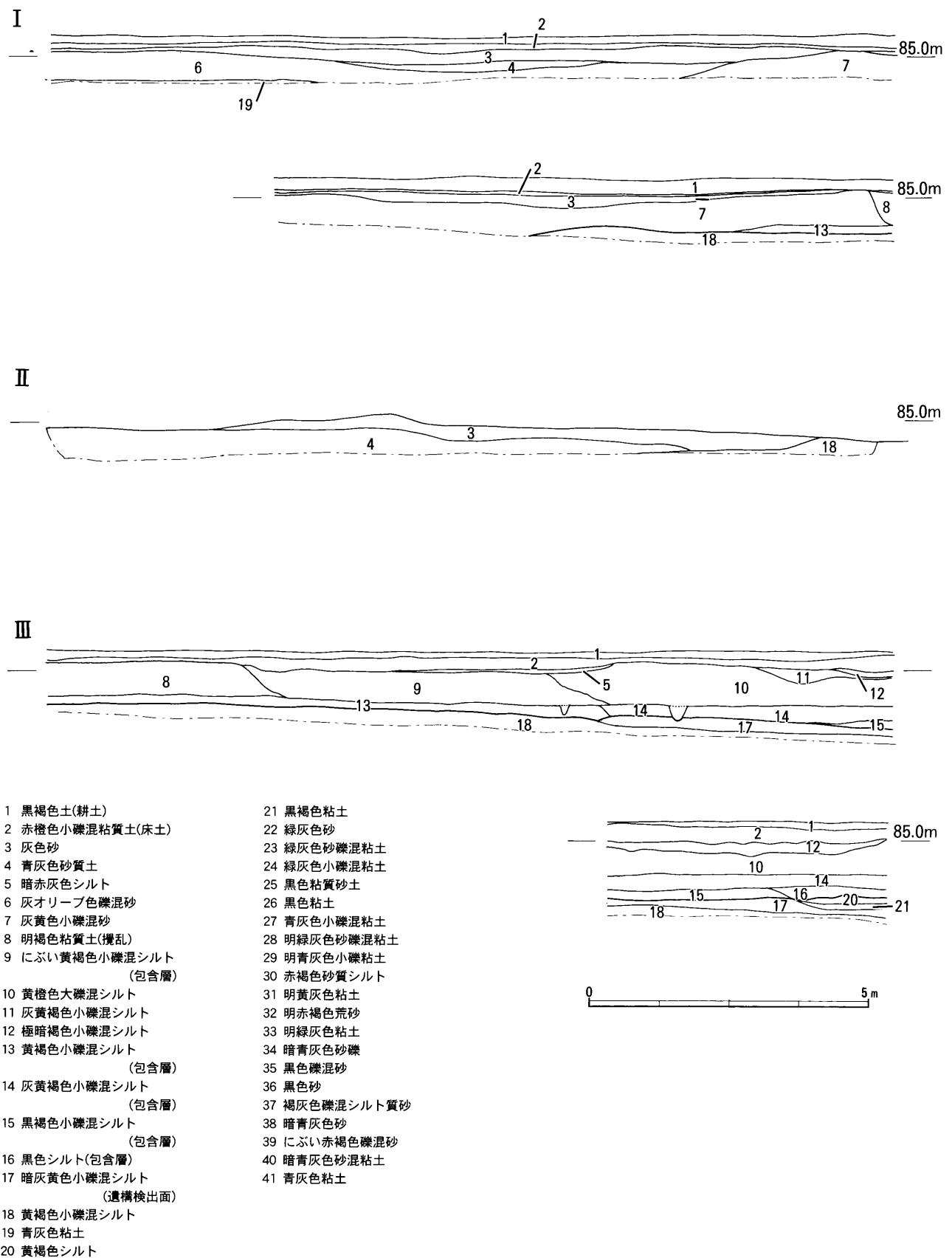
②北勢町史編さん委員会編『北勢町史』北勢町 2000

【参考文献】

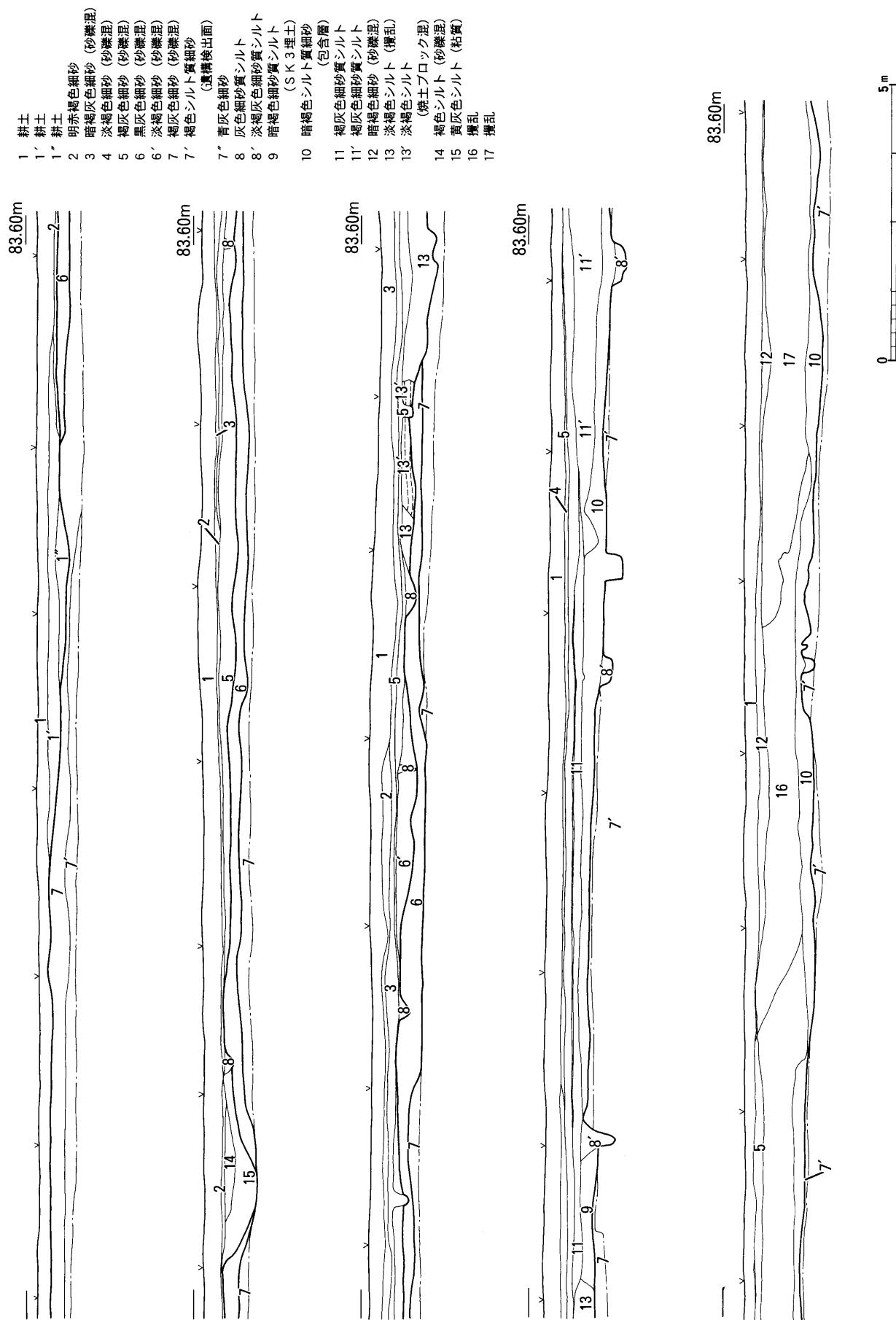
吉田史郎他『桑名地域の地質』地質調査所 1991



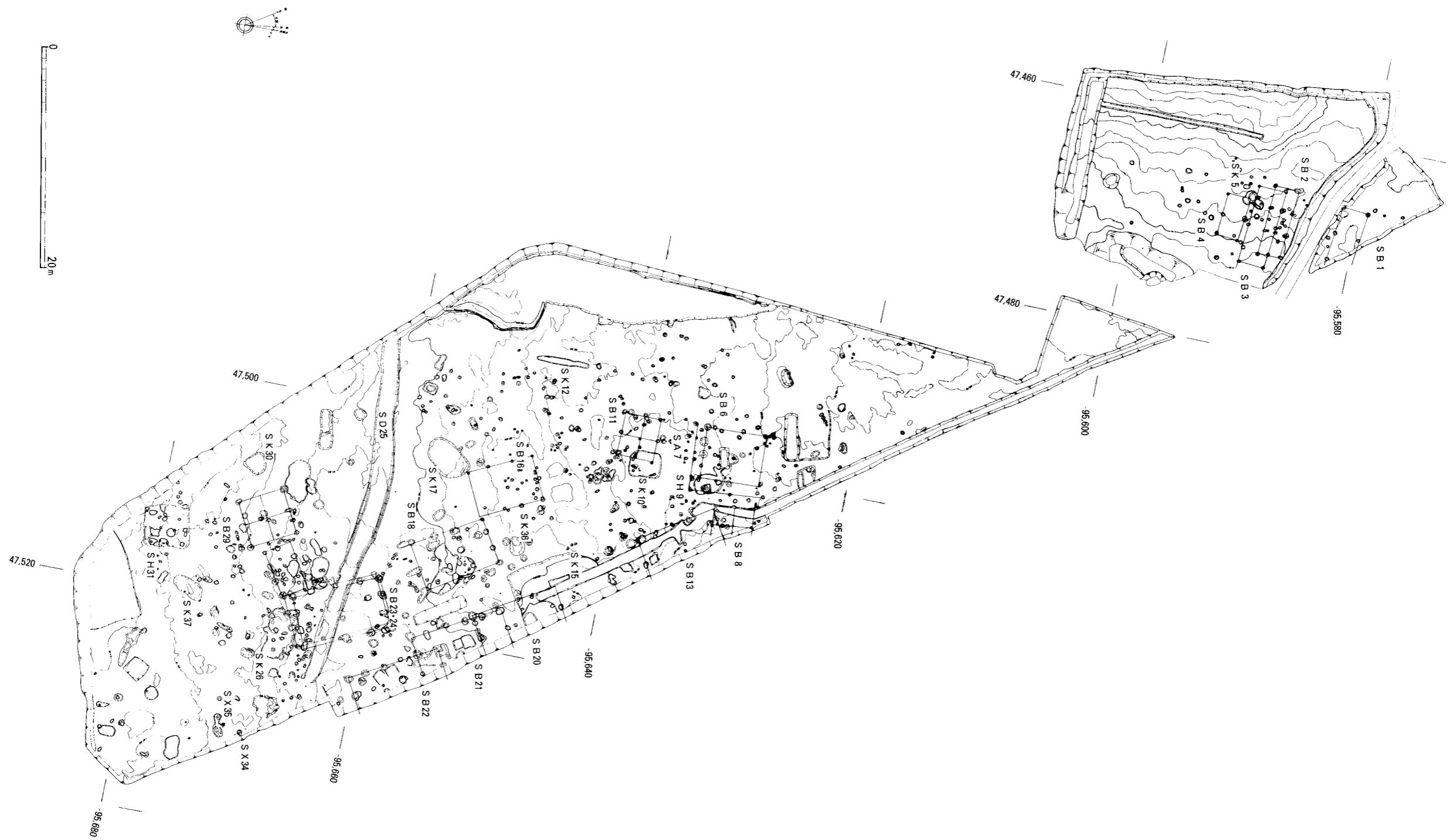
第5図 第2次調査区土層断面図(1) (1 : 100)



第6図 第2次調査区土層断面図(2) (1 : 100)



第7図 第1次調査区土層断面図 (1:100)



第8図 遺構実測図および等高線図（1：400）

IV 遺構と遺物

1 縄文時代の遺構と遺物

(1) 遺構

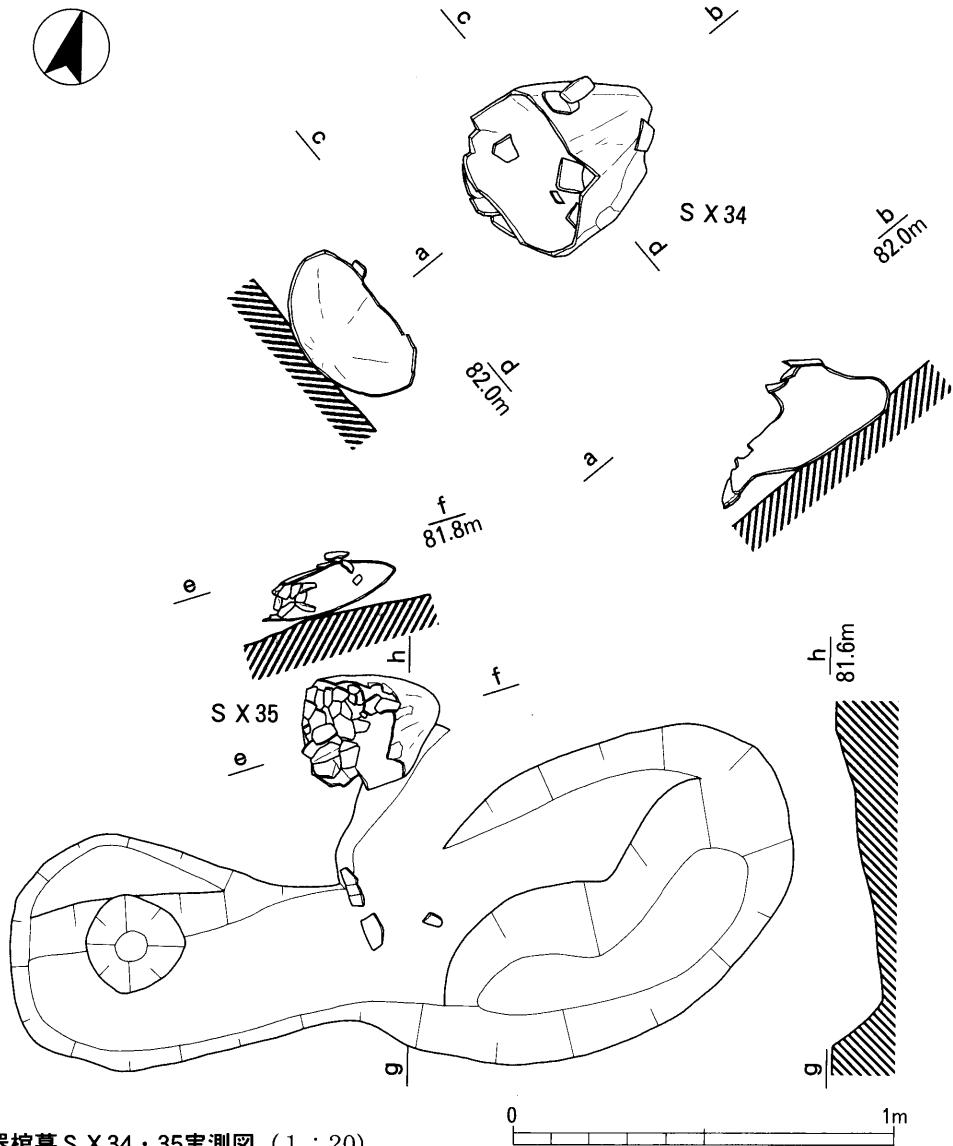
縄文時代の遺構には、後期の土器が出土した土坑（SK 36・37）と、晩期の土器棺墓2基（SX 34・35）がある。

SK 36 平面形は長軸約1.7m、短軸約1.3mの楕円形で、深さは約40cmである。暗褐色の埋土から後期の土器（58、83、90）が出土した。

SK 37 平面形は長軸約3m、短軸約1.3mの楕円形で、深さは約40cmである。暗褐色の埋土は礫が多いが、後期の土器（5、13、92）も出土した。

S X 34（第9図） 堀形は検出できなかったが、地山直上で横向きのまま上から押しつぶされた状態で晩期の土器（20：頸と胴部の境に段をもち、突帯に刻目を施す刻目突帯文深鉢）が出土し、その中の土に骨の細片が含まれていた。また、土器口縁部の周りを覆うように、別の土器（19：凸帯に幅広の刻目を施す刻目突帯文深鉢）の口縁部も出土したことから、合口土器棺墓や蓋を伴う土器棺墓であった可能性も考えられる。

S X 35（第9図） S X 34から約1m程南から、これもS X 34同様の状態で、晩期の土器（17：頸と胴部の境に段をもつ）が出土した。その周辺に別の土



第9図 土器棺墓SX 34・35実測図（1:20）

器（18:口縁直下の突帯に刻目を施す刻目突帯文土器）も出土し、蓋を伴う土器棺墓あるいは合口土器棺墓の可能性が考えられる。

（2）遺物

土器および石器・石製品が出土した。

a 土器

深鉢、鉢、壺、注口土器がある。

深鉢（1～5・17・19～87） 21～27の口縁部は内湾傾向にあり、その傾向は波状口縁例に著しい。25の口縁部下端は段をもつ。沈線による施文があり、地文はいずれも縄文である。沈線には横走するもののほか、入組状の弧文や同心円文などがみられる。28・29は胴部片で、28には弧文と山形の沈線束がみられる。以上は、北白川上層式3期並行に位置づけられる。30はこの型式のものか後続する型式のものか直ちには判断しがたい。

1～4・31～43・48～54の口縁部形態は、屈曲をもたない例（31～34、35）も少數あるが、大半は「く」字状に内折するものである。36は内折する口縁部の中央付近でさらに内接する形態で、単純な内折形態の口縁部例と比較して古い要素が看取される。3も同様の傾向がみられる。口縁部に平行する沈線とそれに画される文様帶を基本的な文様構成としている。沈線には、末端刺突がみられる例（1・2・4・36・51）が多い。地文は縄文例が多いが、二枚貝殻頂部（2）や巻貝（41）の押圧による擬縄文や刻み例（35・43）もある。39は、工具は不明であるが条線状の擬縄文をもつ。地文をもたないものもある。38は沈線間に連弧文がみられる。横走する文様帶を縦に区画する単位文には、「ノ」字状の浮文や沈線が多くみられる。34は口縁部内面に沈線と刻み帶をもつ。31の口縁部内面は結節縄文と思われる。57は平行する2本の沈線とその両端に刺突列がみられ、地文に縄文をもつ。口縁部片の可能性が高い。59～69は胴部片である。68・69を除き地文に縄文をもつ。66は幅の狭い連弧文と幅広の連弧文をもつ。なお、61の拓影の弧線にみえるものはキズである。以上の資料は一乗寺K式もしくは元住吉山I式並行に位置づけられる。

44～46は口縁部文様に連続する縦位の棒状浮文をもつものである。44は地文に縄文をもち棒状浮文下

にこれらを繋ぐ横位の隆帯がある。45は棒状浮文および浮文間に刺突をもつ。46は棒状浮文に刻みを伴い、口縁端部に浮文を繋ぐ隆帯をもつ。これらは、蜆塚3式に比定される。55は、刻みを伴う隆帯による施文をもつ。さて、こうした隆帯による施文の出自については今後の検討課題とするが、当遺跡以外の県内の後期中葉の資料をみたとき、一定量確認されるケースが多い。

47は肥厚した口縁部下端に幅広の刻みをもつもので、内面には横位の沈線がみられる。56は口縁部に平行する条線がみられる。いずれも後期に所属するものと考える。

70は外反する口頸部片であり、口縁端部に刻みを伴う。滋賀里Ⅲb式並行と考えられ、後述する突帯文土器にやや先行する位置づけが与えられる。

17～20・71～77は突帯文土器である。17と18がS X 35、19と20がS X 34である。17は、口縁部を欠くが肩部に明瞭な段が確認される。18は、口縁直下に突帯をもつ。摩滅が激しいが、突帯には刻目があったと判断される。口縁部付近ですばまるもので、器形的には深鉢とするよりは壺としたほうが妥当と考える。19は、口縁部片で調整は二枚貝条痕であるが突帯の刻目は指頭圧痕による。20は、最も残存状況が良好なものである。肩部にはやや不明瞭になるが段を有し、口縁部に二枚貝による刻目を伴う突帯をもつ。71～73は刻目突帯をもつ。71の刻みはヘラ状具による斜め方向の刻目で、いわゆるD字形状をとる。72もD字状の範疇であろう。73は、二枚貝を工具とするO字状の刻目である。74～77は素文突帯である。74は、口縁端部の面取りが明瞭である。76・77は頸・胴部の境をもたない、いわゆる砲弾形の深鉢になると思われる。

78～85は、無文の口縁部片である。81は、内面に強いなでによる沈線状のものが確認される。82の口縁端部は強いなでにより窪む。83は、半円状の突起がみられる。

86・87は施文のみられない胴部片で、87には補修孔がある。

鉢（6・7・88～90） 6は、内湾する口縁部に平行する4本の沈線をもつ。沈線は2本ずつがセットとなり、各セットの沈線間は無文とし、セット間に

縄文を施す。沈線内には連続する刺突がみられる。北白川上層式3期から一乗寺K式にかけての過渡的な印象を受ける資料である。

7は「く」字状に内折する口縁部をもち、屈曲部に横走する沈線状のものが認められる。丁寧なミガキが施される鉢で、沈線状のものはミガキの原体をそのまま使って意識的に屈曲部を強調させた結果のものと思われる。沈線状のものは浮文状に隆起させた部分で一端途切れる。口縁端部内面にも沈線状のものがみられる。88は、口縁部と平行する3本の沈線があり、中央の沈線の上を無文とし、下には条線状の擬縄文がみられる。89は、「く」字状に内折する口縁部に横走する2本の沈線もつ。この沈線は、縦位の2本の短沈線で区切られる。以上は、一乗寺K式もしくは元住吉山I式並行に位置づけられる。

90は無文であるが、内面に水銀朱と思われる赤色顔料が確認される。

壺 (18・91) 18は便宜上深鉢のところで記述したが、器形的には壺と考える。

91は刻目突帯をもつ資料で、突帯の位置は体部上半のほぼ中央と推定される。

注口土器 (8～10・92) 8は算盤玉形の注口土器で、胴部上半に段をもつものと考える。端部は三角形状に肥厚する。段の部分までが残る。横長三角形のモチーフを沈線で施し、单位文は沈線で表出した浮文状の馬蹄形である。地文は縄文である。92も同様の器形と考える。上段には沈線で表出した浮文状の馬蹄形文様をもち、下段には沈線による馬蹄形文様をもつ。地紋は縄文である。これらは、一乗寺K式もしくは元住吉山I式並行に位置づけられる。9・10は注口部である。

底部 (11～16) 11と12は網代圧痕がある。14と16は窪底となる。

以上、土器について記述したが、時期的には後期中葉の北白川上層式3期・一乗寺K式・元住吉山I式並行期の資料が多く、空白期をおいて晩期後半の突帯文土器およびこれに先行する滋賀里Ⅲb式並行期のものがみられる。

b 石器・石製品

石鎌1点、削器1点、二次加工痕有剥片1点、使用痕有剥片1点、石斧1点、石斧未成品1点、石錐

3点、敲石12点、石棒1点がある。

石鎌 (93) 基部は凹基で全体形は二等辺三角形状を呈す。サヌカイト製である。

削器 (94) 横長の剥片を素材とする。ほぼ全周に二次加工痕があり、下縁に安定した刃部をもつ。チャート製である。

二次加工痕有剥片 (95) 下縁を中心に二次加工痕がみられる。チャート製である。

使用痕有剥片 (96) 2縁に微細な剥離が認められる。下呂石製である。

石斧未成品 (98) 刃部に剥離痕がみられるほか、ほぼ全面に敲打痕がある。大型のものであり弥生時代の大型蛤刃石斧の可能性も高い。このほか、図示できなかったが乳棒状石斧の破片と考えられるものが1点ある。

石錐 (99～101) いずれも自然礫をそのまま素材とする切目石錐である。幅はほぼ同じであるが、長さにはばらつきがある。

敲石 (102～113) 棒状のもの(I類)2点と円形のもの(II類)10点に大別される。

I類のうち102は先端部に明瞭な敲打痕が認められる。103は両面に各2か所の敲打痕がみられる。

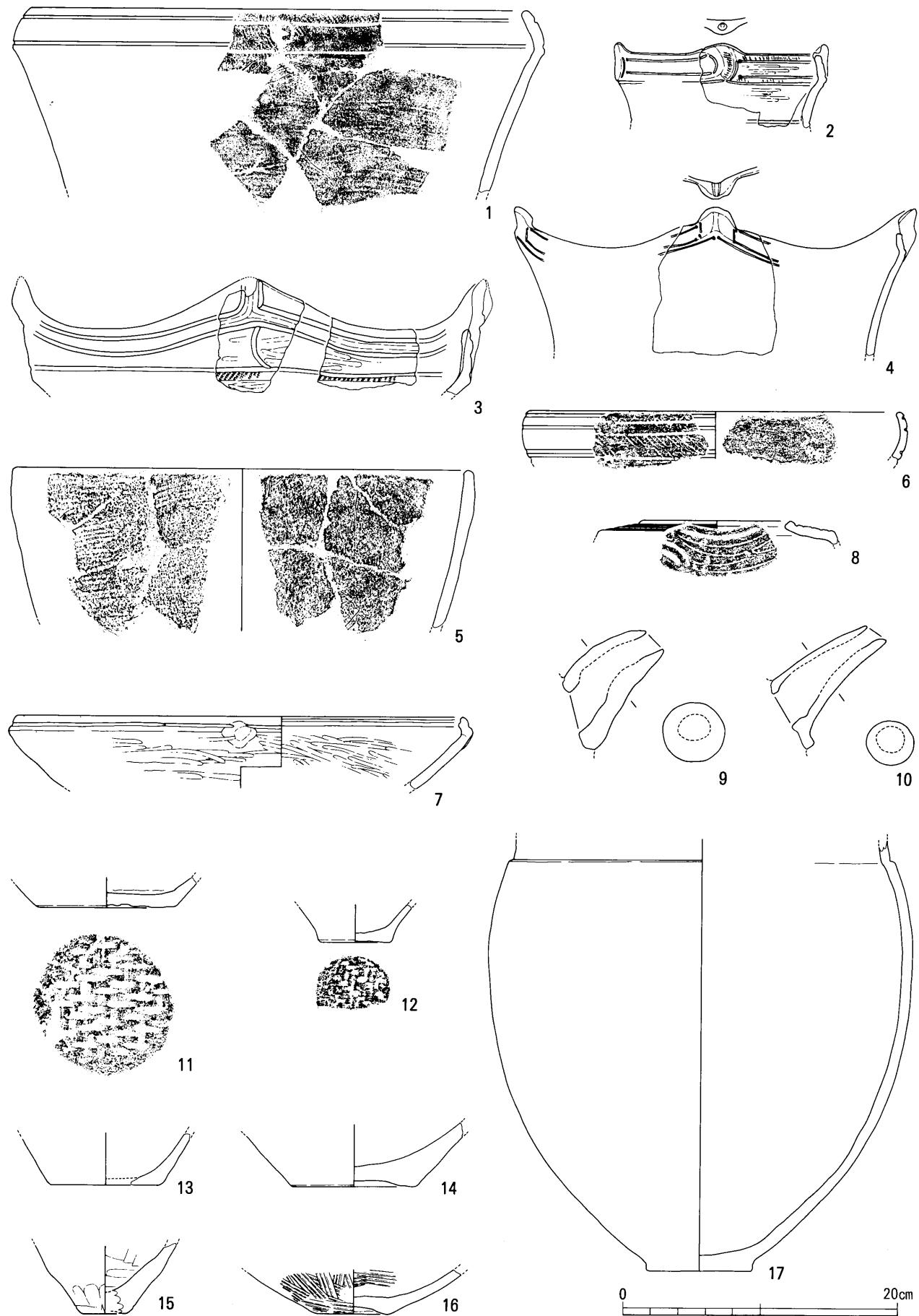
II類は、さらに全周に敲打による面が形成されるもの(II-a類)とそれ以外のもの(II-b類)に分類できる。

104～109の6点がII-a類である。105は一部に敲打が途切れる部分があるが本類としておく。104～108は、両面にも敲打痕がみられる。108は、敲打後に全面を磨面として使用しているため敲打痕が不明瞭となる。また、104～106と109は、両面を磨面として使用している。なお、104は受熱している。

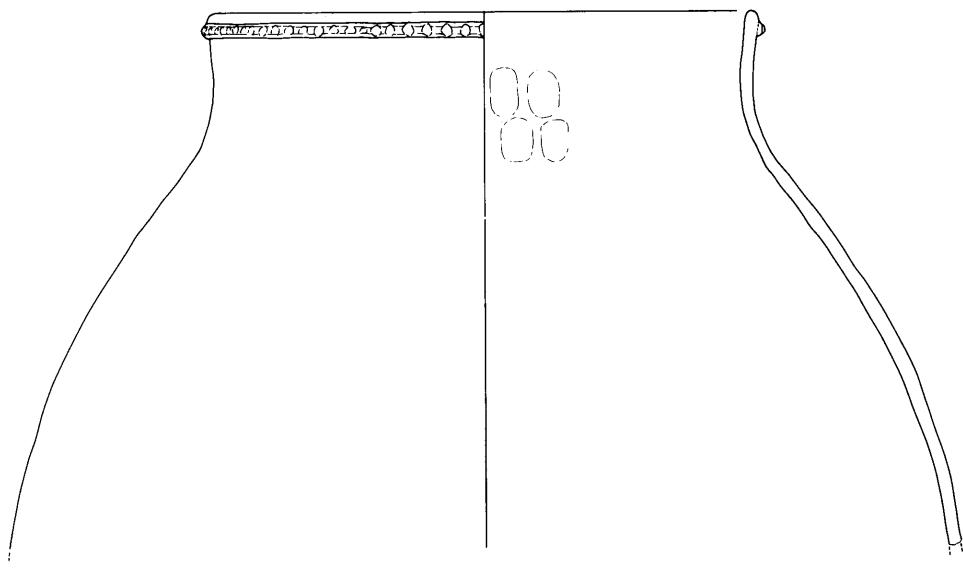
110～113がII-b類で、このうち110は両面を磨面として使用している。a類と比較してやや小型の礫を利用している。

石棒 (97) ほぼ中央で割れているほか欠損が著しい。全体に研磨が施される。緑色片岩製である。

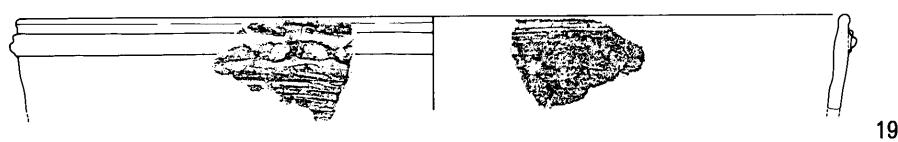
以上、石器・石製品について記述したが、敲石の数量から考えて、本来的にはもっと多くの石器の利用があったとものと考える。



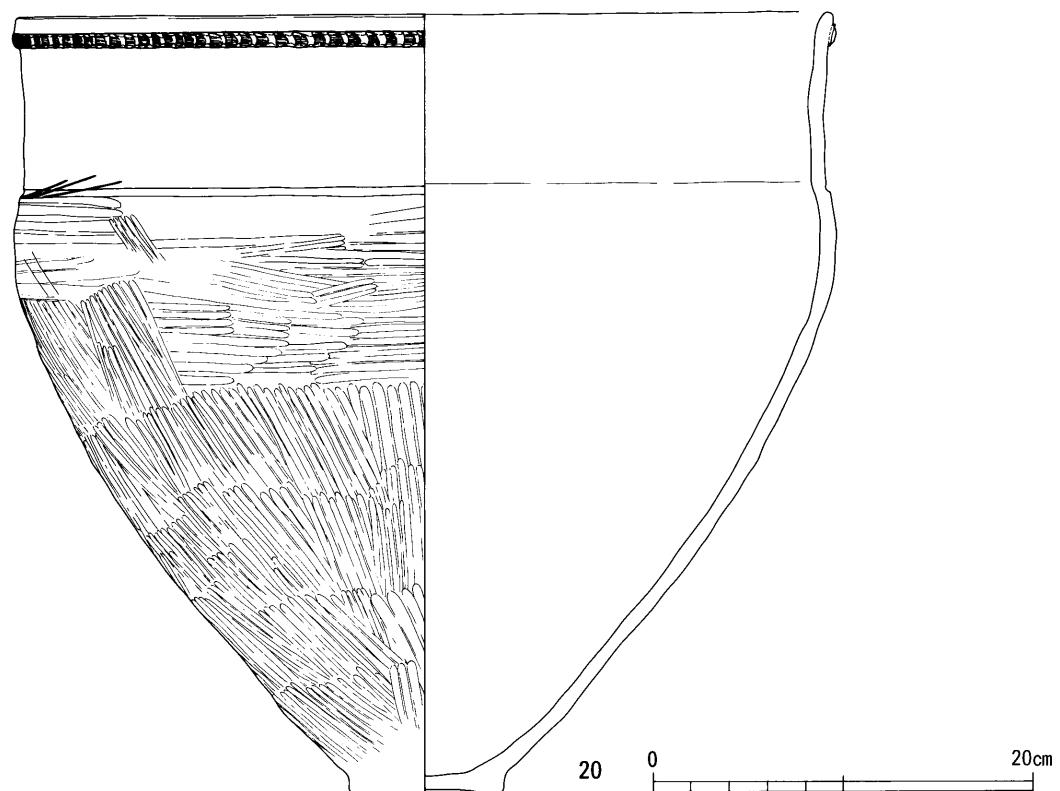
第10図 繩文土器実測図(1) (1 : 4)



18



19

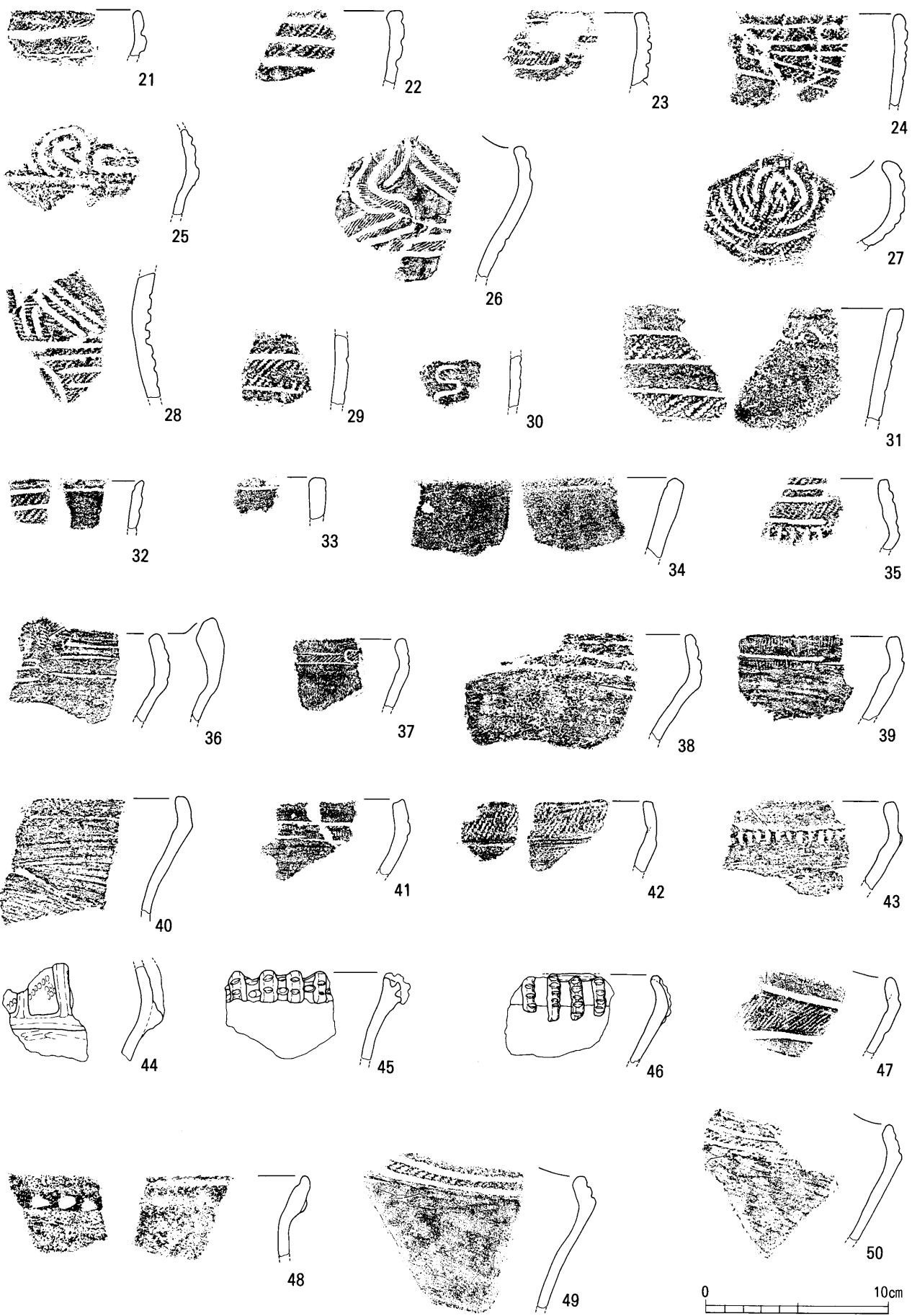


20

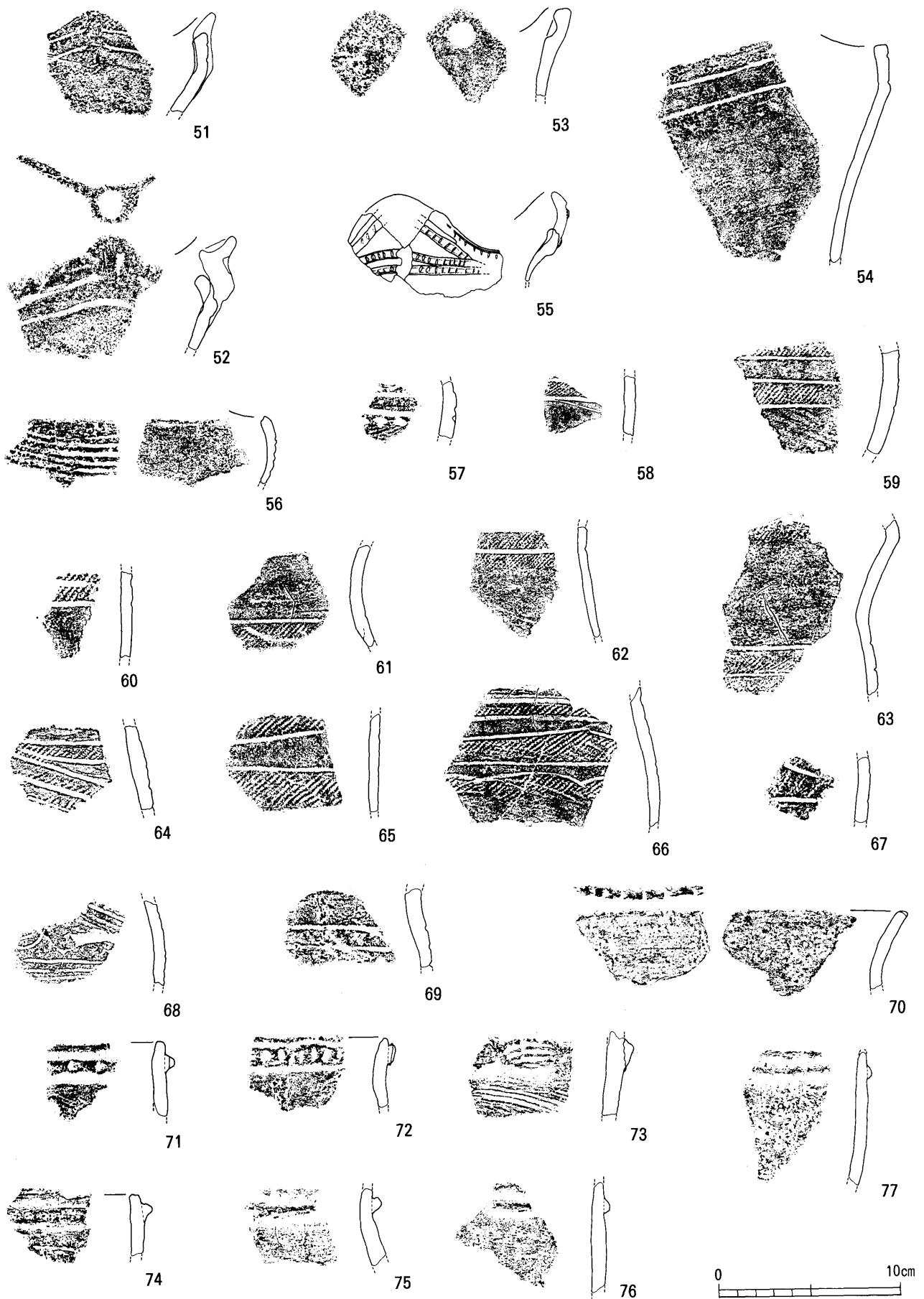
0

20cm

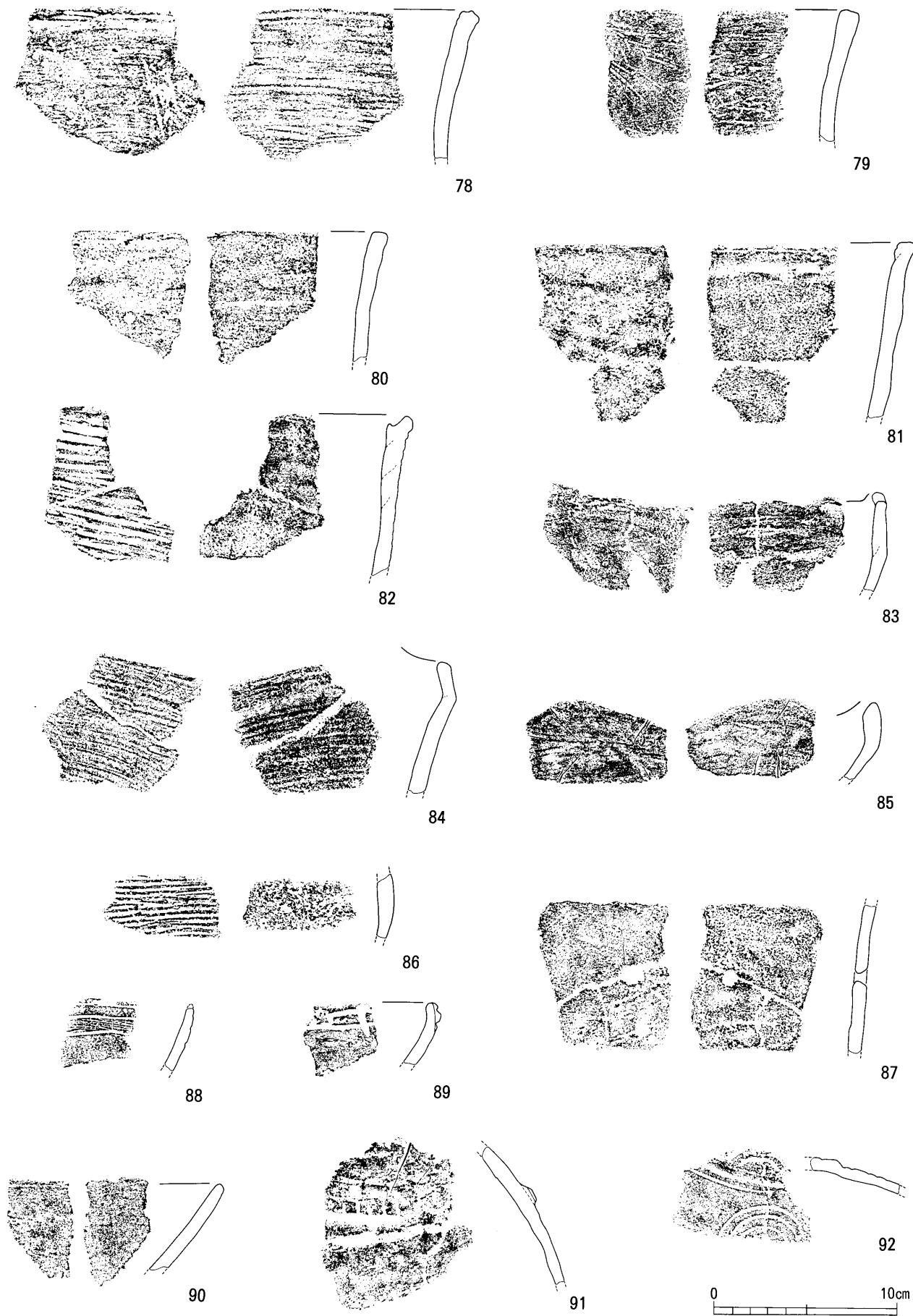
第11図 繩文土器実測図(2) (1 : 4)



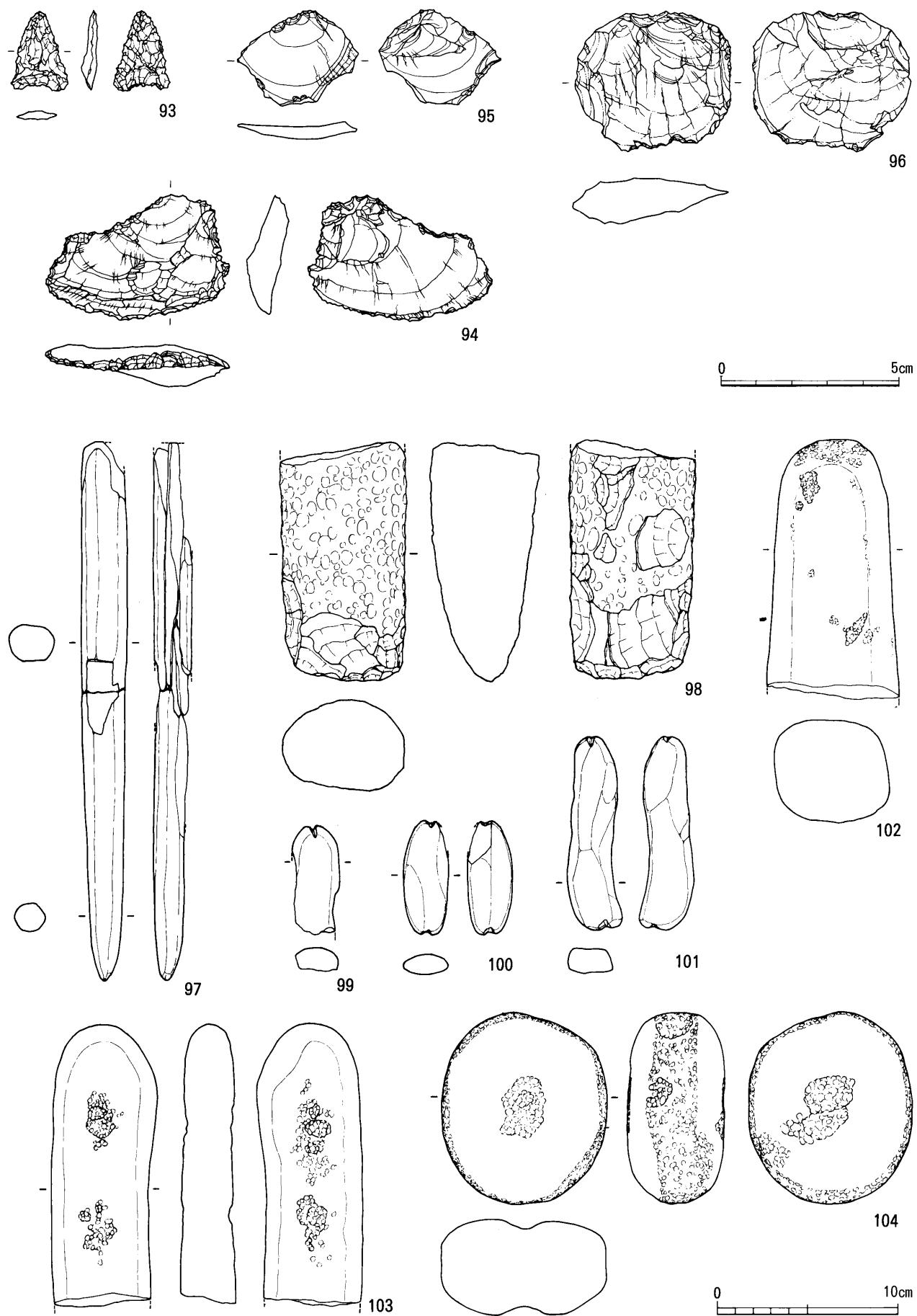
第12図 繩文土器実測図(3) (1 : 3)



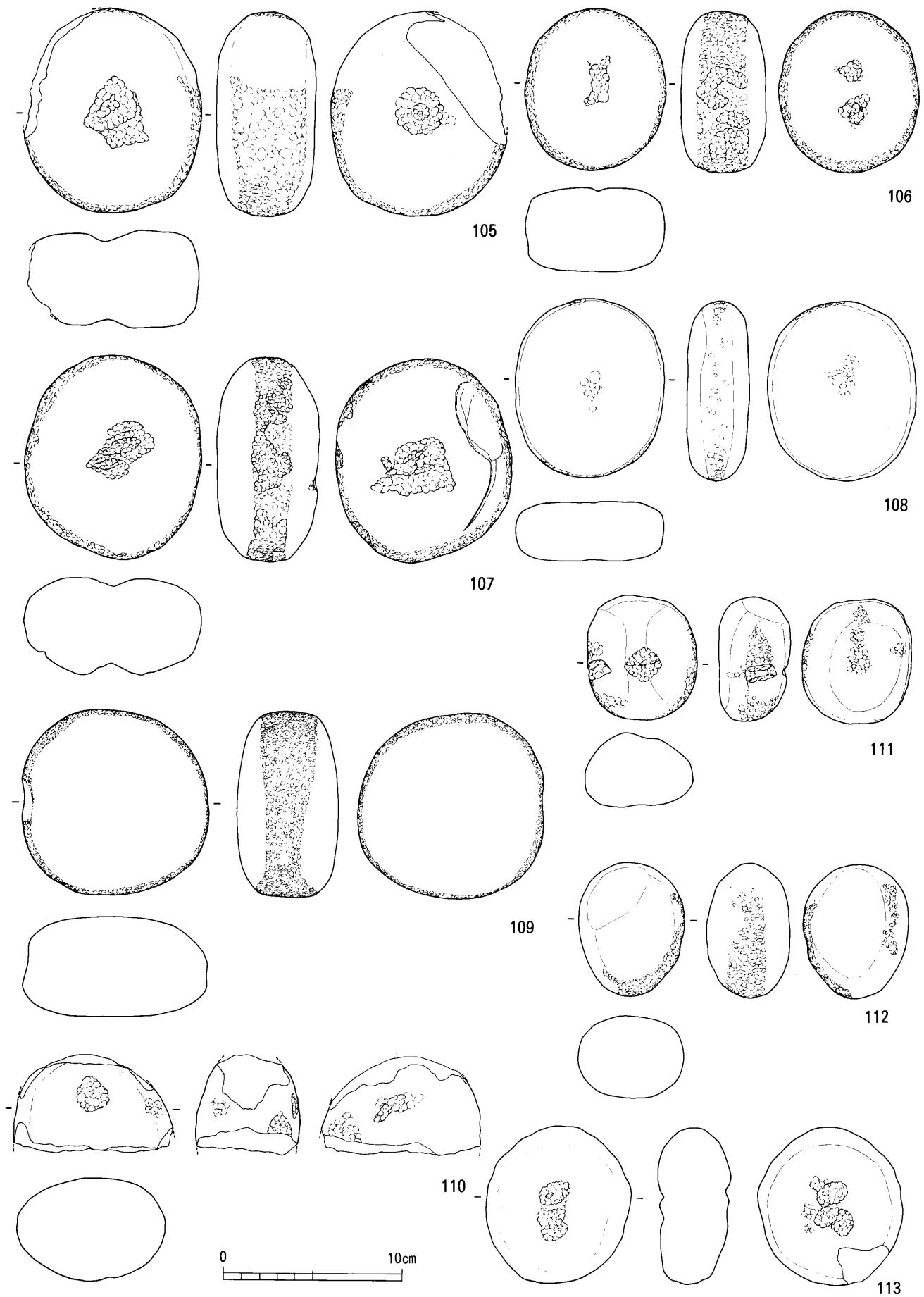
第13図 縄文土器実測図(4) (1 : 3)



第14図 縄文土器実測図(5) (1 : 3)



第15図 石器・石製品実測図 (93~96=2:3、97~104=1:3)



第16図 石器実測図 (1 : 3)

番号	出土位置	器種	調整や文様などの特徴	胎土	色調	残存状況	備考
1	C-T7 包	深鉢	横走沈線と弧文。沈線は末端刺突。地文は縄文。内外面巻貝条痕後ナデ	密	外 内 にぶい赤褐5YR5/4 浅黄2.5Y7/4	口頸部片	口径(36.2)
2	B-Q6 SK26	深鉢	3条の横走沈線とノ字状浮文。沈線は末端刺突。貝殻腹縁圧痕帶。内外面丁寧なナデ。	粗	黒褐10YR3/1	口縁部 1/4	口径(15.6)
3	C-S5 包	深鉢	3条の横走沈線とノ字状の浮文及び沈線文。縄文帯。内面摩滅。	粗	外 内 浅黄2.5Y7/3 灰白2.5Y8/1	口縁部 1/12	口径(36.4)
4	C-M4 SK19	深鉢	3条の横走沈線。沈線は末端刺突。外面摩滅。内面条痕後ナデ	粗	外 内 灰N4/0 灰白2.5Y8/1	口頸部片	口径(29.6)
5	C-R7 SK37	深鉢	外面条痕後ナデ。内面ナデ。	粗	灰白2.5Y8/1	口縁部片	口径(32.8)
6	C-S3 包	鉢	4条の横走沈線。沈線内刺突。沈線束間に擦糸文。内面ナデ。	やや密	灰N5/	口縁部片	口径(27.2)
7	C-N5 Pit	鉢	内外面とも丁寧に研磨。	密	外 内 にぶい黄褐10YR5/3 にぶい黄橙10YR6/4	口縁部 1/8	口径(32.4)
8	C-Q6 包	注口	馬蹄形浮文と沈線。地文は縄文。内面ナデ。	やや密	灰黄褐10YR5/2	口縁部 1/6	口径(10.8)
9	C-N2 Pit	注口	ナデ?	粗	灰白2.5Y8/2	注口部	
10	C-N2 SK17	注口	ナデ?	粗	灰白10Y8/1	注口部	
11	C-T5 包	底部	網代圧痕。	やや粗	外 内 にぶい黄橙10YR7/3 灰黄2.5Y7/2	底部完存	底径10.0
12	C-Q4 Pit	底部	網代圧痕。外面研磨。内面ナデ?。	粗	褐灰5YR4/1	底部7/12	底径5.0
13	C-R7 SK37	底部	摩滅著しく調整不明。	粗	浅黄橙10YR8/3	底部1/4	底径(7.8)
14	C-R5 Pit	底部	摩滅著しく調整不明。	粗	灰白10YR8/2	底部1/4	底径(6.6)
15	C-R8 Pit	底部	外面ナデ。内面工具ナデ。	やや粗	外 内 灰白10YR7/1 褐灰10YR5/1	底部1/4	底径(3.2)
16	C-K3 SK15	底部	内外面とも条痕後ナデ。	粗	にぶい橙5YR6/3	底部3/4	底径5.0
17	C-R8 SX35	深鉢	内外面ナデ。	やや粗	外 内 黒褐7.5YR2/2 黒7.5YR2/1	口縁欠 体部1/2	底径7.5
18	C-R8 SX35	壺	口縁部に刻目突帶。内外面ナデ。	やや粗	外 内 にぶい橙7.5YR6/4 にぶい黄褐10YR5/3	口頸部片	口径(29.0)
19	C-R8 SX34	深鉢	口縁部に刻目突帶。内外面とも二枚貝条痕後ナデ。	やや粗	外 内 暗灰黄2.5Y4/2 暗灰N3/	口縁部片	口径(44.0)
20	C-R8 SX34	深鉢	口縁部に刻目突帶。外面粗いミガキ内面ナデ。	やや粗	外 内 灰黄2.5Y7/2 黄灰2.5Y5/1	口縁2/3 欠	口径42.8底径8.0 器高41.0
21	C-S8 包	深鉢	縄文地に2条の横走沈線。内面ナデ	やや粗	外 内 にぶい橙7.5YR5/4 灰黄2.5Y7/2	口縁部片	
22	C-S2 包	深鉢	縄文地に3条の沈線。内面ナデ。	やや密	外 内 にぶい黄橙10YR7/2 灰黄2.5Y7/2	口縁部片	
23	C-T4 SH31	深鉢	縄文地に沈線文。内面ナデ。	やや粗	にぶい橙5YR6/3	口縁部片	
24	C-S5 Pit	深鉢	縄文地に沈線文。内面ナデ。	粗	灰褐7.5YR4/2	口縁部片	
25	C-S5 包	深鉢	口縁部下端に段をもつ。入組状の円弧文。摩滅著しい。	粗	浅黄橙10YR8/3	口縁部片	
26	C-S5 包	深鉢	沈線間に縄文。外面丁寧に研磨。内面ナデ。	やや密	外 内 黒褐2.5Y3/1 灰白5Y8/1	口縁部片	
27	C-T3 包	深鉢	縄文地に円弧文。内面ナデ。	やや粗	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部片	
28	C-P2 包	深鉢	縄文地に垂下及び斜行沈線と弧文。括部に横走沈線。内面ナデ。	やや粗	灰白2.5Y8/2	頸体部片	
29	C-R3 包	深鉢	縄文地に2条の沈線。内面ナデ。	やや粗	外 内 灰白7.5Y8/1 灰白5Y8/2	体部片	
30	C-O4 包	深鉢	縄文地に蛇行沈線。内面ナデ。	やや密	10YR6/4	体部片	
31	C-L3 包	深鉢	4条の沈線。沈線間に縄文。内面結節縄文、ナデ。	やや粗	外 内 灰白2.5Y8/2 橙7.57/6	口縁部片	
32	C-O6 Pit	深鉢	2条の沈線。地文は縄文。内面沈線ナデ。	やや密	にぶい黄橙10YR6/4	口縁部片	
33	C-Q4 Pit	深鉢	外面1条の沈線。貝殻腹縁圧痕?。内面ナデ。	粗	灰白2.5YR8/2	口縁部片	
34	C-Q6 Pit	深鉢	外面丁寧なナデ。内面ナデ。内面に沈線と刻み帶。	やや粗	にぶい黄橙10YR6/3	口縁部片	
35	C-Q4 Pit	深鉢	縄文地に3条の横走沈線と刻み帶。摩滅激しい。	粗	灰白2.5Y8/1	口縁部片	
36	C-M5 包	深鉢	3条の横走沈線とノ字状浮文。外面研磨。内面丁寧なナデ。	密	外 内 灰黄褐10YR4/2 にぶい黄褐10YR5/3	口縁部片	
37	C-R7 包	深鉢	2条の横走沈線と弧文。沈線間に縄文。外面研磨。内面括部に強いナデ	密	灰黄褐10RR5/2	口縁部片	
38	C-O6 包	深鉢	2条の横走沈線間に連弧文。摩滅著しい。	やや粗	外 内 にぶい黄橙10YR6/4 にぶい黄橙10YR7/4	口縁部片	
39	C-N6 Pit	深鉢	1条の横走沈線。沈線は末端刺突。条線状の擬縄文。外面条痕後ナデ。内面括部に強いナデ。	やや密	外 内 にぶい橙7.5YR6/4 にぶい黄橙10YR7/4	口縁部片	

表2 縄文土器観察表(1)

番号	出土位置	器種	調整や文様などの特徴	胎 土	色 調	残存状況	備 考
4 0	C-M5 包	深鉢	1条の横走沈線。外面条痕後ナデ。内面ナデ。	密	外 にぶい褐7.5YR5/3 内 にぶい橙7.5YR6/4	口縁部片	
4 1	C-L4 SK15	深鉢	2条の横走沈線間に巻貝擬縄文。外面条痕後ナデ。内面ナデ。	粗	にぶい黄2.5Y6/3	口縁部片	
4 2	C-R5 Pit	深鉢	口縁部外面に縄文帯。内外面丁寧なナデ。	やや粗	灰白10YR8/2	口縁部片	
4 3	C-R5 包	深鉢	口縁部下端に刻み帯。外面ナデ。内面摩滅著しい。	粗	外 灰黄褐10YR6/2 内 灰白7.5YR8/1	口縁部片	
4 4	C-R3 包	深鉢	縦位の棒状浮文とそれを繋ぐ横位の隆帶。地文に縄文。外面研磨状のナデ。内面ナデ。	やや密	外 褐灰10YR4/1 内 にぶい黄橙10YR7/3	口縁部片	
4 5	C-R2 包	深鉢	連続する縦位の浮文。浮文上及び浮文間に刺突。内外面研磨状のナデ。	やや粗	外 灰黄2.5Y6/2 内 暗灰黄2.5Y5/2	口縁部片	
4 6	C-P3 包	深鉢	縦位の棒状浮文とそれを繋ぐ横位の隆帶。浮文上に刻み。内外面ナデ。	やや粗	灰白2.5Y8/2	口縁部片	
4 7	C-R8 包	深鉢	口縁部肥厚。口縁下端に刻み。内面沈線。	粗	外 にぶい黄橙10YR7/2 内 灰白2.5Y8/1	口縁部片	
4 8	C-Q2 Pit	深鉢	2条の沈線間に縄文。内外面ナデ。	粗	浅黄橙10YR8/3	口縁部片	
4 9	C-R3 包	深鉢	2条の沈線。地文に縄文。外面研磨状のナデ。内面丁寧なナデ。	やや粗	外 褐灰5YR4/1 内 灰黄褐10YR5/2	口縁部片	
5 0	C-S9 包	深鉢	2条の沈線。地文に縄文。内外面研磨。	密	黄灰2.5Y4/1	口縁部片	
5 1	C-R6 包	深鉢	2条の沈線。地文に縄文。内面丁寧なナデ。外面摩滅。	やや密	外 灰黄褐10YR4/2 内 褐灰10YR5/1	口縁部片	
5 2	C-R5 包	深鉢	括れ部上下に沈線。地文に巻貝擬縄文?。ノ字上浮文上に刺突。	やや密	外 灰黄褐10YR6/2 内 灰白10YR8/2	口縁部片	
5 3	C-Q2 包	深鉢	内面に波頂部に刺突。内面丁寧なナデ。外面摩滅。	密	外 浅黄2.5Y7/3 内 にぶい黄2.5Y6/3	口縁部片	
5 4	C-R6 包	深鉢	2条の沈線。沈線の上下に縄文帯。内外面とも丁寧なナデ。	密	外 にぶい褐7.5YR5/3 内 浅黄橙10YR8/4	口縁部片	
5 5	C-Q2 包	深鉢	刻みを伴う隆帶による施文。摩滅著しい。	やや粗	灰黄褐10YR5/2	口縁部片	
5 6	C-R7 包	深鉢	外面条線状の沈線。内面丁寧なナデ	粗	灰白10YR8/2	口縁部片	
5 7	A-Y11 包	深鉢	2条の沈線と刺突列。地文は縄文。摩滅著しい。	やや粗	外 灰黄2.5Y7/2 内 灰白2.5Y8/2	体部片	
5 8	C-M3 SK36	深鉢	2条の沈線間に縄文。外面丁寧な研磨。内面ナデ。	粗	浅黄2.5Y7/3	体部片	
5 9	C-O4 包	深鉢	3条の沈線。沈線間に縄文。内外面とも条痕後ナデ。	やや密	淡黄2.5Y8/3	体部片	
6 0	C-S5 Pit	深鉢	2条の沈線。地文は縄文。内外面研磨。	やや粗	灰褐7.5YR5/2	体部片	
6 1	C-U9 Pit	深鉢	縄文地に沈線。内外面ナデ。弧文状のものはキヌ。	粗	灰黄2.5Y6/2	頸体部片	
6 2	C-K3 SK15	深鉢	縄文地に沈線。外面ナデ。内面条痕後ナデ。	粗	灰白2.5Y8/2	体部片	
6 3	C-Q5 Pit	深鉢	口縁部縄文帯。体部縄文地に沈線。内外面丁寧なナデ。	粗	褐灰10YR5/1	頸体部片	
6 4	C-L3 包	深鉢	縄文地に沈線。内面丁寧なナデ。	やや密	にぶい黄橙10YR7/4	体部片	
6 5	C-L3 包	深鉢	縄文地に沈線。摩滅激しい。	密	外 褐10YR5/6 内 浅黄橙10YR8/4	体部片	
6 6	P-Q6 SK26	深鉢	縄文地に沈線。幅の違う連弧文。内面摩滅。	粗	灰褐7.5YR5/2	体部片	
6 7	C-R5 Pit	深鉢	縄文地に沈線。内面ナデ。	粗	にぶい橙5YR7/4	体部片	
6 8	C-S5 Pit	深鉢	沈線文。内面ナデ。	やや粗	浅黄2.5Y7/3	体部片	
6 9	C-Q6 Pit	深鉢	縄文地に沈線。内面丁寧なナデ。	粗	にぶい褐7.5YR6/3	体部片	
7 0	C-O4 包	深鉢	口縁端部に刻み。内外面ナデ。	やや粗	外 にぶい黄橙10YR6/3 内 灰白10YR8/2	口縁部片	
7 1	C-U7 Pit	深鉢	口縁部に刻目突帶。内外面ナデ。	粗	灰白10YR8/2	口縁部片	
7 2	A-V12 Pit	深鉢	口縁部に刻目突帶。内外面ナデ。	やや粗	外 にぶい赤褐5YR5/4 内 にぶい橙5YR6/4	口縁部片	
7 3	C-M2 包	深鉢	二枚貝による刻目突帶。外面二枚貝	粗	にぶい黄橙10YR6/4	体部片	
7 4	C-U7 Pit	深鉢	口縁部に素文突帶。内外面ナデ。条痕。内面ナデ。	密	外 にぶい黄橙10YR7/3 内 灰5Y4/1	口縁部片	
7 5	C-R8 Pit	深鉢	素文突帶。内外面ナデ。	やや密	外 浅黄橙7.5YR8/4 内 褐灰7.5YR6/1	頸部片	
7 6	C-R8 Pit	深鉢	素文突帶。外面ケズリ。内面ナデ。	やや粗	灰白2.5Y8/2	頸部片	
7 7	C-R8 包	深鉢	口縁部に素文突帶。外面ケズリ。内面ナデ。	粗	外 灰白2.5Y8/1 内 灰黄2.5Y7/2	口頸部片	

表3 縄文土器観察表(2)

番号	出土位置	器種	調整や文様などの特徴	胎土	色調	残存状況	備考
7 8	拡張部包	深鉢	内外面とも巻貝条痕後ナデ。	やや密	外 内 にぶい黄褐10YR5/3 にぶい黄橙10YR6/4	口縁部片	
7 9	C-O6 Pit	深鉢	内外面とも条痕後ナデ。	粗	黄褐2.5Y5/3	口縁部片	
8 0	C-P2 包	深鉢	内外面ともナデ。	やや密	外 内 灰黄褐10YR5/2 灰黄2.5Y7/2	口縁部片	
8 1	C-R8 包	深鉢	外面摩滅。内面ナデで強い横方向のナデ有り。口縁端部に沈線状のもの	粗	灰黄2.5Y6/2	口縁部片	
8 2	C-M3 包	深鉢	外面二枚貝条痕。内面ナデ。口縁端部に強いナデ。	やや密	外 内 明赤褐2.5YR5/6 にぶい黄橙10YR6/4	口縁部片	
8 3	C-M3 SK36	深鉢	半円状突起。内外面ナデ。	粗	にぶい黄橙10YR6/3	口縁部片	
8 4	C-Q5 包	深鉢	内外面条痕後ナデ。	粗	外 内 灰白2.5Y8/2 黒褐2.5Y3/1	口縁部片	
8 5	C-S2 包	深鉢	内外面研磨。	密	外 内 褐灰10YR4/1 灰黄褐10YR5/2	口縁部片	
8 6	C-Q2 包	深鉢	外面二枚貝条痕。内面摩滅。	粗	黄褐2.5Y5/3	体部片	
8 7	C-Q4 Pit	深鉢	摩滅著しい。	やや粗	外 内 にぶい黄橙10YR7/3 黒褐7.5YR3/1	体部片	補修孔有り
8 8	C-S2 SK30	鉢	3条の沈線。沈線間に条線状の擬繩文。外面研磨。内面丁寧なナデ。	やや粗	黄灰2.5Y4/1	口縁部片	
8 9	C-U7 Pit	鉢	2条の横走沈線とこれを切る縱位の沈線。内外面研磨。	密	外 内 灰黄褐10YR4/2 にぶい黄橙10YR6/3	口縁部片	
9 0	C-M3 SK36	鉢	内外面とも丁寧なナデ。	粗	灰白2.5Y8/1	口縁部片	内面に赤色顔料付着
9 1	C-N2 Pit	壺	刻目突帶。内外面ナデ。	粗	灰褐7.5YR4/2	体部片	
9 2	C-R7 SK37	注口	馬蹄形の浮文及び沈線文。外面丁寧なナデ。内面ナデ。	粗	褐灰5YR4/1	肩部片	

表4 繩文土器観察表(3)

番号	器種	出土位置	石材	遺存状況	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	備考
9 3	石鏃	C J 3・包	サヌカイト	完存	2.2	1.6	0.4	1.02	
9 4	削器	A V13・包	チャート	完存	3.4	5.05	1.15	14.53	
9 5	二次加工痕有剥片	B J 25・包	チャート	完存	2.8	2.5	0.7	4.21	
9 6	使用痕有剥片	—	下呂石	完存	3.9	4.3	1.4	17.83	
9 7	石棒	B Q 25・包	緑色片岩	欠損有	29.5	2.5	2.1	220	
9 8	石斧未成品	C Q 7・包	—	欠損有	13.0	6.9	5.9	780	
9 9	切目石錐	B I 22・包	—	欠損有	6.0	2.5	1.3	25	
1 0 0	切目石錐	C N 4・包	—	完存	6.3	2.5	1.1	20	
1 0 1	切目石錐	C R 5・包	—	完存	10.6	3.0	1.4	65	
1 0 2	敲石	B F 22・包	—	完存	14.2	7.3	5.6	1050	
1 0 3	敲石	B L 23・包	—	完存	15.4	5.6	3.0	445	
1 0 4	敲石	C O 5・包	—	完存	10.5	9.0	5.2	750	受熱痕跡有
1 0 5	敲石	C S 8・包	—	欠損有	11.4	9.8	5.4	880	
1 0 6	敲石	C N 4・包	—	完存	9.1	7.8	4.8	545	
1 0 7	敲石	C O 4・包	—	完存	11.3	9.8	5.7	870	
1 0 8	敲石	C S 4・包	—	完存	10.0	8.3	3.4	470	
1 0 9	敲石	C S 7・包	—	完存	10.4	10.4	5.5	1000	
1 1 0	敲石	C N 1・包	—	欠損有	5.3	8.9	5.8	360	
1 1 1	敲石	B O 25・包	—	完存	6.9	6.1	4.1	240	
1 1 2	敲石	C P 1・包	—	完存	7.5	5.9	4.6	260	
1 1 3	敲石	C Q 2・包	—	完存	8.8	8.1	4.1	375	

表5 石器・石製品観察表

2 飛鳥・奈良時代の遺構・遺物

この時代の遺構には、竪穴住居3棟、掘立柱建物6棟、土坑3基がある。

(1) 竪穴住居

S H 9 (第17図) 調査区の北寄りの位置で竪痕跡部分を中心に竪穴住居を部分的に検出した。住居の大部分は削平されたと考えられ詳細は不明である。検出した規模は長辺2.8m×短辺1.8mの平面楕円形をなし、検出面からの深さは約15cmを測り、埋土には炭が混じる。竪は東壁に付設され、そこから北側に向かって炭化物粒を含む焼土が広がる。竪の規模は径0.8m程度の規模で、袖に相当する箇所には芯材に用いられたと考えられる石が右に5個、左に2個確認された。石はS H 31の場合と同様、立った状態で検出された。底部は地山をわずかに掘り込んで据え置かれており、竪構築時に近い状況を残しているものと考えられる。竪左側で径約0.2m、床面からの深さ約15cmの柱穴を検出した。一基のみであるが、主柱穴の可能性がある。その他、貯蔵穴、周溝等の施設は確認されなかった。

重複する掘立柱建物S B 6との新旧は、重複関係からS H 9が古いと判断される。

遺物は、少量の土師器片が出土したのみである。

S H 19 (第17図) 調査区中央付近で検出した。遺存状況が極めて悪いため詳細は不明であるが、現状では竪穴住居の可能性が考えられる遺構である。平面不定形をなす。復元した場合、一辺約3.0m以上の規模になると考えられる。検出面からの深さは約10cmを測る。住居北側に焼土に覆われた平面楕円形の小土坑状の窪みを伴っており、住居に付設された竪痕跡の可能性が考えられる。竪痕跡の埋土は、焼土の混入した黄色粘質土と黒色粘質土との互層で構成される。主柱穴、貯蔵穴、周溝等の施設は確認されなかった。

須恵器、土師器が出土しており8世紀前半代の住居と考えられる。

S H 19 出土遺物 (第20図 114~117) 須恵器杯蓋(114)・杯身(115)、土師器椀(116)・甕(117)がある。

114は口縁端部を下方に折り曲げ、外端に面をなす。115は有台杯である。腰部の張り出しが弱く、

丸みを帯びる。高台は低く、わずかに外方に開く。
美濃須衛産と考えられる^①。

土師器椀(116)は体部外面下間にケズリ、口縁端部にヨコナデを施す。甕(117)は口縁端部を上方へ引き出す。外面に縦方向、内面に横方向のハケメを施す。

S H 31 (第18図) 調査区南端の位置で検出した。東西約3.85m×南北約4.0mの規模を持ち、平面形は概ね方形だが東辺側の隅は丸味をもつ。検出面からの深さは約10cmを測る。住居の方向は南北軸で、N 5° Wをとる。竪痕跡は東壁中央部分で検出した。竪痕跡の周辺には径約1.7mの範囲に焼土が広がる。袖に相当する箇所に芯材に用いられたと考えられる石が右に2個、左に1個確認された。石は長さ20cm程の砂岩であり大きくはない。遺跡近くの員弁川で採取されたものと考えられる。また、石は内傾して立った状態にあり、底部は地山面を掘り窪めて据えられている。竪中央部からは土師器甕が出土した。これらの状況は、住居廃絶時の竪の廃棄状況を示しているものと考えられる。

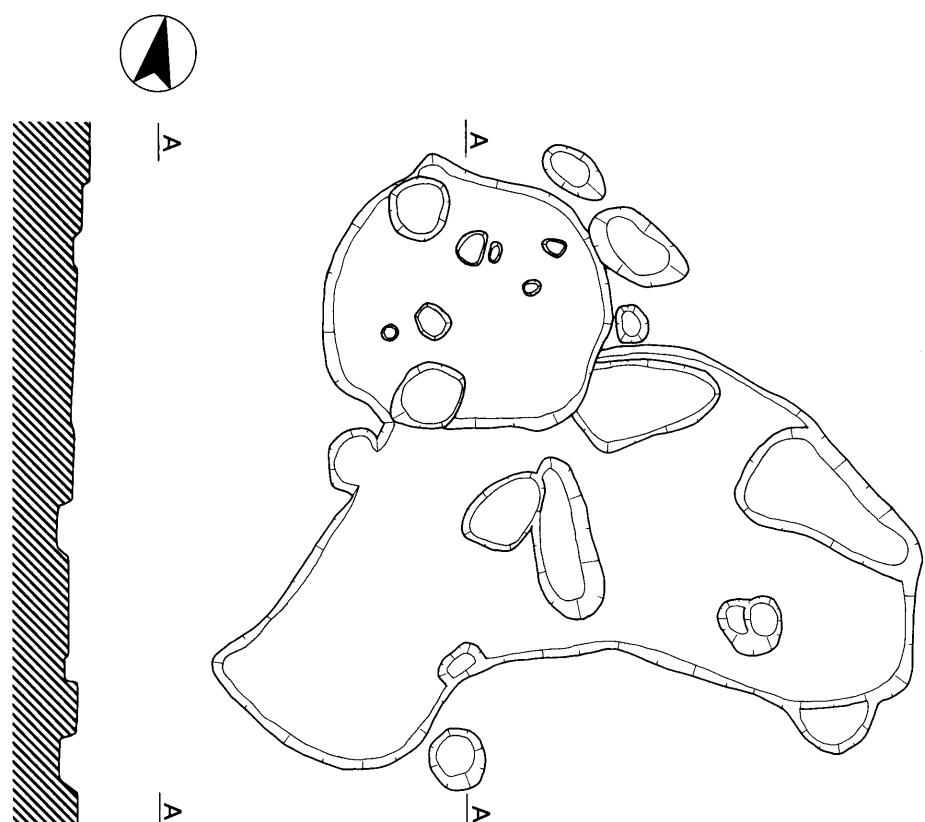
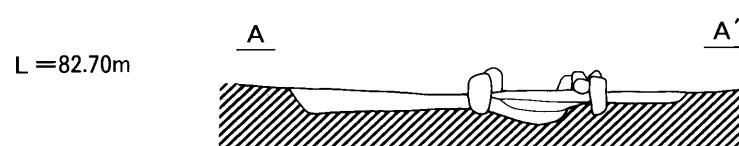
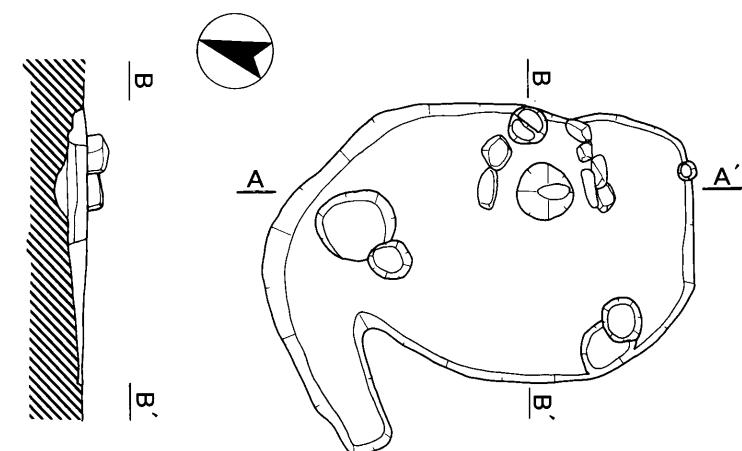
竪右側の長軸約1.7m×短軸約1.1mの小土坑は貯蔵穴と考えられる。また、住居西側の両隅で検出した径約0.3~0.5m、床面からの深さ約25cmのピットは主柱穴である可能性がある。

竪以外からは、土師器甕が出土した。

S H 31 出土遺物 (第20図 118~121) 土師器甕が4個体分出土した。このうち118・120は竪からの出土である。118は小型の甕で、わずかに肥厚した口縁部は外方に開き、端部外端に面をなす。調整は体部外面にヨコナデ、内面にケズリを施す。119は口縁部が大きく開く。体部外面上半をタテハケ、下半をケズリ、内面は横方向のハケメを施す。120は口径が大きく、体部が直線的に延びるため、長胴甕と考えられる。体部外面は縦方向のハケメ、内面はケズリが施される。121は体部と口縁部との境に沈線が巡る。口縁端部外端の面は下方にも広がる。

(2) 掘立柱建物

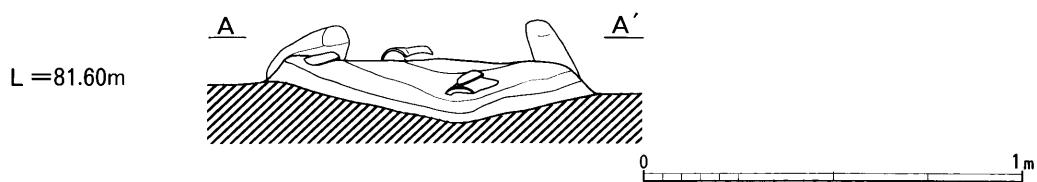
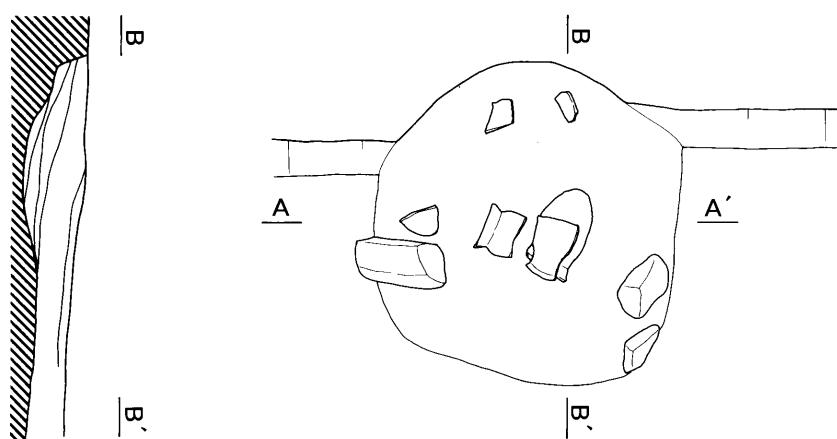
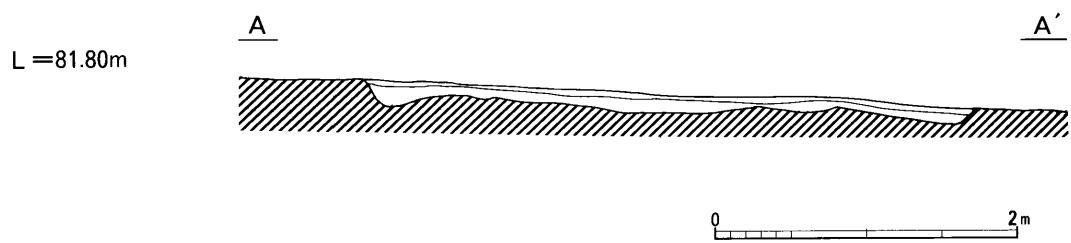
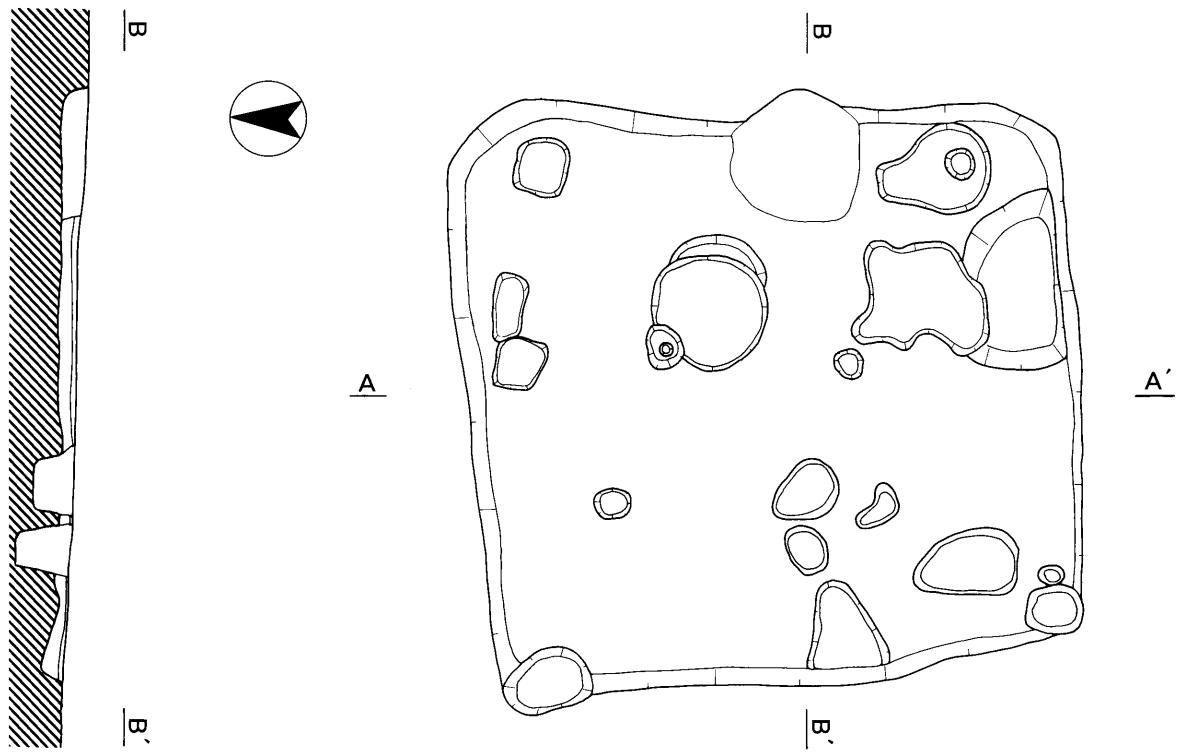
S B 13 (第19図) 調査区の東壁際で検出した南北棟の側柱建物である。棟方向はN 35° Wをとる。桁行4間×梁行1間分を検出したが、後述するS B 20等と同様に、建物の東側部分は調査区外へ延びる。



$L = 82.50\text{m}$

0 2m

第17図 積穴住居S H 9・19実測図 (1 : 50)



第18図 壁穴住居SH31 (1:50) および竈実測図 (1:20)

確認された建物規模は、桁行7.5m、梁行2.25m以上である。柱間は、桁間が $2.25m + 1.5m + 1.5m + 2.25m$ と両端が広くなる、梁間は2.25mを測る。柱掘形は、径0.3~0.8mの平面不整円形をなし、検出面からの深さは20~50cmとばらつきが見られる。柱痕跡は確認されなかった。

遺物は、柱掘形から土師器が出土した。

S B 13 出土遺物（第20図 122）土師器甕（122）は、端部を丸くおさめる肥厚した口縁部のみ残存する。調整は外面に縦方向、内面に横方向のハケメが施される。

S B 16（第19図） 調査区のほぼ中央の位置で検出した側柱建物である。建物規模は桁行3間×梁行2間、柱間は桁間が西側柱筋で $1.8m + 2.1m + 1.8m$ 、東側柱筋で $2.0m + 1.3m + 2.4m$ 、梁間は $1.8m + 2.1m$ となる。南北棟で棟方向はN 25° Wをとる。柱掘形は径0.2~0.4mの平面円形をなす。検出面からの深さは30~40cmを測る。柱痕跡は確認されなかった。

出土遺物は土師器甕が1点ある。

S B 16 出土遺物（第20図 123）土師器甕（123）の口縁部は直線的に外方に開き、端部外端に面をなす。器壁は全体的に薄手である。

S B 20（第19図） 調査区の東端で検出した桁行4間×梁行1間以上の南北棟である。棟方向は、長軸方向でN 30° Wをとる。建物規模は桁行7.9m、梁行1.8m、柱間は桁間が北から $2.2m + 1.3m + 2.2m + 2.2m$ 、梁間が1.8mである。柱掘形は平面略円形をなし、径約0.3~0.6m、検出面からの深さは20~40cmを測る。柱掘形の埋土は褐色系を呈し、須恵器小片が出土した。柱痕跡は確認されなかった。

S B 21（第19図） S B 20の南側の位置で検出した桁行5間×梁行2間以上の南北棟である。棟方向は、南北軸でN 30° Wをとる。S B 20とほぼ直列に並び、北側部分はS B 20と重複する。建物規模は桁行8.3m、梁行3.6m以上になると考えられる。柱間は桁間が北から $1.8m + 1.45m + 1.8m + 1.8m + 1.45m$ 、梁間が1.8m等間である。柱掘形は、一辺約0.3~0.7mの平面略方形をなし、検出面からの深さは15~30cmを測る。柱掘形の埋土は黒褐色系を呈し、須恵器小片が出土した。柱痕跡は確認されなかった。

S B 22（第19図） 調査区の東際壁で桁行5間、梁

行1間分を検出した南北棟である。建物の東側は調査区外へ延びる。棟方向はN 6° Wをとる。確認された建物規模は、桁行8.25m、梁行1.55m以上、柱間は、桁間が $1.8m + 1.55m + 1.55m + 1.8m$ 、梁間が1.55mである。柱掘形は、平面不整円形で、径0.3~0.5m、検出面からの深さは20~40cmを測る。埋土中から須恵器、土師器が出土した。

S B 22 出土遺物（第20図 124・125）須恵器杯蓋（124）と土師器甕（125）がある。

須恵器杯蓋（124）の口縁端部は下方に折り曲げられる。頂部はロクロヘラケズリされ、口縁端部との境に狭い面をなす。

土師器甕（125）の口縁部は直線的に外方に開き、端部は強いヨコナデにより外端に面をなす。上方へつまみ上げられるというより、突出する感じである。

S B 29（第21図） S B 28の西側に隣接して検出された桁行2間×梁行2間の総柱建物である。建物方向は、南北軸でN 28° Wをとる。建物規模は桁行4.2m、梁行4.2mを測る。柱間は東西側柱については中央の柱穴が明確にされなかつたため不明であるが、南北側柱の柱間は2.1mを測る。柱掘形は平面不整形で径0.4~0.7m、検出面からの深さは40cm前後を測る。柱痕跡は南東隅の柱穴で確認され、径約15cmを測る。

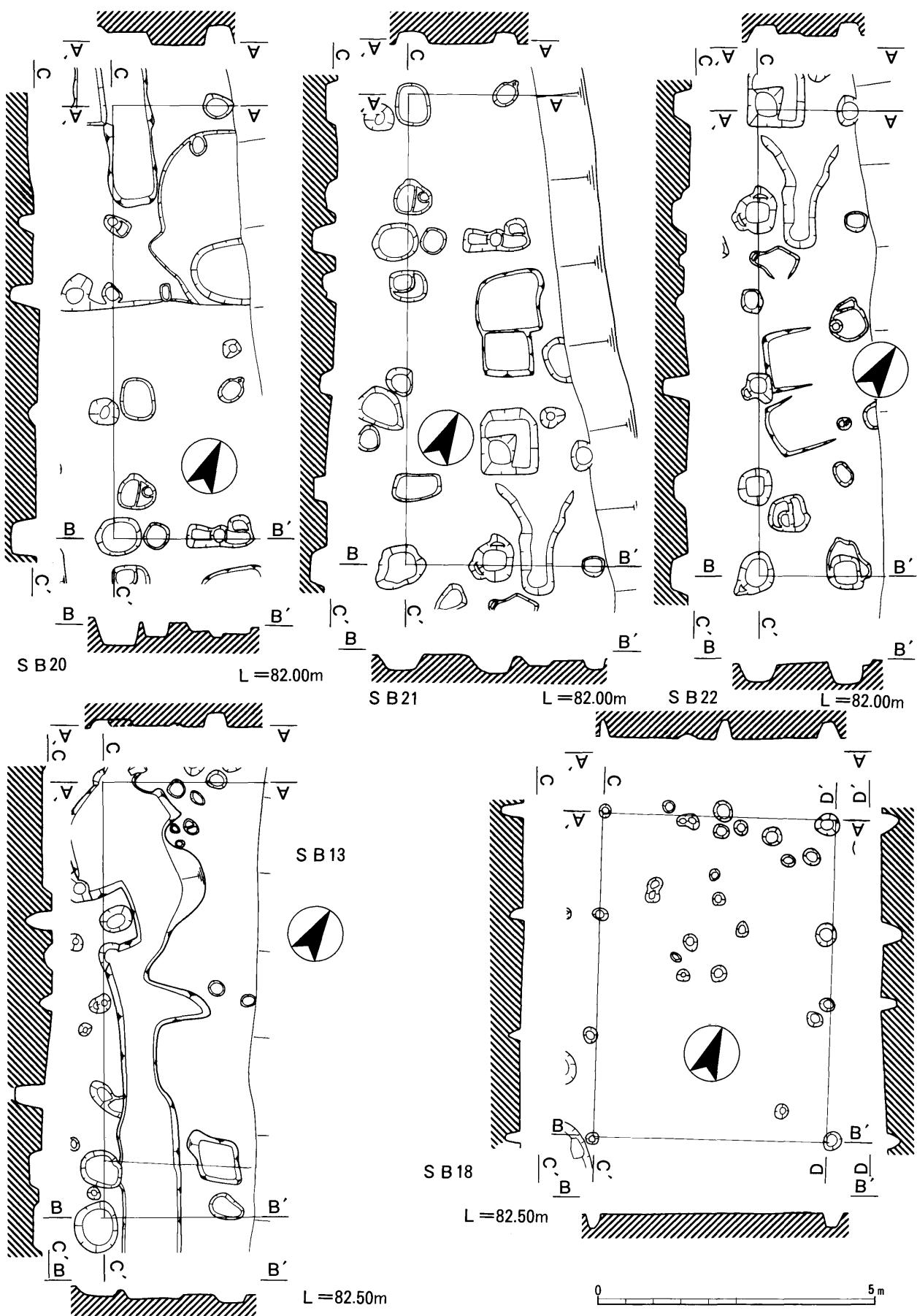
建物時期を判断できる遺物は出土していないが、建物方向から判断してこの時期の建物とした。

（3）土坑

S K 15（第28図） 調査区中央の東壁際で検出した。調査区外へのびるため全体を確認することはできなかつたが、長軸約8.0m、短軸約4.0m以上の規模をもつ。検出面からの深さは20~25cmを測る。平面形は北側は不定形であるが、南隅はほぼ直角をなす。遺構の性格として、中央付近で焼土の広がりを確認しており、竪穴住居の可能性も考えられる。掘立柱建物S B 20との前後関係は、重複関係からS K 15が古いと判断される。

出土遺物は土師器、須恵器がある。

S K 15 出土遺物（第28図 126~134）須恵器は杯蓋（126）と高杯（127）がある。126は口縁端部を下方に折り曲げる。127は短脚である。脚部は短く直線的に延びた後「ハ」字状に開く。透孔は施されない。



第19図 掘立柱建物 S B 13・16・20～22実測図 (1 : 100)

土師器は杯(128)と甕(129～134)がある。128は口縁部のみ残る。ヨコナデを施し、端部は丸くおさめる。甕は6個体分出土した。口縁端部を丸くおさめるもの(130・131)、つまみ上げ外端に面をなすもの(129・132・133)、水平方向に開き、受口状をなすもの(134)がある。133は口縁部と体部との境が著しく肥厚し、体部外面に板状工具によるナデを施す。

S K 17 (第28図) 調査区の中央部、後述するS B 16の南側で検出した。平面形は隅丸長方形を呈する。規模は、長辺約1.0m、短辺約0.7mで、検出面からの深さは約30cmを測る。

出土遺物には須恵器、土師器がある。

S K 17 出土遺物 (第20図 135～139) 須恵器杯蓋(135～138)、土師器甕(139)がある。

須恵器杯蓋(135～138)はいずれもかえりを有しないものである。口縁部は丸みをもち、端部を下方に折り曲げる。135は著しく歪む。ロクロヘラケズリを施した頂部に偏平なつまみが残る。137のみ端部の折り返しが内側に入り込み、断面三角形をなす。

土師器甕(139)は外反気味に開く口縁部の端部外端に面をなす。内側をわずかに壅ませ、つまみ上げは顕著でない。

S K 26 (第28図) 調査区の南寄り、S B 16の南側の位置で検出した。平面形は、長辺約1.2m、短辺約0.6mの隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは約20cmを測る。

出土遺物は土師器がある。

S K 26 出土遺物 (第20図 140) 土師器甕(140)がある。丸い体部から口縁部がほぼ垂直に延びるが、端部をヨコナデするため内弯気味になる。全体に薄手につくられ、口縁部は特に薄くなる。調整は底部外面にケズリ、体部外面に縦方向、内面に横方向のハケメを施す。

S K 30 (第28図) 調査区の南寄り、掘立柱建物S B 29の西側の位置で検出した。平面形は一辺約0.5mの隅丸三角形を呈し、検出面からの深さは約30cmを測る。

出土遺物は須恵器、土師器がある。

S K 30 出土遺物 (第20図 141～143) 141は須恵器杯身で受け部の付かないタイプと考えられる。底部

は平坦につくられる。

土師器甕(142)は口縁部が外方に開き、端部外端に面をなす。つまみ上げは顕著ではない。143は長胴甕である。口縁部の形状は、142と同じである。体部外面を縦方向、内面を横方向にハケメを施す。

(4) 包含層出土遺物 (第29～32図 189～274)

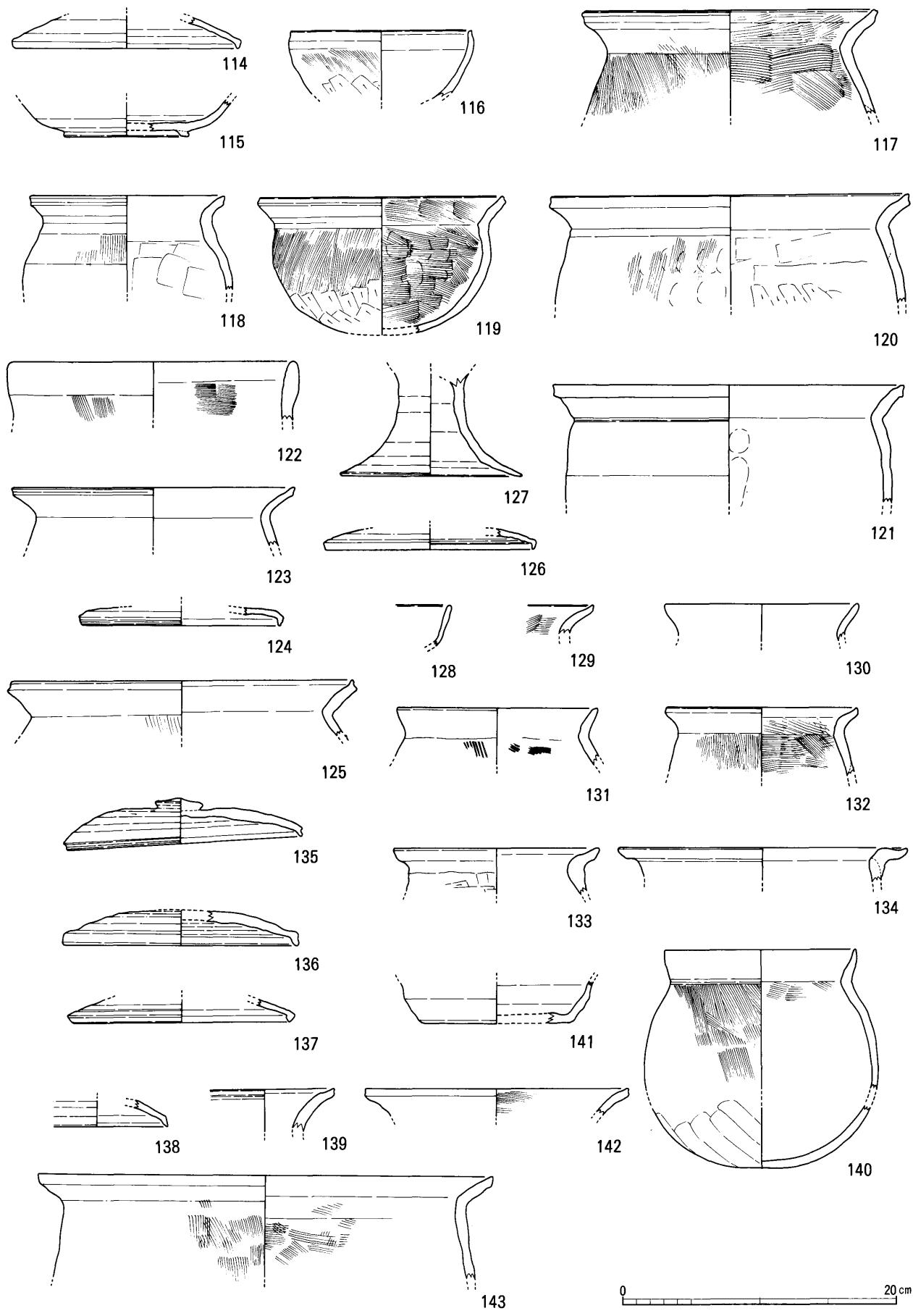
須恵器 須恵器は杯蓋(190～201)、杯身(202～233)、高杯(234)、高盤(235)、甕(236～240)、円面硯(241～243)、長頸瓶(244・245)、平瓶(246・247)、横瓶(248・249)、鉢(250・251)がある。

杯蓋はかえりを有しないもの(190)、口縁部内側にかえりを有するもの(191)、口縁端部を下方に折り曲げるもの(192～201)がある。190は丸みを帯びた天井部と口縁部との境の稜が不明瞭である。191は口縁端部をわずかに下方に折り曲げ、口縁部内側に、短いかえりを有する。192・198～201は口縁部が屈曲し、端部を下方に折り曲げる。193・195～197は直線的に延びる口縁部から端部を下方に折り曲げる。つまみは偏平な擬宝珠つまみが付く。196は重ね焼きした個体の一部が、外面に融着して残る。

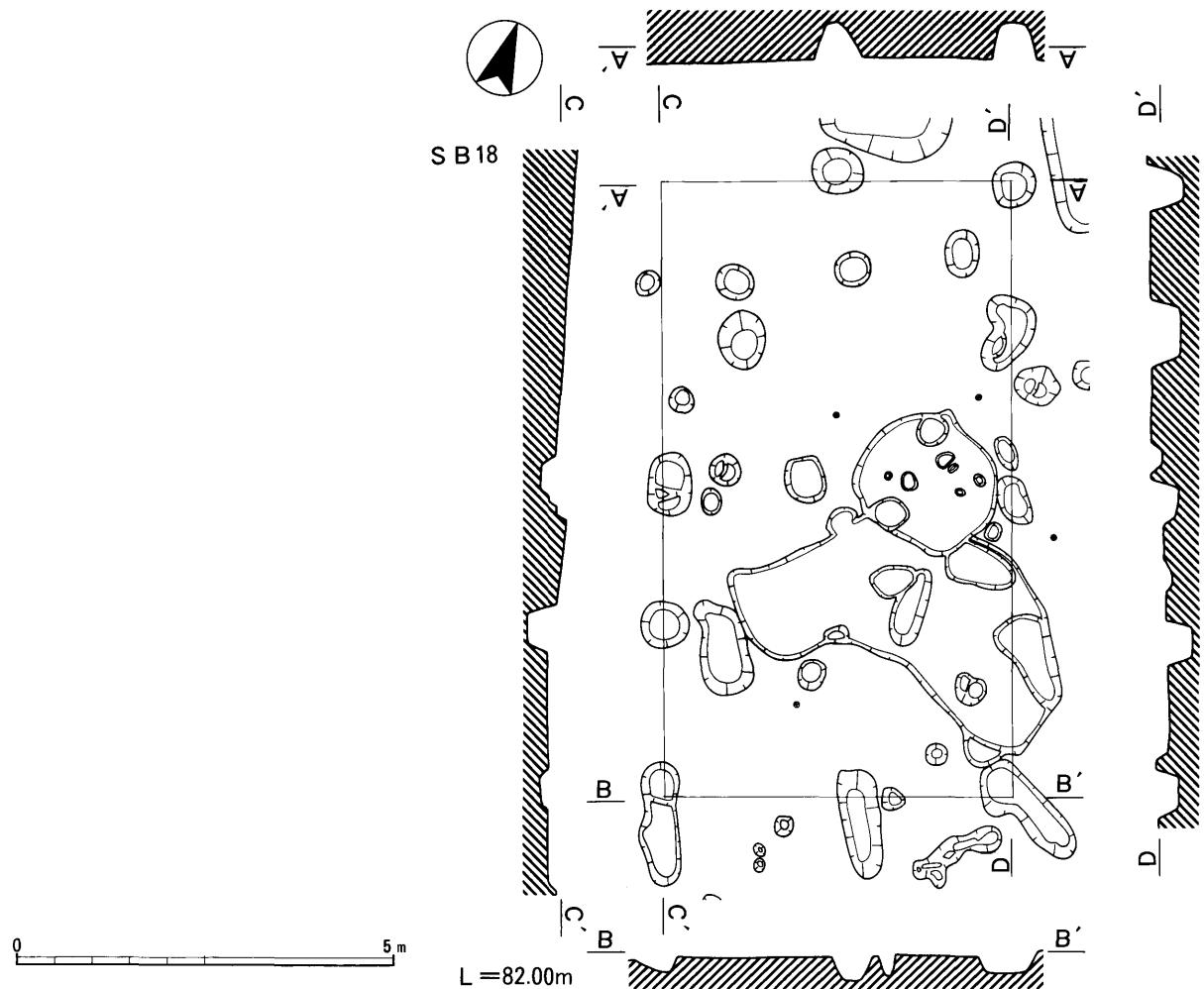
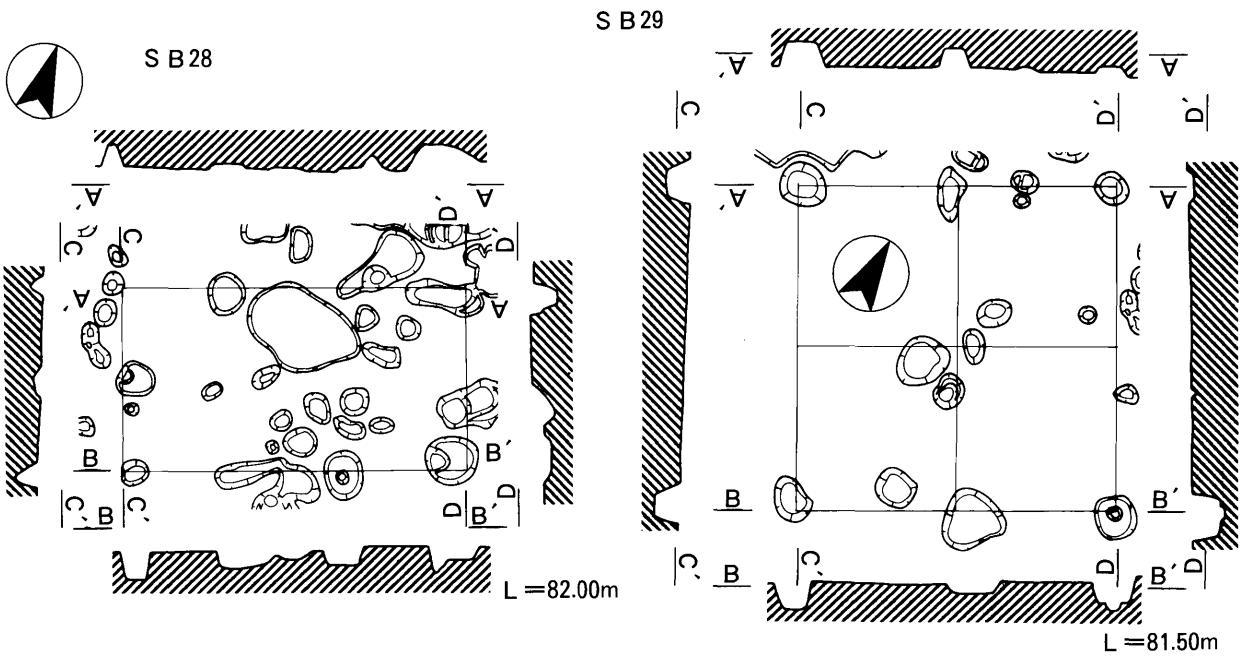
杯身は受け部を有するもの(202・203)、無台杯身(204～224・233)、有台杯身(225～232)がある。202・203は口径8.5～9.0cmの小型品である。器高は低く、立ち上がりも短く内傾する。202は2/3程にロクロヘラケズリを施す。204～206は全体に丸みを帯び、口縁端部がわずかに外反する。207～215は小さい底部から「ハ」字形に開く口縁部が直線的に延びる。216～224は底部が広いものである。223・224は腰部に明確な稜を有する。233は底部内面に「棄」「名」「國」「依」の4字が施印される。「棄」は「桑」の異体字、「國」は「國」の略字である。有台杯は腰部の張りが弱く稜を有しない。高台は下端が外に広がるもの(225・226・228・230・231)とそうでないものがある。接合位置は底部と口縁部との境より内側に付けられる。227は金属器の器形を移したものと考えられる。228は底部外面に「T」字形の記号がヘラ書きされる。

234は短脚高杯である。下半が大きく外方へ開き、端部内側に凸帶を有する脚部のみ残る。

高盤(235)は細長い脚柱部が残る。内面にヘラ状工具痕が残る。



第20図 出土遺物実測図(1) (1 : 4)



第21図 挖立柱建物 SB 18・28・29実測図 (1 : 100)

甕は247～251がある。247は口縁部に2条1対の波状文が施される。口縁端部は玉縁状をなす。248は口縁部が大きく外に開き、沈線で区画された中に波状文が施される。口縁端部上端は面を有する。249・250は沈線によって2段に区画された中に刺突斜線列が施される。251は外反する口縁部の端部を上下に引き出し面をなす。

円面硯は3個体分（236～238）出土した。236は陸と海とは明瞭に区画される。硯部の使用痕跡は認め難い。凸帯は断面三角形を呈する。脚台部は欠損する。237・238は脚台部である。237は方形の細長い透孔が施されるが、全てが貫通するのではなく、線のみで表現される個所もある。238は裾部が外に広がる。237と238は軟質で赤褐色を呈しており、実際に使用されたものとは考えにくい。

長頸瓶は（239・240）がある。244は口頸部に2条の凹線が巡る。口縁端部は外上方に屈曲し、外端に面をなす。240はフラスコ形の体部をなすと考えられる。口頸部から口縁部が開き、端部までそのまま延び、底部に高台を有する可能もある。

平瓶は（241・242）がある。241は底部が小さく全体に丸みを帯びる。口頸部には2条1対の凹線が巡る。242はほぼ平底で、上部に把手が付く。上半には自然釉が付着する。

243・244は横瓶である。いずれも口縁端部上端がヨコナデにより窪む。244の方が厚手につくられ、243より大型品であろうか。

鉢は（245・246）がある。245の口縁部は外反気味に延び、端部は丸くおさめる。246の口縁端部は断面三角形をなす。

須恵器は全体に焼成不良の個体が多く、192・193・198・201・204・208・209・214・227・229・233・242・248～250は軟質で赤褐色を呈する。

土師器 杯（255・256）、椀（252～254）、皿（259）、高杯（258）、甕（259～274）がある。

杯の255は赤彩される。256は内面に粗雑な暗文が施される。底部外面をケズリ、口縁端部にヨコナデを施す。

椀の252・256は内外面にケズリを施す。

皿（259）は赤褐色を呈し、胎土も緻密である。底部から口縁部を屈曲させ、端部外端に面を有する。

高杯（258）は平坦な杯部内面に螺旋暗文が施される。脚柱部は面取りされ、断面10角形をなす。裾部は外方に開く。

甕（259～274）の259・260・268は口縁部が内弯気味に延びる。259は体部外面下半および内面にケズリを施す。266・270・272は口縁部が大きく外方に開く。273は長胴甕である。口縁部は横方向のハケメ、体部は外面に縦方向のハケメを施す。内面は下半に不定方向のハケメ、上半に横方向のケズリを施す。274の把手付甕は丸い体部から口縁部が「く」の字に屈曲し、端部外端に面をなす。調整は体部外面下半にケズリ、上半および内面に斜め方向のハケメを施す。

3 平安時代の遺構・遺物

この時期の遺構には、掘立柱建物8棟、土坑4基がある。

（1）掘立柱建物

S B 6（第22図） 調査区の北側で検出した東面と南面を柱列S A 7によって囲まれた、桁行3間×梁行3間の南北棟である。棟方向はN 6° Wをとる。建物規模は、桁行5.55m、梁行4.8mを測る。柱間は、東妻と北側柱筋の柱穴が明確にされていないが、桁間が北から2.05m+2.05m+1.45m、梁間が2.4m等間となる。柱掘形は平面略円形をなし、径約0.4～0.7m、検出面からの深さは20～45cmを測る。埋土は暗灰色系を呈し、須恵器、土師器、灰釉陶器、緑釉陶器が出土した。柱痕跡は、明確に判断することはできなかった。出土遺物は10世紀代のものであるが、建物方向等から判断して、S B 11と同時期に存在したと考えられるため12世紀後半代の建物とした。

建物南東隅に重複するS H 9との前後関係は、重複状況からS H 9より新しいと判断される。

S B 6 出土遺物（第24図 144～147） 灰釉陶器（144～146）、緑釉陶器（147）を図示した。

灰釉陶器椀（144・145）の釉は漬け掛けされる。146の高台は、三日月高台である。外面の稜はやや弱くなる。

緑釉陶器広縁段皿（147）は、外反気味にのびる口縁部の端部に輪花が施される。高台は外方へ開く。

この他、須恵器杯蓋、土師器甕の小片が出土している。

S B 8 (第22図) 調査区の東端、S B 5の北東側の位置で検出した総柱建物である。建物の東側は調査区外へ延びるため全体は確認されていないが、おそらく2間×2間の規模になると考えられる。棟方向は南北軸でN 5° Wをとる。建物規模は桁行3.9m×梁行1.5m以上で、柱間は桁間が1.95m、梁間が1.5mの等間である。柱掘形は平面円形をなし、径0.15～0.3m、検出面からの深さは15～30cmを測る。

出土遺物は、時期判別の困難な須恵器片が見られる程度であるが、建物の位置、棟方向などから、この時期の建物と判断した。

S B 11 (第22図) S B 6の南側の位置で検出した桁行2間×梁行2間の総柱建物である。棟方向は南北軸でN 4° Wをとる。建物規模は、桁行3.8m、梁行3.3mを測る。柱間は桁間が1.9m、梁間が1.65mの等間である。柱掘形は平面略円形で径0.2～0.4m、と小さく、検出面からの深さも10～40cmとばらつきが見られる。柱掘形の埋土は暗灰色系を呈し、灰釉陶器、山茶椀、土師器が出土した。柱痕跡は確認されなかった。出土した遺物から判断して、12世紀後半代の建物と考えられる。

S B 11出土遺物 (第24図 148～152) 灰釉陶器(148)、山茶椀(149・150)、土師器(151・152)がある。

灰釉陶器皿(148)は底部のみ残る。形状から皿と考えられる。高台は小さく、わずかに外反する。

山茶椀(149・150)は藤澤編年の4型式に相当すると考えられる。^②

土師器甕(151)の器壁は全体的に厚手につくられる。口縁端部はヨコナデされ、内弯する。端部はやや肥厚し、内側に折り返される。152は、清郷型鍋である。口縁部の断面形は「N」字状になり、内面に稜をなす。永井分類のE類に相当する^④。

S B 18 (第21図) 桁行4間×梁行2間の南北棟である。棟方向はN 26° Wをとる。建物規模は、桁行8.2m、梁行4.5mを測る。柱間は、桁間が2.05m、梁間が2.25mである。柱掘形は平面略円形で、径約0.5～0.6m、検出面からの深さは30～40cmを測り、土師器が出土した。柱痕跡は確認されなかった。なお、南側妻柱は長楕円形をなしており、建物廃絶時に柱が抜き取られた可能性が考えられる。

重複するS H19との前後関係は、S B 18の方がS

H19より新しい。

出土遺物は灰釉陶器があり、10世紀前半代の建物と考えられる。

S B 18出土遺物 (第24図 153・154) 灰釉陶器碗が2点(153・154)出土した。153の口縁端部は外反する。154の高台は三日月型をなす。釉はいずれも漬け掛けにより施される。猿投窯編年の折戸53号窯式に相当するものと考えられる^⑤。

S B 23 (第23図) 桁行4間×梁行3間の南北棟で、棟方向はN 25° Wをとる。建物規模は、桁行8.0m、梁行4.8mを測る。柱間は桁間が2.0m等間、梁間が1.6m等間である。柱掘形は、平面円形で径は0.3～0.5m、検出面からの深さは20～40cmを測る。

重複するS K26、S B 24との前後関係はS K26→S B 23→S B 25となる。

遺物は、柱掘形から須恵器杯蓋片が出土した。

S B 24 (第23図) S B 23と重複する桁行4間×梁行3間の南北棟である。棟方向はN 26° Wをとる。建物規模は、桁行8.0m、梁行4.8mを測り、柱間は、桁間が北から1.6m+2.4m+2.4m+1.6mとなり、梁間は1.6m等間である。柱掘形は、径約0.4～0.7mの平面略円形ないしは略方形をなし、検出面からの深さは20～40cmを測る。柱掘形の埋土は、暗褐色を呈し、灰釉陶器碗が出土した。

建物規模や位置から判断して、S B 23をほぼ同じ場所で建替えた建物と考えられる。

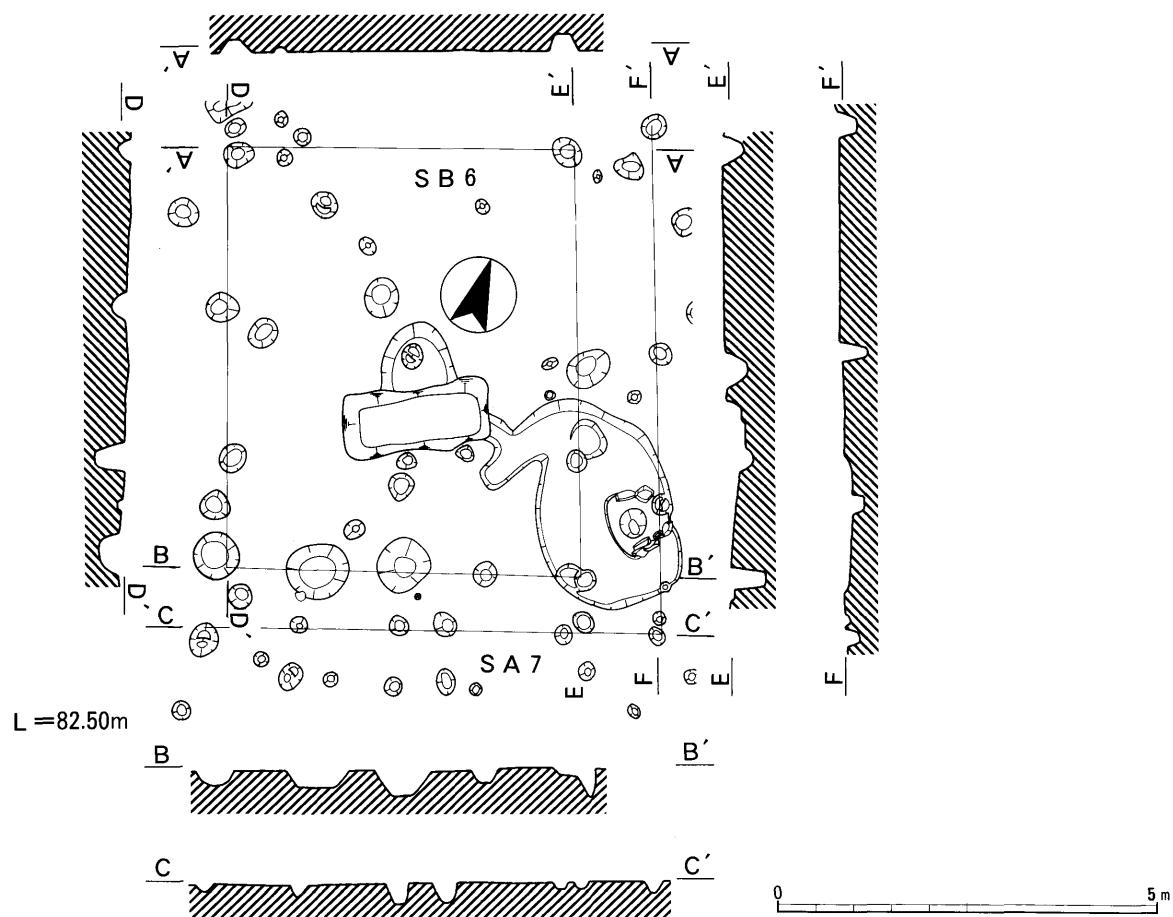
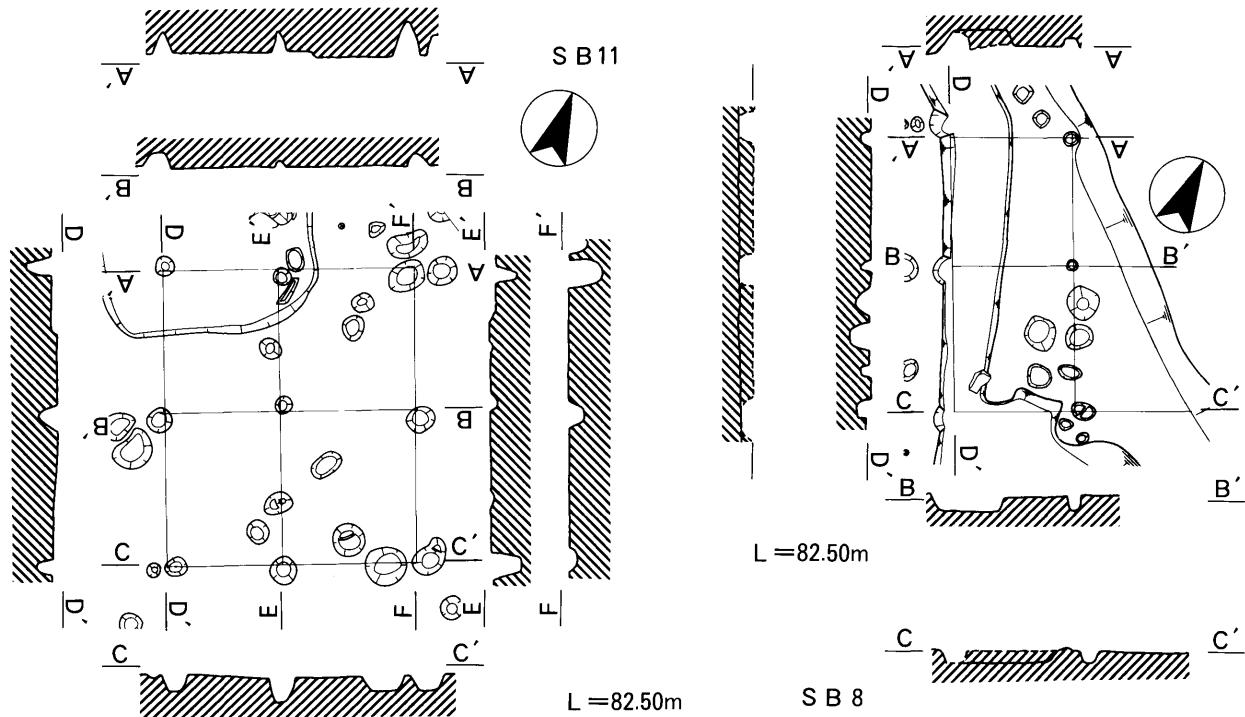
出土遺物から10世紀前半代の建物と考えられる。

S B 24出土遺物 (第24図 155・156) 灰釉陶器碗が2点(155・156)出土した。155は薄手で釉は刷毛塗りの可能性があるが小片のため断定しがたい。156は厚手につくられ、釉は漬け掛けされる。

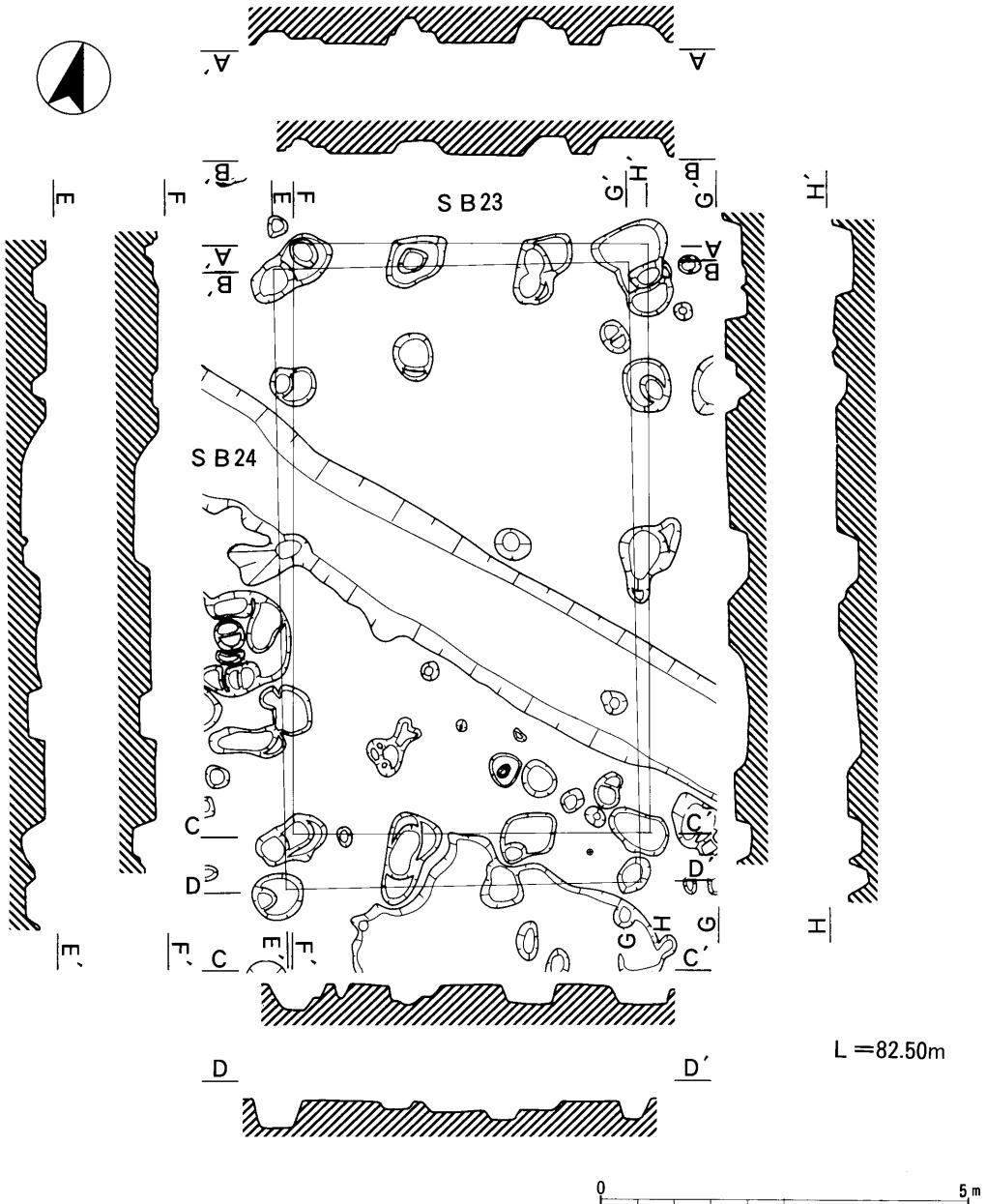
S B 28 (第21図) 調査区の北側の位置で検出した梁行2間×桁行3間側柱建物である。東西棟で棟方向はW 34° Sをとる。建物規模は桁行4.5m、梁行2.4mを測り、柱間は桁間が1.5m等間、梁間が1.2m等間である。柱掘形は平面不整形で、径0.2～0.6mとばらつきが見られる。検出面からの深さは20～40cmを測る。柱痕跡は確認されなかった。

(2) 柱列

S A 7 (第22図) 堀立柱建物S B 6の東面と南面を囲む柱列でS B 6に伴う塀と考えられる。建物と



第22図 掘立柱建物 S B 6・8・11実測図 (1 : 100)



第23図 挖立柱建物SB 23・24実測図（1：100）

の距離は柱穴の芯芯間で、東面で約1.1m、南面で約0.8m隔てる。東面は3間、南面は4間の規模である。柱間は、東面が北から3.0m+2.05m+1.75mと不揃いであるのに対し、南面は1.25m+1.25m+2.25m+1.25mとなる。柱掘形は径約0.3m平面円形をなし、検出面からの深さは20~40cmを測る。

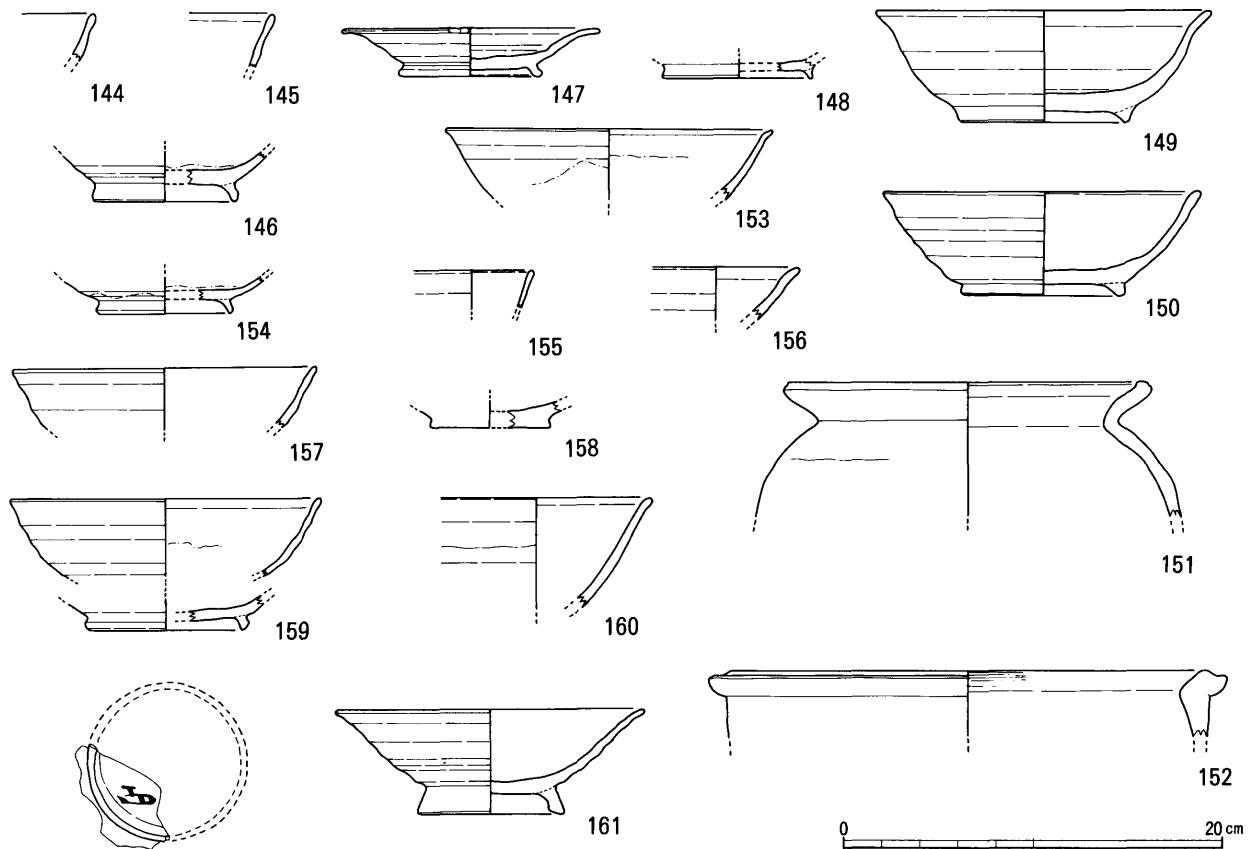
(3) 土坑

SK 10（第28図） SB 11と重複する平面隅丸長方形をなす土坑である。規模は、長軸約2.8m、短軸約2.3mで検出面からの深さは約30cmを測る。南半に石

が集中する箇所が見られるが、性格については不明である。この石の集中箇所を挟んで径約0.45m、深さ10~30cmのピットが検出されている。このピットは主柱穴の様でもあり、SK 10は竪穴住居である可能性も考えられる。

遺物は、石の集中箇所周辺から灰釉陶器、口クロ土師器が出土している。

SK 10 出土遺物（第24図 157・158） 灰釉陶器碗（157）の口縁部は直線的に開き外反はしない。釉は漬け掛けによる。



第24図 出土遺物実測図(2) (1 : 4)

ロクロ土師器皿（158）は底部のみ残る。外面にイ
トキリ痕が認められる。

S K 12 (第28図) 調査区の中央西側の位置で検出
した。長軸方向約4.7m、短軸方向約0.6mの規模を
もち、平面長楕円形をなす。検出面からの深さは5
～10cmを測る。方向は長軸方向でN 6° Wをとり、
S B 6とほぼ同じ方向である。また後述する溝 S D
25とは直角の関係になる。あるいは溝の一部が残存
した可能性もある出土遺物は、灰釉陶器、山茶椀、
ロクロ土師器がある。

S K 12 出土遺物 (第24図 159～161) 灰釉陶器椀
(159)、山茶椀 (160)、ロクロ土師器台付椀 (161)
がある。

灰釉陶器椀 (159) の高台は三日月型をなすが、
小さく全体に丸みを帯びる。口縁部は器壁が薄く、
わずかに外反する。猿投窯編年の折戸53号窯式に相
当するものと考えられる。底部外面隅に墨書が認め
られ、「西」と判読できる。

山茶椀 (160) の口縁部は直線的に開き、端部は
わずかに外反する。藤澤編年の4型式に相当するも

のと考えられる。

ロクロ土師器台付椀 (162) は狭い底部から口縁
部が直線的に延び、端部は緩やかに外反する。太く、
内弯気味の高い高台が底部端に付く。接地面は外端
である。

(4) 包含層出土遺物 (第32～34・36・37図 275～
367、424～436)

灰釉陶器 (275～310)、緑釉陶器 (311～327)、
土師器 (328～387) がある。

灰釉陶器 梗 (275～283、424～435)、皿 (284～297)、
段皿 (298～307)、折縁皿 (308)、短頸壺 (309)、
小壺 (310) がある。281・286・287は口縁部に輪
花が施される。段皿は広縁段皿のみで、狭縁段皿は確
認されていない。高台は三日月型をなすが、小さくて
粗雑なものが多い。釉は漬け掛けにより施される。
252の口頸部は外方にわずかの開く。424～435は墨
書が見られ、いずれも外部底面に文字が書かれる。
426は「口西」、427・428・435「富」、430「西」、
432は「富加」と判読できるが、他は不明である。
また、435は内面に墨痕が広がっており、転用硯とし

て使用されたようである。

猿投窯編年の折戸53号窯式期～東山72号窯式期に相当するものと考えられる。

他に、図示していないが耳皿の小片も出土している。

縄釉陶器 梗・深椀 (311～315・300～303)、皿・段皿 (317～322) 小壺^⑥ (27)、転用硯 (436) のほか、図示していないが小壺の蓋と考えられる小片も確認されている。

梗・深椀の口縁端部はわずかに外反し、高台は三日月高台、角高台、有段高台がある。327は内面にも釉が施される。436は内面に墨痕が見られる。時期的には灰釉陶器と同時期のものと考えられる。产地は猿投、尾北、東濃、近江産のものが見られる。

土師器 皿 (328～345)、鍋 (346～367) がある。皿の328～335は非口クロ成形による。328・331～333の口縁部は内弯する。329・330は平坦な底部をなし、口縁部をヨコナデする。336～345は口クロ成形され、底部にイトキリ痕が残る。

鍋は、南伊勢系鍋 (346～348) と清郷型鍋 (349～367) がある。

南伊勢系鍋は短く延びる口縁部の端部を内側に折り曲げており、南伊勢系鍋として確立する前段階のものである。12世紀前半代に相当すると考えられる。清郷型鍋は、口縁部内面に強い稜を有し、口縁部を水平ないしやや下方に引き出す (353・354、362～367)、口縁部と体部との境が強いナデにより壅み、口縁部断面「N」字状をなす (349・350・352、355～361)、短く引き出す (351・367) がある。それぞれ永井分類のD～F類に相当すると考えられる。

4 中世の遺構・遺物

(1) 掘立柱建物

S B 1～4 (第25図) 第2次調査で検出した4棟の掘立柱建物である。いずれも側柱建物の東西棟である。ほぼ棟方向を揃える。柱掘形の規模から見ても耐久性に乏しい建物構造であったと考えられるところから、短期間に繰り返し建替えを行った建物と判断される。

S B 1は、最も北側に位置する。桁行2間以上×梁行1間で棟方向はN 5° Wをとる。建物規模は、

桁行2.4m以上、梁行2.2mを測る。柱間は桁間が1.2m等間、梁間が1.1mである。柱掘形は平面略円形を呈し、径0.3～0.4m、検出面からの深さ約30cmを測る。4棟の建物のなかでは、最も柱掘形の規模が大きい。

土師器、山茶椀の小片の他、釘と見られる鉄片が柱掘形から出土した。

S B 2は、桁行3間×梁行2間で棟方向はN 3° Wをとる。建物規模は、桁行6.2m×梁行2.1mを測る。柱間は桁間が2.1m等間、梁間が1.05m等間である。柱掘形は略円形で、径0.2m前後を測る。検出面からの深さは約15cmと浅い。

出土遺物は、土師器、山茶椀の小片の他、混入した縄文土器片がある。

S B 3は、桁行4間×梁行1間の4棟のうちで最大の建物である。S B 2と並行して重複する。建物規模は、桁行7.0m、梁行2.4mを測る。柱間は、桁間が西から1.9m+1.9m+1.9m+1.3mと東端のみ狭くなる。梁間は2.4mである。棟方向はN 4° W柱掘形は平面略円形で、径0.3m前後、検出面からの深さは約20cmを測る。柱掘形から13世紀前半代の山茶椀が出土した。

S B 3 出土遺物 (第26図 162) 162の山茶椀は、藤澤編年の6～7型式に相当すると考えられる。この他、図示していないが土師器小片や縄文土器片がある。いずれも柱掘形からの出土である。

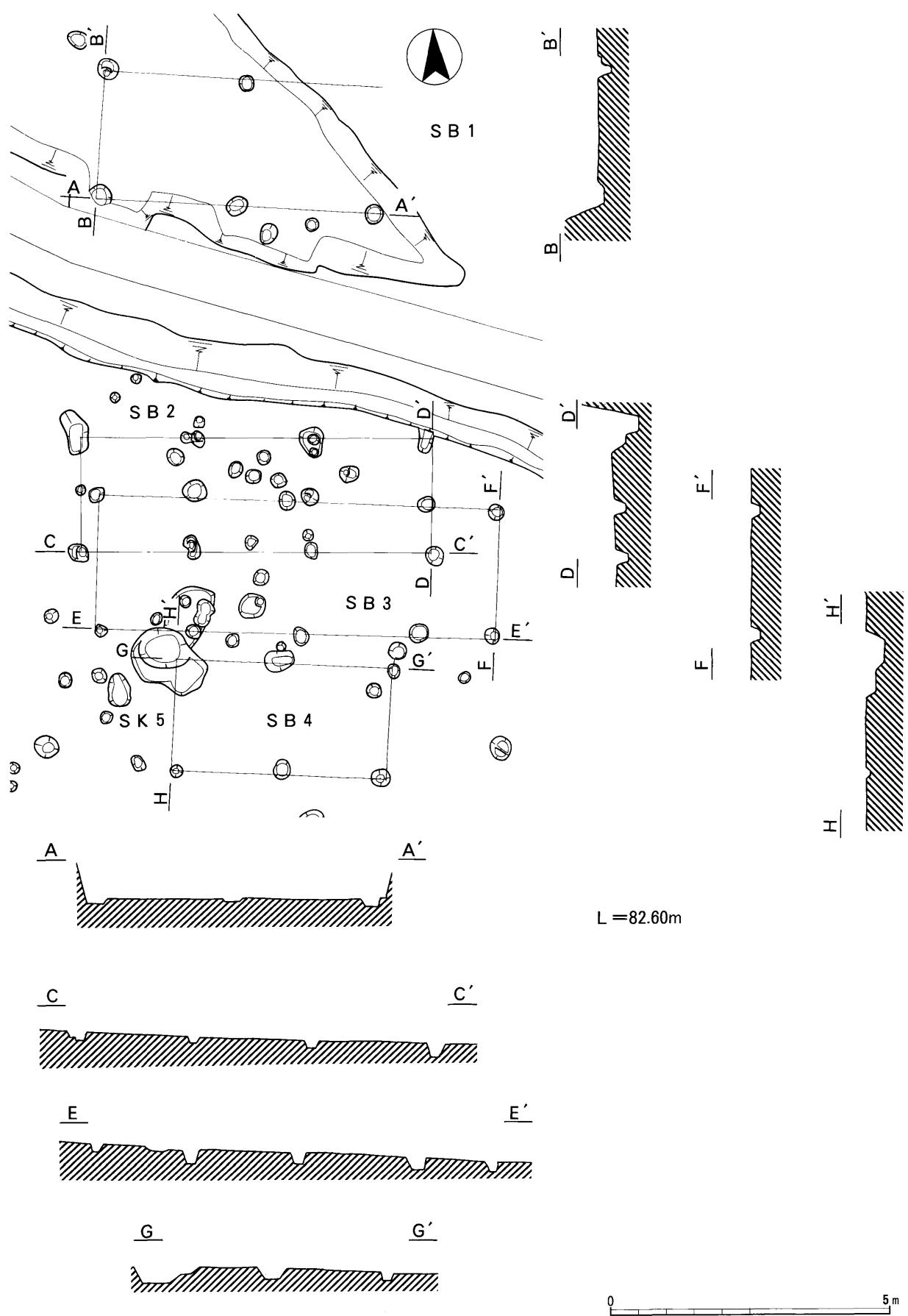
S B 4は、最も南側の位置で検出した。桁行2間×梁行1間で棟方向はN 3° Wをとる。建物規模は桁行3.8m、梁行2.0mを測る。柱間は桁間が1.9m、梁間が2.0mである。柱掘形は、径約0.2mの平面略円形を呈し、検出面からの深さは約15cmを測る。北西隅の柱穴は、S K 5と重複するが前後関係は明確にされなかった。

出土遺物は確認されなかった。

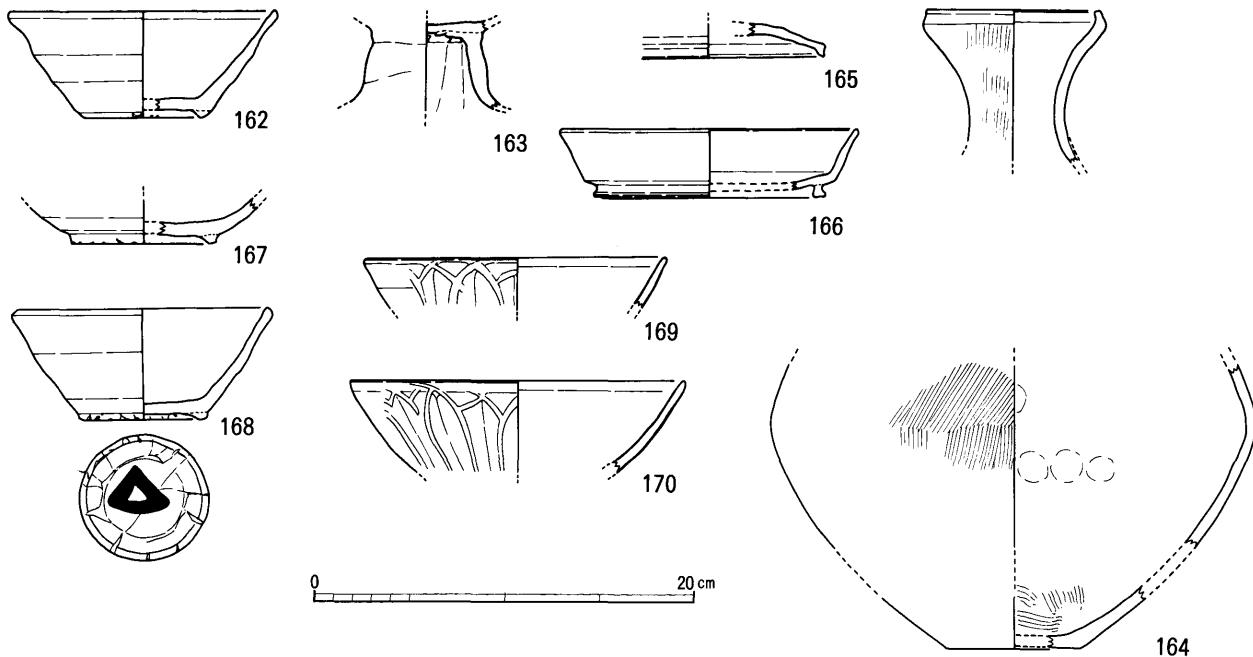
(2) 土坑

S K 5 (第28図) S B 4の北西隅の柱穴と重複する平面不定形の土坑である。規模は、長軸方向約1.4m、短軸方向約1.0m、検出面からの深さ約20cmを測る。S B 4の柱穴はS K 5の底面で検出しており、S K 5の方が新しい。

出土遺物は混入した土師器高杯がある。



第25図 挖立柱建物 SB 1～4、土坑 SK 5 実測図 (1 : 100)



第26図 出土遺物実測図(3) (1 : 4)

S K 5 出土遺物 (第26図 163) 土師器高杯(163)は灰白色を呈し、脚部内面に杯部との接合時に付いたと考えられるヘラの痕跡が見られる。この他、灰釉陶器や山茶椀の小片、常滑産と考えられる陶器片がある。

(3) 溝

S D 25 調査区の中央やや南寄りの位置を東西方向に流れる。検出された長さは約32mで、さらに西側へ続く。東側についても途切れていますが、さらに延長するものと考えられる。幅は約1.8m、検出面からの深さは約60cmを測る。

出土遺物は、弥生土器、須恵器、灰釉陶器、山茶椀、青磁等がある。

S D 25 出土遺物 (第26図 164~170) 弥生土器(164)、須恵器(165・166)、山茶椀(167・168)、青磁(169・170)を図示した。

164の弥生土器は細頸壺である。調整法は、全体に著しく磨滅しており、確認しがたいが、体部外面にハケメ、底部内面にミガキが施される。

須恵器は杯蓋(165)、有台杯(166)がある。165は口縁端部を下方に折り曲げる。166は腰部が強く屈曲し、稜をなす。高台は腰部より内側に付けられる。山茶椀は(167・168)がある。167は藤澤編年の5~6型式、168は7型式に相当するものと考えら

れる。168は底部外面に「△」の墨書が認められる。

青磁椀(169・170)は体部外面に鎧蓮弁文を施す。
太宰府分類のI-5類に相当すると考えられる^⑦。

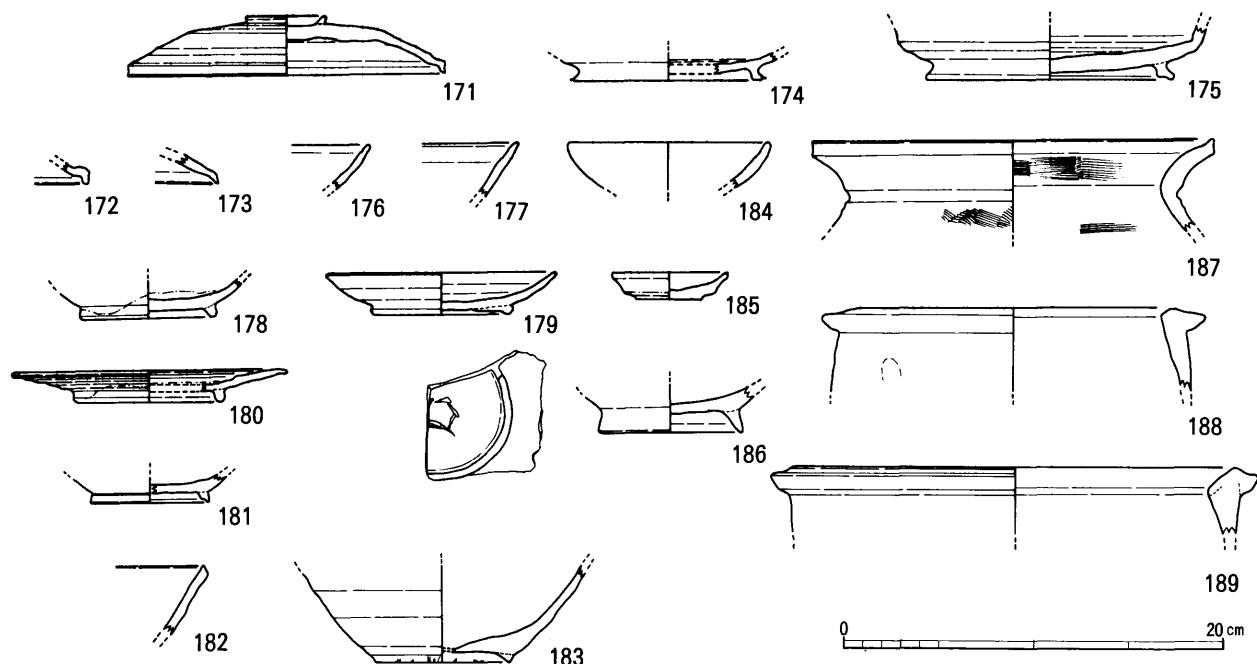
(4) 包含層出土遺物 (第35・36図 368~418、427~451) 土師器(368~371)、陶器(372~393)、磁器(397~418)がある。

土師器 南伊勢系鍋(368~369)は口縁端部が立ち上がり気味になり、折り返しの幅が広くなる。12世紀後葉から13世紀前葉のものと考えられる^⑧。

陶器 山茶椀(372~377、427~451)は藤澤編年の5~7型式のものが見られる。椀は狭い底部から口縁部が直線的に延びる。374・375は端部が尖り気味になる。376・377は高台が付かない。427~442は墨書が見られる。427・428は「藏」あるいは「厨」とも読みそろではあるが、花押を示すものと考えられる。441は「の」、442は「上」と判読できる。その他は判読が困難である。

小椀は腰の丸い(378)と口縁部が直線的に延びる(379)のほか、墨書の見られる底部(443・444)があるが判読することはできない。

小皿は(380~387、445~451)がある。383・384は底部がやや突出し、口縁部が外反する。380~382は口縁端部が肥厚する。445~451は墨書が見られる。445は平仮名で「こき」と書かれる。



第27図 出土遺物実測図(4) (1 : 4)

388～393は常滑産の甕である。388は中野編年の2型式でも古い段階に位置づけられる^⑨。口縁部は外反し、端部外面に平坦面をなす。内面には凹線が巡る。389は388に比べ口縁端部外面の面が緩やかになる。中野編年の2型式に相当する。490は直立気味に立ち上がった口頸部から口縁部が水平方向に屈曲する。口縁端部は上方につまみ上げられ、受け口状を呈し、縁帶となす。中野編年の5型式に相当する。391は口縁端部の縁帶を上下に拡張する。中野編年の6a型式に相当する。底部（392・393）は13世紀代のものと考えられる。

古瀬戸製品は折縁深皿（394）、四耳壺（395）、椀（396）がある。394は直線的に延びる体部から口縁部を外方に屈曲させる。口縁端部は内側に折り曲げられる。395は玉縁状をなす口縁部のみ残る。396の底部は削り出しによって成形される。高台状になるかどうかは不明である。13世紀以降に位置づけられると考えられる。

磁器 白磁の（397～402）は口縁端部が玉縁状をなす。403は底部のみ残る。青磁は、龍泉窯産（404～411・418）と同安窯産（412～417）がある。404・405は鎧蓮弁文椀、396・397・398～400は割花文椀である。414～417は内面に櫛描文を施す。

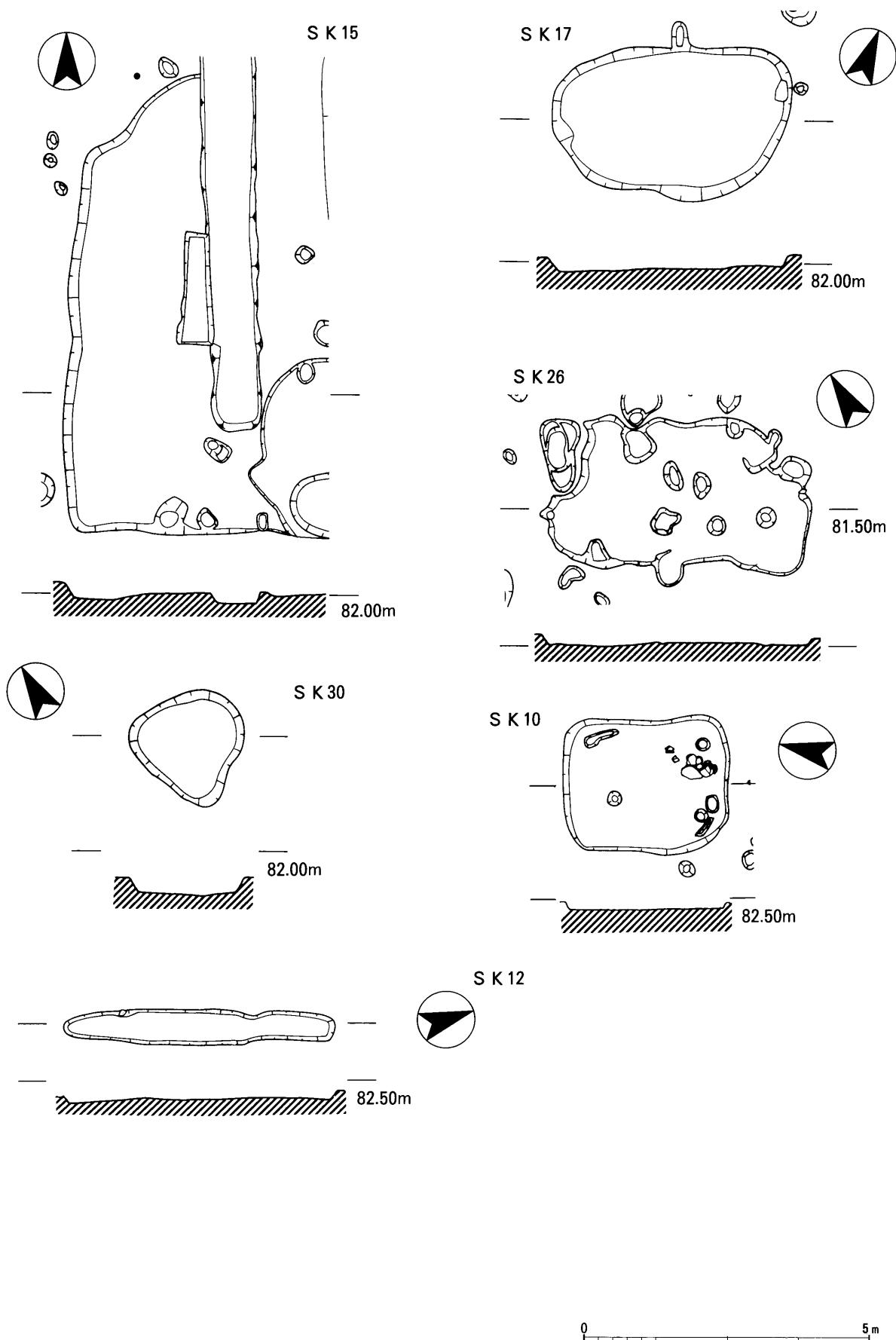
12世紀末から13世紀前半に位置づけられると考えられる。

5 近世の遺構・遺物

この時期の遺構は確認されていない。若干の遺物が包含層から出土したのみである。

(1) 包含層出土遺物（第36図 419～423）

陶器 天目茶椀（419～421）は17世紀代のものと考えられる。口唇部は内傾し、全体に丸みを帯びる。420の口縁端部は玉縁状をなす。高台（421）は削りだしである。423は志野菊皿である。灰白色を呈し、口縁部は輪花状をなす。



第28図 土坑 S K 10・12・15・17・26・30実測図 (1 : 100)

6 時期不明の遺構

(1) 土坑

S K 14 調査区の東南隅の位置で検出した平面不定形をなす土坑である。規模は、長軸で約2.8m、短軸約2.8m、検出面からの深さは20~50cmを測る。

出土遺物がないため、時期判断するには至らない。

7 その他の遺構出土遺物（第27図 171~189）

主に建物として成立しないピットからの出土遺物である。

須恵器 171~173は杯蓋である。いずれも口縁端部を下方に折り曲げる。171はロクロケズリを施した平坦な頂部に輪状のつまみが付く。174・175の杯身は高台外端で接地する。焼成不良で赤褐色を呈する。175は腰部が強く屈曲する。

灰釉陶器 176・177の口縁部は直線的に延び、端部の外反は顕著でない。178は底部のみ残る。高台はかなり形の崩れた三日月型をなす。179の皿は全体に器壁が厚手につくられ、底部端には小さく粗雑な三日月高台が付けられる。底部外面にヘラ書きによる記号が認められる。180の広縁段皿の高台も三日月高台であるが、178同様、小さく丸みを帯びた粗雑なものである。

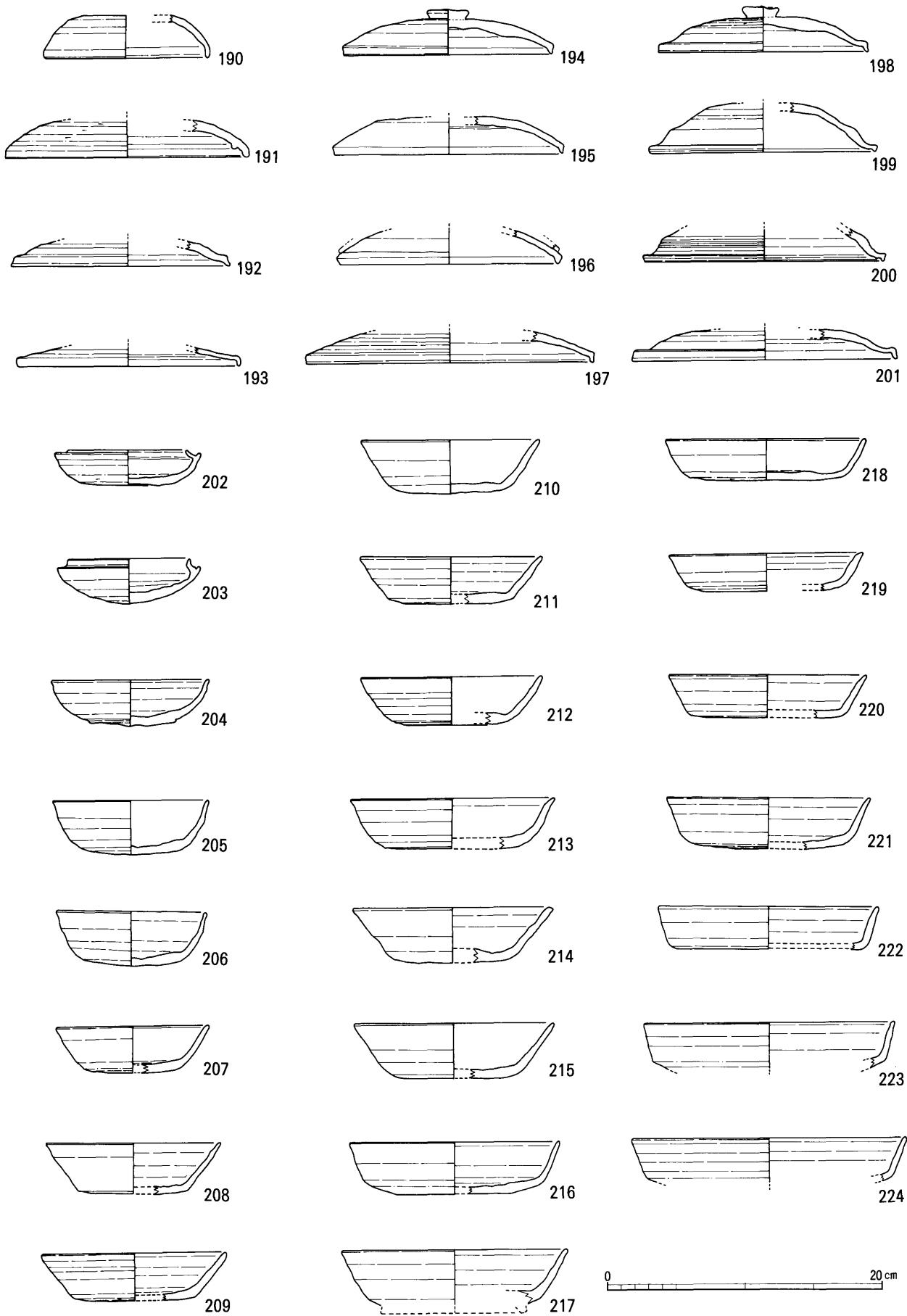
緑釉陶器 181は底部のみ残存する。高台は内面に段を有する。

山茶椀 182・183は藤澤編年の6~7型式に相当するものと考えられる。

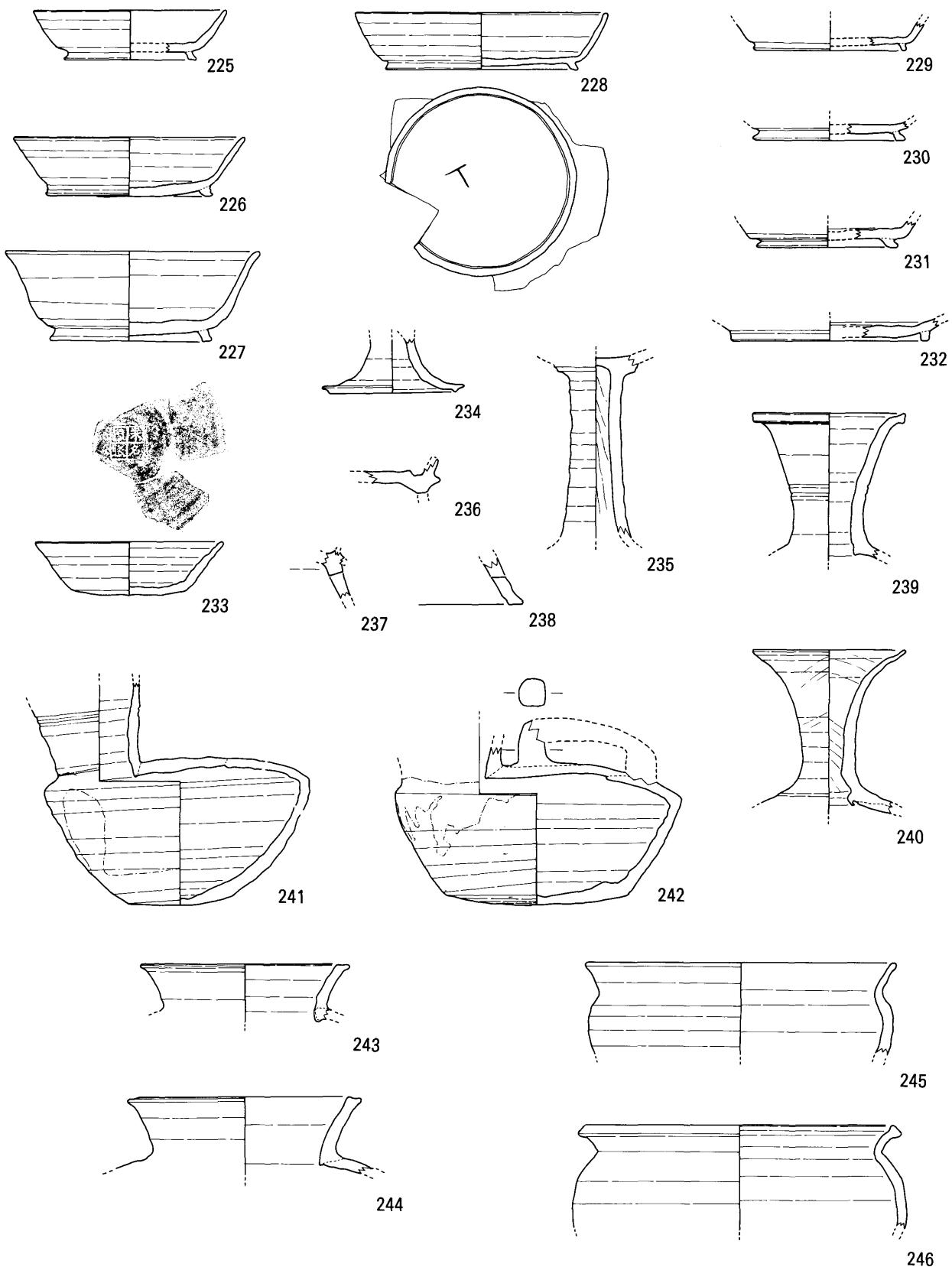
土師器 皿は(184~186)がある。184は非ロクロ成形、185・186はロクロ成形である。甕(187)は体部と口縁部との境に沈線を有する。口縁部は外反し、端部外端に面をなして上方につまみ上げられる。清郷型鍋(188・189)は体部と口縁部との境に稜をなし、口縁部の断面形は「N」字状を呈する。永井分類のE類に相当するものと考えられる。

【註】

- ①京都国立博物館の尾野善裕氏のご教示による。また、土器全般について同氏のご指導を得た
- ②山茶椀については、以下の文献を参考にした。藤澤良佑「山茶椀研究の現状と課題」『研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター 1994
- ③前掲註②文献
- ④従来「清郷型甕」とされてきたものであるが、ここでは永井宏幸氏の「長胴・平底タイプを「甕」とし、球胴・丸底タイプを「鍋」と呼ぶ」という見解に従い、「清郷型鍋」とする。(永井宏幸「清郷型鍋再考」『年報平成7年度』財)愛知県埋蔵文化財センター 1996
- ⑤施釉陶器については以下の文献を参考にした。齋藤孝正「越州窯青磁と綠釉・灰釉陶器」『日本の美術』No.409 至文堂 2000
- ⑥尾野氏に実見して頂いたところ、唾壺の可能性があることを指摘された。
- ⑦森田 勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4集 九州歴史資料館 1978
- ⑧南伊勢系鍋については、以下の文献を参考にした。伊藤裕偉「南伊勢系土師器の展開と中世土器工人」『研究紀要』第1号 三重県埋蔵文化財センター 1992
- ⑨常滑市民俗資料館の中野晴久氏に実見のうえ、ご教示いただいた。また以下の文献を参考にした。赤羽・中野「生産地における編年について」『全国シンポジウム「中世常滑焼をおつて」資料集』日本福祉大学知多半島総合研究所 1994

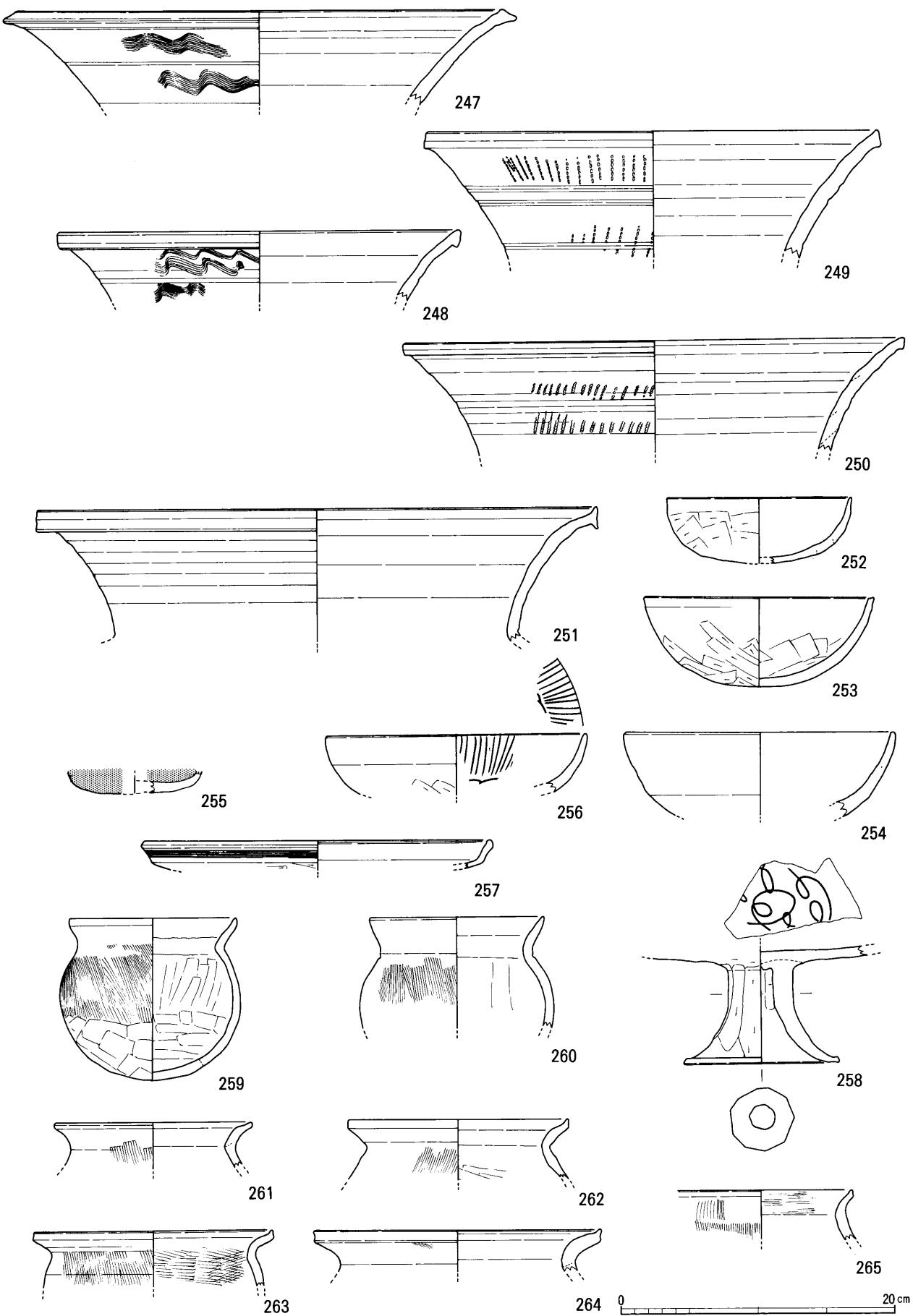


第29図 出土遺物実測図(5) (1 : 4)

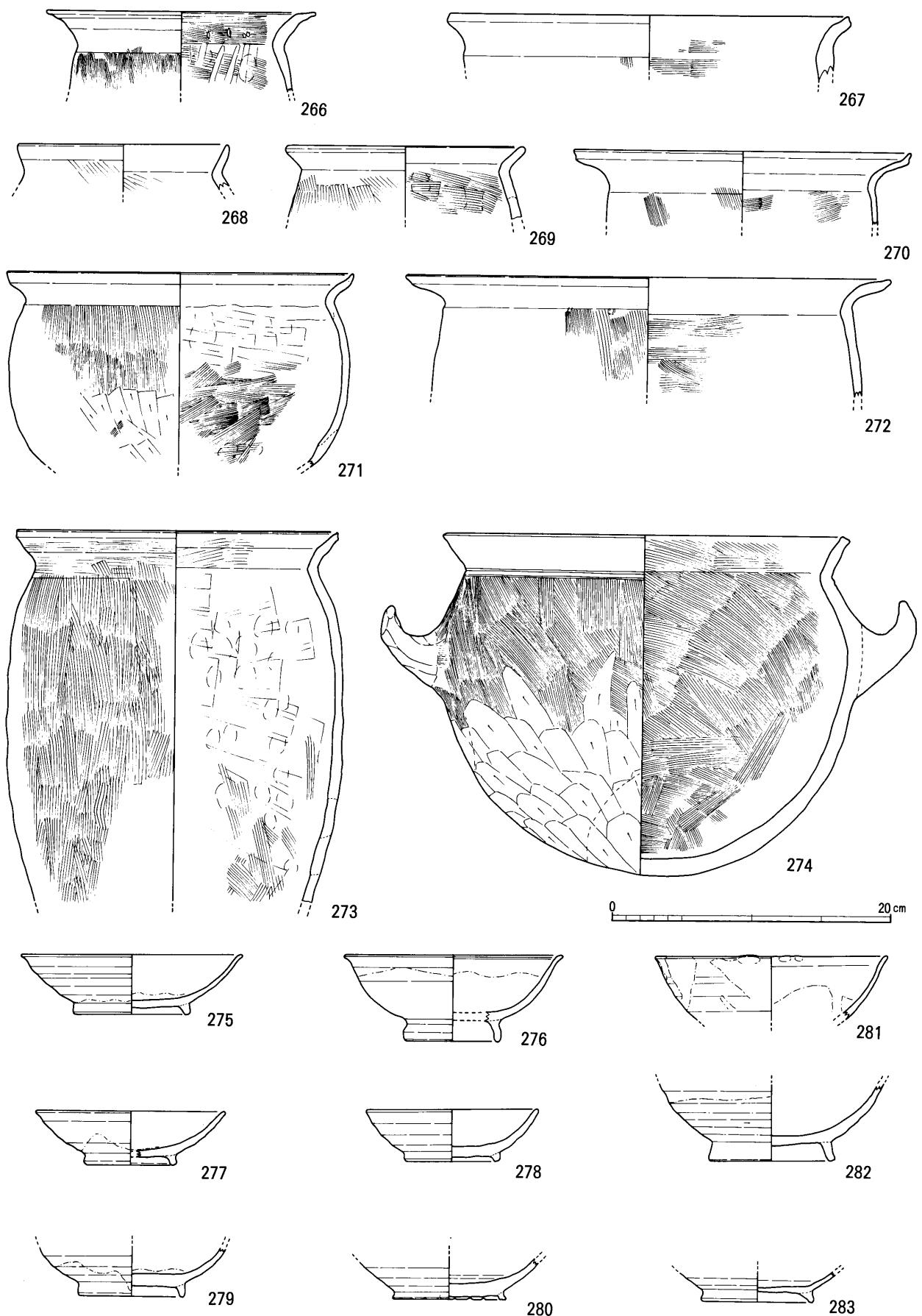


0 20 cm

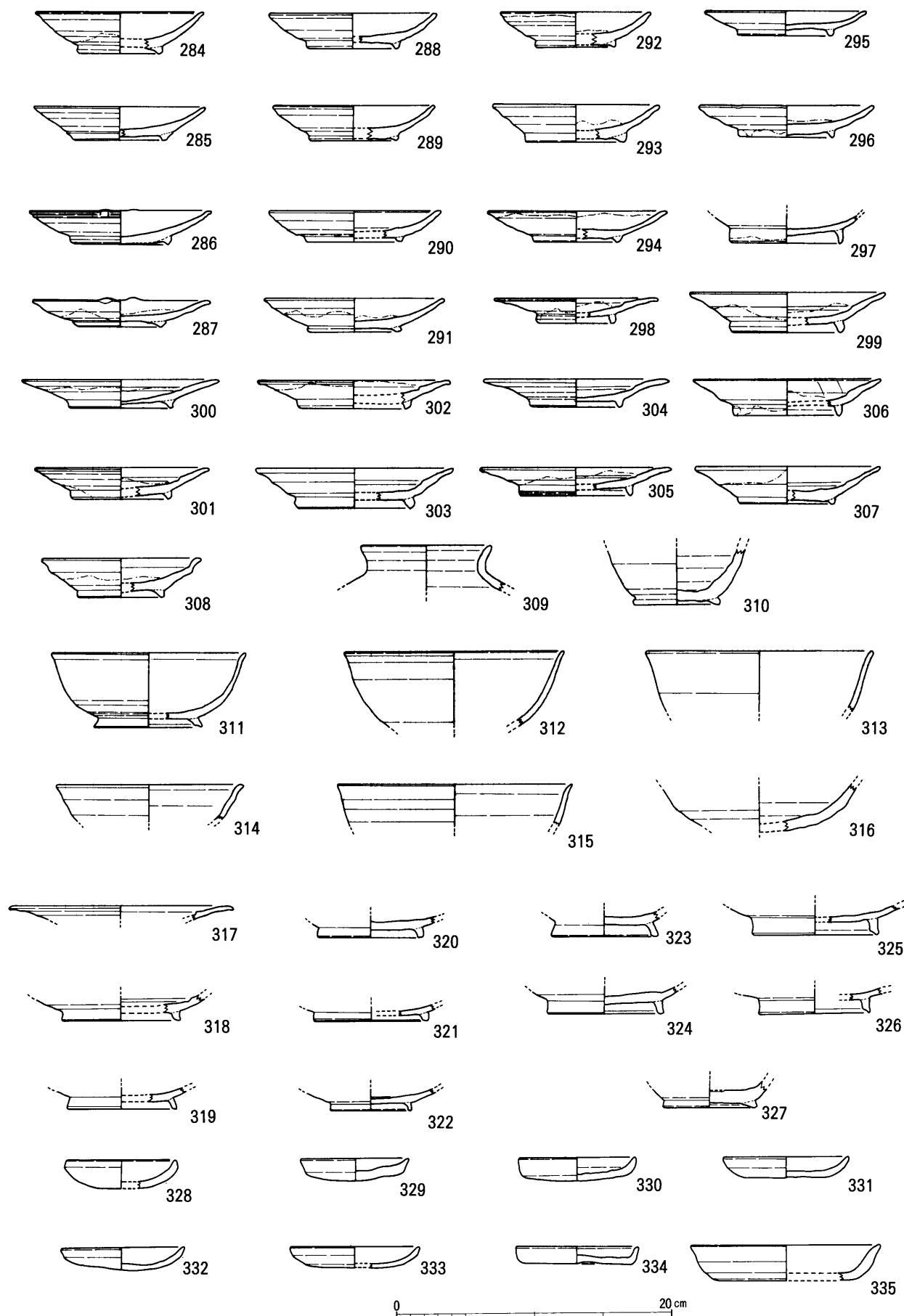
第30図 出土遺物実測図(6) (1 : 4)



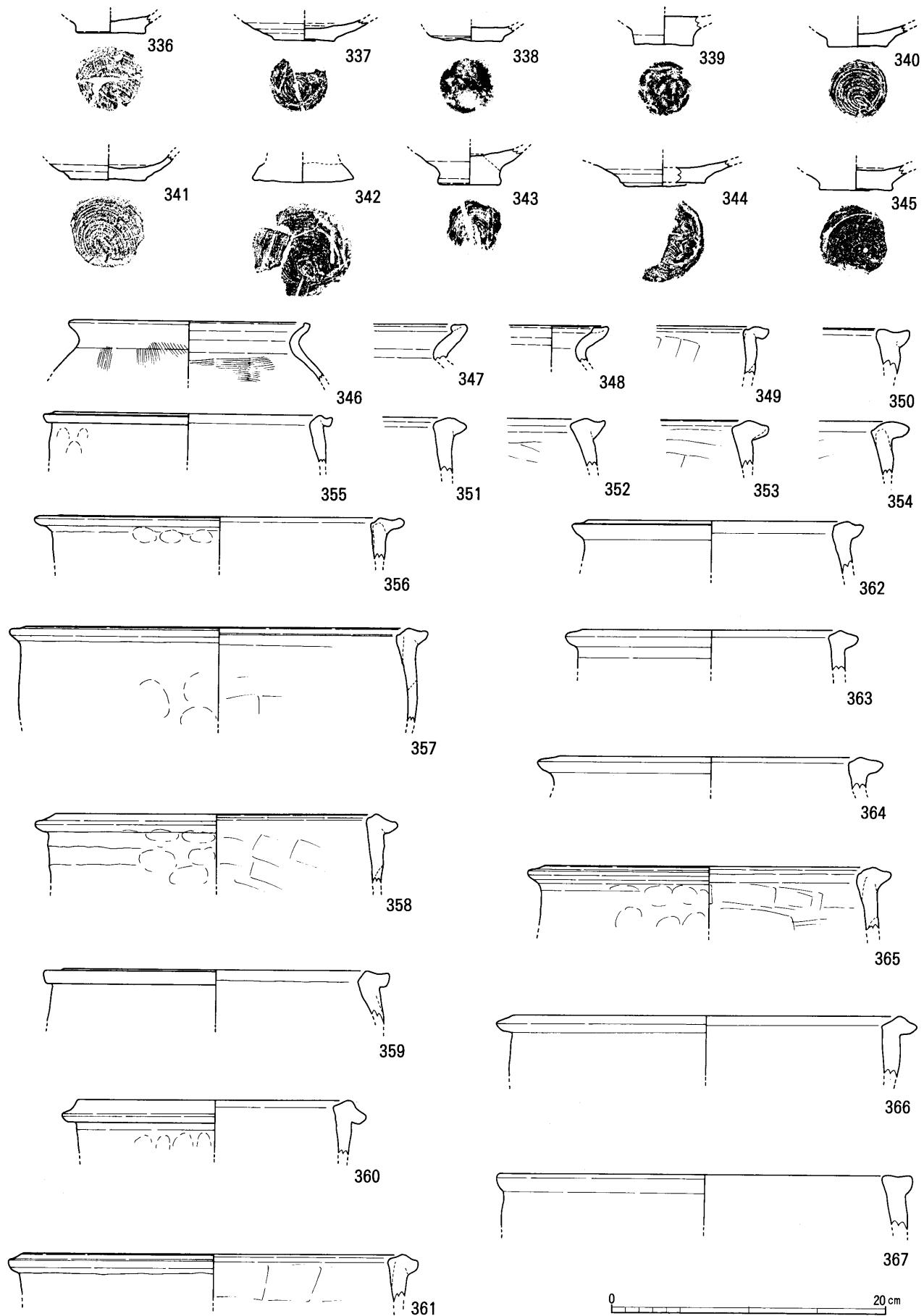
第31図 出土遺物実測図(7) (1 : 4)



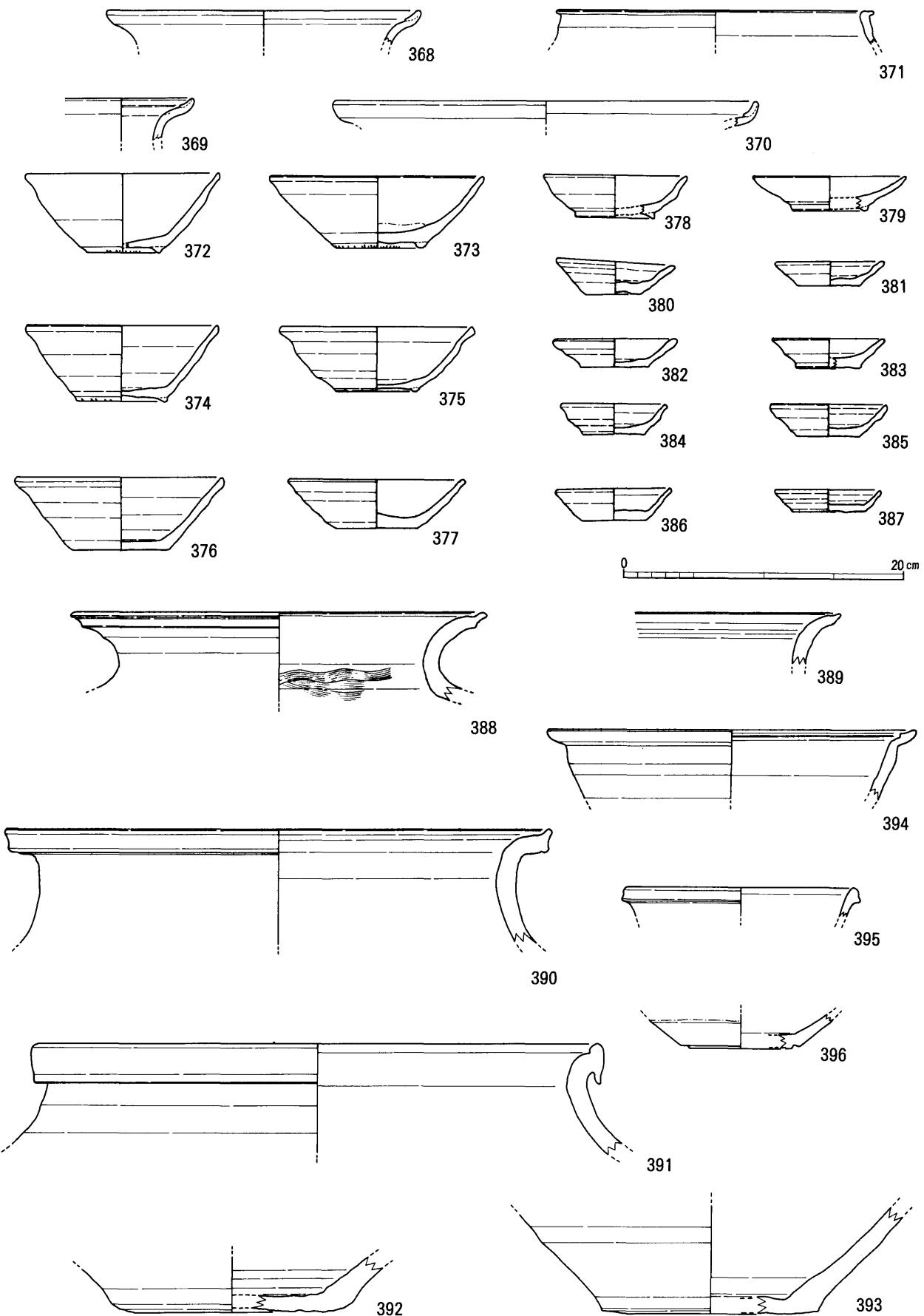
第32図 出土遺物実測図(8) (1 : 4)



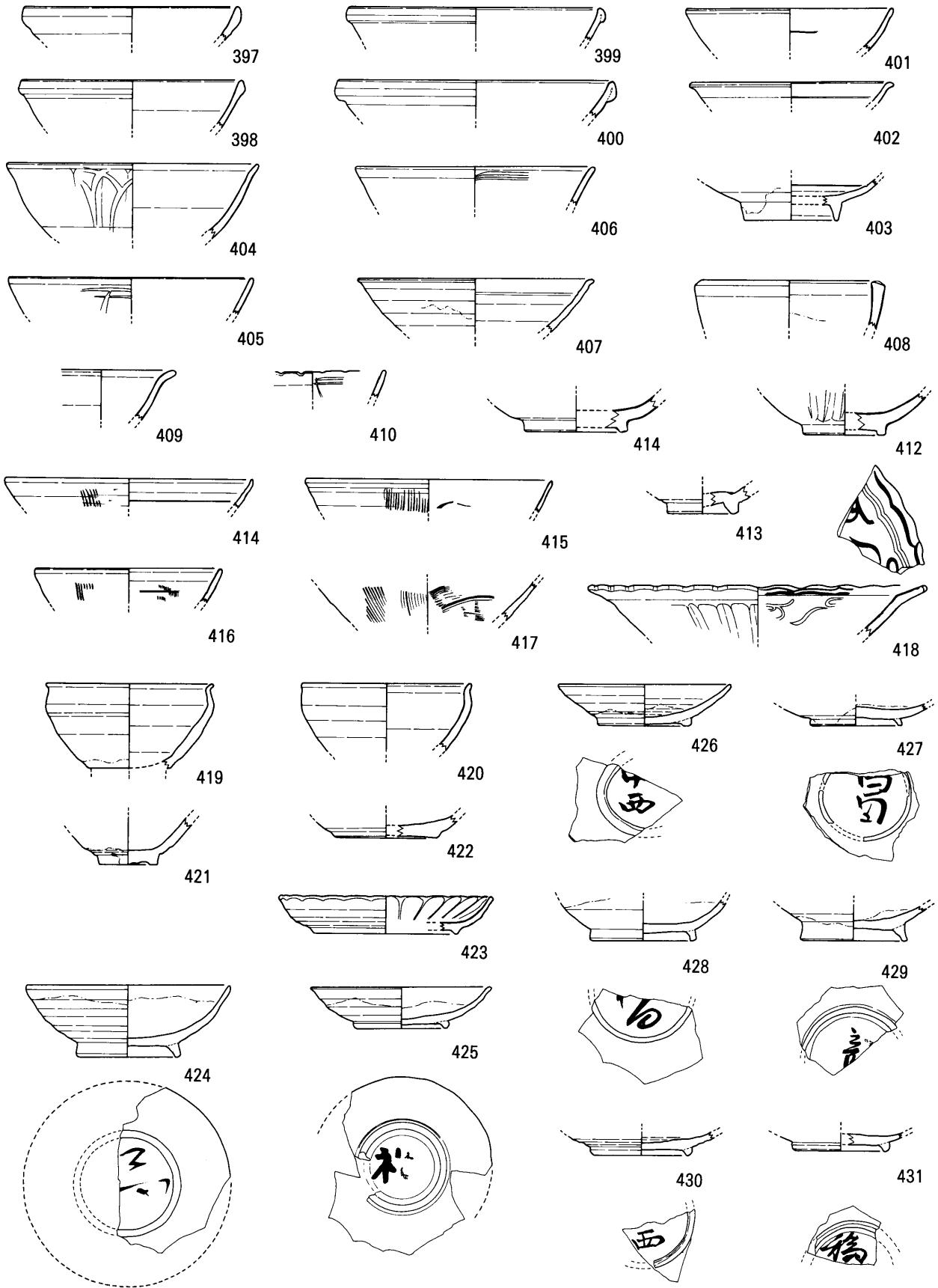
第33図 出土遺物実測図(9) (1 : 4)



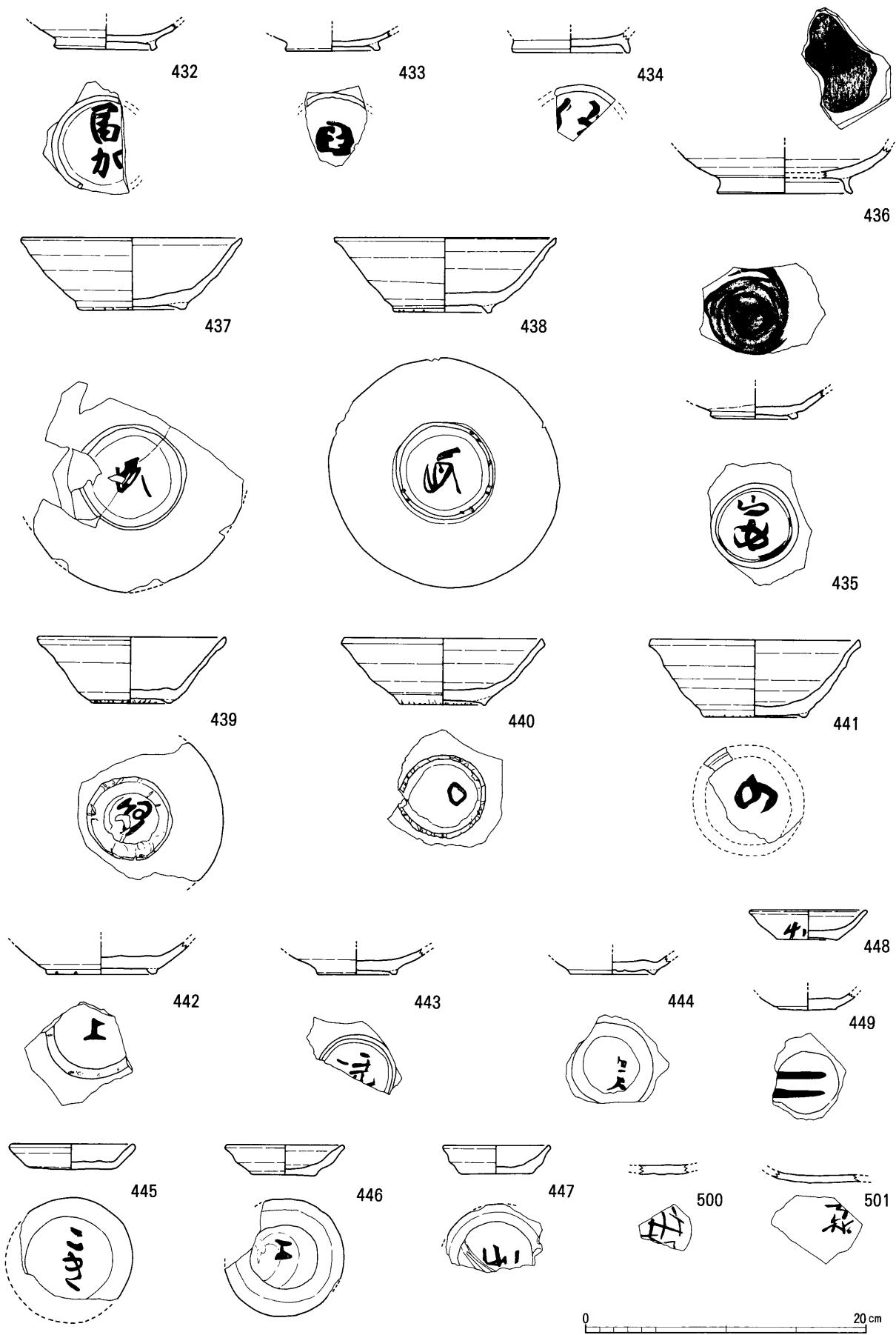
第34図 出土遺物実測図(10) (1 : 4)



第35図 出土遺物実測図(11) (1 : 4)



第36図 出土遺物実測図(12) (1 : 4)



第37図 出土遺物実測図(13) (1 : 4)

	規模(m)	深さ(m)	棟方向	平面形	竈	主柱穴 (m)	周溝	貯藏穴	出土遺物	時期	備考
S H 9	2.8×1.8	0.15	-	梢円形	東壁		-	-	土師器片	奈良	
S H19		0.1	-	不定形	北側		-	-	須恵器杯蓋(114・115)、土師器碗(116)・甕(117)	奈良	
S H31	4.0×3.85	0.1	N5° W	方形	東壁	0.3 ～0.5	-	竈右		奈良	

表6 竪穴住居一覧

	規模	柱間(m)		棟方向	柱掘形			出土遺物	時期	備考
	桁行×梁行 (m)	桁間	梁間		平面形	規模 (m)	深さ (m)			
S B 1	2 × 1 (4.8×2.2)	2.4	2.2	N 5° W	略円形	0.3～0.4	0.3	土師器片、山茶椀片、釘	鎌倉	
S B 2	2 × 1 (3.8×2.0)	1.9	2.0	N 3° W	略円形	0.2	0.15	土師器片、山茶椀片、繩文土器片	鎌倉	
S B 3	3 × 1 (6.3×2.0)	2.1	2.0	N 4° W	略円形	0.3	0.2	山茶椀(139)、土師器片、繩文土器片	鎌倉	
S B 4	4 × 1 (7.6×2.4)	1.9	2.4	N 3° W	略円形	0.2	0.15		鎌倉	
S B 6	3 × 3 (5.55×4.8)	2.05+2.05 +1.45	2.4	N 6° W	略円形	0.4～0.7	0.2～0.45	灰釉陶器碗(130～132)、綠釉陶器段皿(133)、須恵器片、土師器甕片	平安	総柱? 東面と南面に堀を伴う
S B 8	2 ×(1) (3.9×1.5)	1.95	1.5	N 5° W	略円形	0.2～0.4	0.1～0.4	須恵器片	平安	総柱
S B11	2 × 2 (3.8×3.3)	1.9	1.65	N 2° E	略円形	0.2～0.4	0.1～0.4	土師器甕(137・138)、灰釉陶器碗(134)、山茶椀(135・136)	平安	総柱
S B13	4 ×(1) (7.5×2.25)	2.25+1.5 +1.5	2.25	N 37° W	不整円形	0.3～0.8	0.2～0.5	土師器甕(122)	奈良	
S B16	3 × 2 (5.7×4.2)	東2.1+1.2+2.4 西1.8+2.1+1.8	2.1	N 25° W	円	0.2～0.4	0.3～0.4	土師器甕(123)	奈良	
S B18	4 × 2 (8.2×4.5)	2.05	2.25	N 25° W	略円	0.5～0.6	0.3～0.4	灰釉陶器碗(128・129)	平安	
S B20	4 ×(1) (7.9×1.8)	2.2+1.3 +2.2+2.2	1.8	N 30° W	略円形	0.2～0.5	0.2～0.4		奈良	北西隅の柱穴は攪乱により破壊
S B21	5 ×(2) (8.3×3.6)	1.8+1.45 +1.8+1.8 +1.45	1.8	N 30° W	不整円形	0.3～0.7	0.15～0.3	須恵器片	奈良	
S B22	5 ×(1) (8.25×1.55)	1.8+1.55 +1.55+1.8	1.55	N 30° W	不整円形	0.3～0.5	0.2～0.4	須恵器杯蓋(124・125)	奈良	
S B23	4 × 3 (8.0×4.8)	2.0	1.6	N 25° W	不整円形	40～70	30～40	須恵器片	平安	
S B24	4 × 3 (8.0×4.8)	2.0	1.6	N 22° W	不整円形	40～70	30～40	灰釉陶器碗(126・127)	平安	
S B28	3 × 2 (4.35×2.4)	1.45	1.2	W 34° S	略円	0.3～0.6	0.2～0.3		平安	
S B29	2 × 2 (4.2×4.2)	-	2.1	N 6° W	不整形	0.4～0.7	0.15		奈良	奈良

表7 掘立柱建物一覧

	規模	柱間 (m)	棟方向	柱掘形	出土遺物	時期	備考
S A 7	東3間 南4間	東3.0+2.05+1.75 南1.25+1.25+2.25+1.25	N 6° W E 6° N	略円形		平安	S B 6に伴う

表8 柱列一覧

	規模 (m)	深さ (m)	平面形	断面形	出土遺物	時期	備考
S K 5	1.4×1.0	0.2	不定形	逆台形	土師器高杯(163)	鎌倉	
S K 10	2.8×2.3	0.3	隅丸長方形	逆台形	灰釉陶器椀(158)、口クロ土師器皿(159)	平安	
S K 12	4.7×0.6	0.05~0.1	長楕円形	不定形	灰釉陶器椀(160)、山茶椀(161)、口クロ土師器台付椀(162)	平安	
S K 15	8.0×4.0	0.2~0.25	不整形	不定形	須恵器杯蓋(145・146)	奈良	
S K 17	1.0×0.7	0.3	隅丸長方形	逆台形	須恵器杯蓋(140~143)、土師器甕(144)	奈良	
S K 26	1.2×0.6	0.2	隅丸長方形	不定形	土師器甕(154)	奈良	
S K 30	0.5×0.5	0.3	隅丸三角形	逆台形	須恵器杯蓋(155)、土師器甕(156)、土師器長胴甕(157)	奈良	

表9 土坑一覧

	規模(m)	幅(m)	深さ(m)	出土遺物	時期	備考
S D 20	(32)	1.8	0.6	弥生土器壺(164)、須恵器杯蓋(165)、有台杯(166)、山茶椀(167・168)、青磁椀(169・170)	鎌倉	

表10 溝一覧

報告書 番号	登録番号	出土遺構	器種など			法量(cm)		調 整	色 調	胎 土	焼 成	残存度	備 考
			口径	器高	その他	口径	器高						
114	008-01	CN-4 SH 1 9	須恵器	杯蓋	16.0 (2.3)		口付「頂部口付」り摘み貼付付	素地: 明青灰色(5PB7/1)	蜜		やや良	口縁1/10	
115	077-01	CN-4 SH 1 9	須恵器	高台杯		底径 (2.6)	8.8	口付「底部口付」り高台貼付付	内: 灰白(N7/0) 外: "	やや粗(0.1cm以下の砂粒多く含む)	良	底1/12	美濃
116	008-02	CM-4 SH 1 9	土師器	杯	13.1 (5.0)		口付「付後付」口縁端部口付	内: 橙(5YR6/6)	やや密(~0.3cm以下の小石・石英・砂含む)	やや良	口縁1/2		
117	009-01	CN-4 SH 1 9	土師器	甕	20.9 (7.5)		口縁ヨコナデ 外面タケハ 内面ヨコナデ	内: 淡橙(5YR8/3) 外: "	粗(~0.1cm大の砂粒含む)	やや良	口縁1/4		
118	050-02	SH 3 1	土師器	甕	14.0 (6.9)		口縁ヨコナデ 外面タケハ 内面ヨコナデ	内: 淡橙(5YR8/3) 外: "	粗(~0.1cm大の砂粒含む)	やや不良	口縁1/3		
119	077-02	CT-4 SH 3 1	土師器	甕	17.3 (9.9)		口縁ヨコナデ 外面タケハ 内面ヨコナデ	内: にぶい黄橙(10YR7/4) 外: にぶい橙(5YR6/4)	粗(0.3cm以下の小石、石英・砂含む)	不良	口縁1/3		
120	013-01	CT-4 SH 3 1	土師器	甕	25.9 (8.0)		口縁ヨコナデ 外面タケハ 内面ヨコナデ	内: 浅黄橙(10YR8/4) 外: "	粗(0.2cm程の石英・長石多い)	磨耗はげしい	口縁1/6		
121	057-01	SH 3 1 カマド	土師器	甕	25.4 (8.6)		口縁ヨコナデ 外面タケハ 内面ヨコナデ	内: 浅黄橙(7.5YR8/4) 外: "	やや粗(0.2cm程度の石英・長石含む)	やや不良	口縁1/4		
122	014-03	CJ-3 SB 1 3	土師器	甕		(4.3)	口縁ヨコナデ 外面タケハ 内面ヨコナデ	内: 橙(7.5YR7/6)	やや密(0.3cmの長石・石英含む)	やや良	小片		
123	152-02	CM-4 SB 1 8	土師器	甕	20.2 (4.2)		口縁ヨコナデ	内: 淡黄橙(10YR8/3) 外: 灰白(2.5Y8/2)	~0.2mm台砂粒含む	やや量	口縁1/6		
124	014-02	CO-7 SB 2 2	須恵器	杯蓋	14.2 (1.3)		口付「頂部口付」り摘み貼付付	内: 灰(5Y6/1) 外: "	やや密	やや不良	口縁小片		
125	021-01	CP-7 SB 2 2	土師器	甕	25.0 (3.8)		口縁ヨコナデ 外面タケハ 内面ヨコナデ	内: 灰白(10YR8/2) 外: "	やや密(~1cmの長石・石英含む)	やや良	口縁1/16		
126	005-01	CK-3 SK 1 5	須恵器	杯蓋	15.0 (1.5)		口付「頂部口付」り摘み貼付付	内: にぶい赤褐色 外: 暗青灰色(5PB3/1)	やや密~0.1cmの長石含む	やや良	口縁1/12		
127	007-03	CM-2 SK 1 5	須恵器	長頸甕	13.0 (7.6)		口付「頂部口付」り摘み貼付付	内: 灰白色(N7/1) 外: 灰白色(7.5Y7/1)	密 ~0.2cm以下の長石含む	良	口縁1/4		
128	007-02	CL-4 SK 1 5	土師器	杯		(3.0)	口付「付後付」口縁端部口付	内: 浅黄橙(7.5YR8/4)	0.1cm以下の砂粒含む	良	口縁小片		
129	007-01	CL-4 SK 1 5	土師器	甕		(2.4)	口縁ヨコナデ 外面タケハ 内面ヨコナデ	内: 灰白色(2.5Y8/2) 外: "	やや粗 ~0.3cmの石粒含む	やや不良	口縁小片		
130	004-02	CK-3 SK 1 5	土師器	甕	14.0 (2.3)		口縁ヨコナデ 外面タケハ 内面ヨコナデ	内: 浅黄橙色(10YR8/3) 外: "	やや密 ~0.3mmの石粒含む	やや良	口縁1/10		
131	004-01	CK-3 SK 1 5	土師器	甕	14.4 (3.5)		口縁ヨコナデ 外面タケハ 内面ヨコナデ	内: 浅黄橙色(10YR8/3) 外: 浅黄橙色(10YR8/4)	やや粗 ~0.3cmの石粒含む	やや良	口縁1/8		
132	006-01	CL-4 SK 1 5	土師器	甕	13.7		口縁ヨコナデ 外面タケハ 内面ヨコナデ	内: にぶい橙(7.5YR7/3) 外: 淡赤橙(2.5YR7/4)	やや粗 ~0.2cmの石粒含む	やや不良	口縁1/12		
133	004-05	CK-3 SK 1 5	土師器	甕	14.8 (3.1)		口付	内: 灰白色(2.5Y7/0) 外: "	やや密 ~0.1cmの砂粒含む	良	口縁1/9		
134	004-04	CK-3 SK 1 5	土師器	清潔甕	17.2 (2.1)		北付工 ハテ	内: 灰白色(2.5Y7/1) 外: "	やや密 ~0.2cmの砂粒含む	良	口縁1/10		
135	010-01	CN-2 SK 1 7	須恵器	杯蓋	16.9 (3.3)		口付「頂部口付」り摘み貼付付	内: 暗灰(N3/0) 外: "	粗(0.5cm以下の小石・砂粒含む)	やや良	口縁1/6		
136	068-01	CN-2 SK 1 7	須恵器	杯蓋	16.8 (2.6)		口付「頂部口付」り摘み貼付付	内: 灰(N4/0) 外: "	やや密(0.1cmの長石・石英含む)	やや良	口縁1/12		
137	068-02	CN-2 SK 1 7	須恵器	杯蓋	17.4 (1.7)		口付「頂部口付」り摘み貼付付	内: 黑灰(2.5Y5/1) 外: 灰(5Y6/1)	やや密(~0.1cmの長石・石英含む)	やや良	口縁1/10		
138	068-03	CN-2 SK 1 7	須恵器	杯蓋		(2.1)	口付「頂部口付」り摘み貼付付	内: 灰白(7.5Y7/1) 外: "	やや密(0.1cm以下砂粒少含む)	やや良	口縁小片		
139	068-04	CS-5 SK 1 7	土師器	甕		(3.3)	口縁ヨコナデ 外面タケハ 内面ヨコナデ	内: にぶい橙(7.5YR7/4) 外: "	やや密(0.2cm以下的小石・砂粒含む)	やや不良	口縁小片		
140	011-01	CQ-6 SK 2 6	土師器	甕	13.8 (2.1)	16.0	口縁ヨコナデ 外面タケハ 内面ヨコナデ	内: 橙(5YR7/6) 外: 浅黄橙(7.5YR8/6)	やや粗 ~0.2cmの砂粒含む	やや良	口縁2/3		
141	012-03	CS 2 SK 3 0	須恵器	杯		底径 (3.0)	10.4	口付「底部ハ切後付」	内: 青灰(5B6/1) 外: "	密 ~0.1cmの長石多く含む	やや良	底1/7	
142	012-02	CS 2 SK 3 0	土師器	甕		19.2 (2.0)		口縁ヨコナデ 外面タケハ 内面ヨコナデ	内: にぶい黄橙(10YR7/3) 外: "	やや密 ~0.2cmの長石含む	やや良	口縁1/12	
143	012-01	CS 2 SK 3 0	土師器	甕		32.4 (7.8)		口縁ヨコナデ 外面タケハ 内面ヨコナデ	内: 浅黄(10YR8/3) 外: "	やや密 ~0.1cmの長石含む	やや不良	口縁1/6	
144	019-04	BL-25 SB 6	叩土師器	皿		(2.5)		口付「底部ハ切後付」	内: 灰白(2.5Y8/2) 外: "	密	やや不良	小片	
145	019-03	CI-1 S B 6	灰釉陶器	椀		(5.6)		口付「底部付押後付」高台貼付付	内: 明利-7'灰(2.5GY7/1) 外: 灰白(7.5Y8/2)	密	良	小片	K-90
146	019-02	拠幅部分 S B 6	灰釉陶器	椀		(2.4)	高台径 7.2	口付「底部付押後付」高台貼付付	内: 灰白(N7/0) 外: "	密	やや良	底1/5	K-90
147	023-01	CI-1 S B 6	綠釉陶器	輪花段皿				口付「ミガ」高台貼付付	明緑色	やや密(~0.1cmの長石含む)	やや良	口縁2/3	K-90
148	019-01	BJ-25 S B 1 1	灰釉陶器	椀		(1.2)	高台径 7.8	口付「底部付押後付」高台貼付付	内: 灰白(N8/0) 外: "	密	良	底1/3	K-90
149	023-02	CI-1 S B 1 1	陶器	山茶椀	17.6 (5.9)		高台径 9.0	口付「底部付押」高台貼付付	内: 灰白(N7/0) 外: "	やや密	やや良		4型式
150	020-01	BJ-25 S B 1 1	陶器	山茶椀	16.8 (5.4)	8.6	高台径 8.6	口付「底部付押」高台貼付付	内: 灰白(10YR8/1) 外: "	やや粗 1~5mm大砂粒含む	良	完形	4型式
151	023-04	CJ-1 S B 1 1	土師器	甕	19.2 (7.1)		付北・付工	内: 黄褐(10YR4/2) 外: 褐灰(7.5YR4/1)	やや密(~0.1cmの長石・石英含む)	やや良	口縁1/3		
152	106-02	CJ-1 S B 1 1	土師器	清潔甕	23.0 (3.4)		付北	内: にぶい褐(7.5YR5/3) 外: "	粗(0.3cm以下の石英・長石・砂含む)	やや良	口縁1/12		
153	018-05	CL-2 S B 2 2	灰釉陶器	椀		(1.9)	底径 7.2	口付「底部付押後付」高台貼付付	内: 灰白(2.5Y8/1) 外: "	密	良	底1/6	O-53
154	018-04	CL-2 S B 2 2	灰釉陶器	深椀		(3.8)		口付「底部付押後付」高台貼付付	内: 灰白(2.5Y8/1) 外: 灰白(2.5Y8/1)	やや密 (~0.2cmの砂粒含む)	良	口縁1/12	O-53
155	018-02	CO-5 S B 2 4	灰釉陶器	椀		(2.0)		口付「底部付押後付」高台貼付付	内: 灰白(7.5Y8/1) 外: "	密	良	口縁小片	ハケヌリ?
156	018-01	CO-5 S B 2 4	陶器	山茶椀		(2.8)		口付「底部付押」高台貼付付	内: 灰白(N8/0) 外: "	密	良	口縁小片	4型式

表11 遺物観察表(1)

報告書番号	登録番号	出土遺構	器種など			法量(cm)			調整	色調	胎土	焼成	残存度	備考
			口径	器高	その他	口径	器高	その他						
157	001-02	CJ-1 SK1 0	灰釉陶器	施		15.8	(3.3)		口付け 底部付け	内:灰白色(N8/) 外: "	密	良	口縁1/10	O-53
158	001-01	CJ-1 SK1 0	口付土師器	皿			(1.4)		口付け 底部付け	内:灰白色(10Y8/2) 外:暗灰色(N3)	やや密 ~0.1cmの長石・石英含む	やや良	底1/4	
159	002-01	BL-24 SK1 2	灰釉陶器	施					口付け 底部付け	内:灰白色(N7/) 外: "	密 ~0.1cmの長石含む	やや良	口縁1/12	O-53
160	003-01	BL-24 SK1 2	陶器	山茶碗	16.0	5.5	高台径 7.2		口付け 底部付け	内:灰白色(5Y7/1) 外: "	密 ~0.2mmの砂粒含む	良	口縁小片	
161	002-02	BL-24 SK1 2	口付土師器	施			高台径 8.4		口付け 底部付け	内:淡黄褐色 外: "	やや密	やや不良		
162	2004-02	AW-12 SB 4	陶器	山茶碗	13.6	5.6	高台径 6.0		口付け 底部付け	内:灰白色(10Y8/1) 外: "	やや粗 ~1~5mm大砂粒含む	良好	1/2	6~7型式
163	2014-01	SK 5	土師器	高杯		(4.5)			北村口付け	内:灰白色(10YR8/2) 外: "	やや密 ~1.0mm大長石・雲母含む		脚柱部	
164	017-01	CQ-8 SD 2 5	弥生土器	壺	9.3		底径 6.4		外面口付け	内:橙(2.5YR8/6) 外: "	粗 ~0.5cmの長石・石英含む	口縁下半		
165	016-05	BP-25 SD 2 5	須恵器	杯蓋		(2.89)			口付け 頂部口付け	内:灰(N6/0) 外: "	やや密 ~0.3cm以下 の小石少量含む	良	口縁1/12	
166	016-01	BP-25 SD 2 5	須恵器	高台杯	15.5	3.6	高台径 11.2		口付け 底部口付け	内:青灰(5B5/1) 外: "	粗 ~0.2cm大の砂粒 大量に含む	良	口縁1/12	
167	016-03	CP-4 SD 2 5	陶器	山茶碗		(2.3)	高台径 7.6		口付け 底部付け	内:灰白(2.5Y7/1) 外: "	やや密 ~0.2cmの長石・石英含む	やや不良		5~6型式
168	015-01	CP-3 SD 2 5	山茶碗	碗	13.0	5.8	高台径 6.6		口付け 底部付け	内:灰白(2.5Y7/1) 外: "	やや粗 ~0.2cmの石英含む	やや良	口縁2/5	7型式
169	090-02	CP-6 SD 2 5	青磁	輪蓮弁文壷	15.6	(2.7)			口付け 連弁口付	素地:灰白(5Y7/1)	密	良	口縁1/6	龍泉I-5
170	090-01	CP-5 SD 2 5	青磁	輪蓮弁文壷	17.2	(4.8)			口付け 連弁口付	素地:灰白(5Y7/1)	密	良	口縁1/5	龍泉I-5
171	062-06	CJ-1 p i t 3	須恵器	杯蓋	13.0	5.5	高台径 6.4		口付け 口付け	内:明青灰(10BG7/1) 外: "	やや密	やや良	1/4	
172	053-01	CH-1 p i t 3	須恵器	杯蓋		(1.0)			口付け 口付け	内:灰白(N7/0) 外: "	密 ~0.2cm大の砂粒 含む	良	小片	
173	042-02	CN-1 p i t 1	須恵器	杯蓋		(1.6)			口付け 頂部口付け	内:浅黄橙(10YR8/4) 外: "	密	不良	小片	生焼け
174	022-03	CN-3 p i t 4	須恵器	台付杯		(1.1)	高台径 10.0		口付け 底部口付け	内:赤橙(10R6/6) 外: "	やや密 ~0.2cmの砂粒 含む	やや良	底1/12	生焼け
175	022-05	BK-25 p i t 1	須恵器	台付杯			高台径 12.8		口付け 底部口付け	内:灰(N4/0) 外: "	やや密 ~0.3cmの砂 粒含む	良	底1/3	
176	057-04	折幅部分 p i t 1	灰釉陶器	施					口付け	内:灰白(2.5Y8/2) 外: "	密 ~0.1cm大の砂粒 含む	良	口縁小片	
177	057-05	BI-25 p i t 3	灰釉陶器	施					口付け	内:灰白(5Y7/1) 外: "	密 ~0.1cm大の砂粒 含む	良	口縁小片	
178	077-03	CJ-1 p i t 1	灰釉陶器	施			高台径 6.7		口付け 底部付け	内:灰白(5GY8/1) 外: "	やや密 ~0.1cm大の 砂粒含む	良	底部	
179	021-03	CN-5 p i t 2	灰釉陶器			12.0	2.2	高台径 7.1	口付け 底部付け	内:灰白(2.5Y8/1) 外: "	密 ~0.1cm大の砂粒 含む	やや良	底2/5	
180	022-04	BI-24 p i t 2	灰釉陶器	段皿	14.3	(1.7)	高台径 7.6		口付け 底部付け	内:灰白(2.5Y7/1) 外: "	密 長石微細粒含む	良	口縁1/10	O-53
181	070-05	BI-23 p i t 1	綠釉陶器	施			高台径 6.1		口付け カキ 高台付	内:濃緑色 外:明緑色	密 ~0.1cmの長石含 む	やや良	底1/2	
182	016-02	CO-5 p i t 1	陶器	山茶碗		-3.7			口付け 底部付け	内:灰白(N7/0) 外: "	密	良	口縁小片	7型式
183	2004-05	AY-12 p i t 5	陶器	山茶碗		(4.7)	高台径 7.2		口付け 底部付け	内:灰白色(10Y7/1) 外: "	やや密 粒含む	良好	1/4	5~6型式
184	053-03	BJ-25 p i t 2	土師器	皿					ナガオサ後ナガオ	内:橙(2.5YR7/8) 外: "	やや粗 ~0.3cm大の 砂粒含む	やや良	小片	
185	2006-07	AT-12 p i t 1	口付土師器	皿	3.0	1.4			口付け 底部付け	内:浅黄橙色(10YR8/4) 外: "	密	やや不良	完形	
186	022-02	C-M5 p i t 5	口付土師器	皿			高台径 7.6		口付け 底部付け	内:灰白(10YR8/2) 外:淡橙(5YR8/4)	やや密 ~0.1cm大の 砂粒含む	やや不良	底1/2	
187	106-01	C-H1 p i t 3	土師器	甕	21.0	(4.8)			口付け 底部付け	内:にぶい橙(5YR7/4) 外: "	やや密 ~0.3cm大の 砂粒含む	良	口縁1/7	
188	098-01	B-G25 p i t 4	土師器	清郷型鍋					ナガオサ	内:灰赤(7.5R5/6) 外: "	やや粗	やや良	口縁1/8	○
189	023-03	CJ-1 p i t 1	土師器	清郷型鍋	23.0	(3.5)			ナガオサ	内:にぶい橙(7.5YR5/3) 外: "	粗 ~0.3cm以下の石 英・長石・小石含む	やや良	口縁1/12	
190	062-04	BN-23 包含層	須恵器	杯	11.8	(3.1)			口付け 口付け	内:灰白(N7/0) 外: "	やや密 ~0.1cm大の 砂粒含む	良	口縁1/3	
191	060-02	BN-25 包含層	須恵器	杯蓋	17.0	(2.7)			口付け 頂部口付け	内:灰白(7.5Y7/1) 外: "	やや粗 ~0.3cm大の 砂粒含む	やや良	口縁1/10	美濃
192	042-03	CS-6 包含層	須恵器	杯蓋	14.8	(1.8)			口付け 頂部口付け	内:暗青灰(10BG3/1) 外:橙(7.5YR6/8)	やや密 ~0.1cm大の 砂粒含む	やや不良	口縁1/12	生焼け
193	042-04	BP-25 包含層	須恵器	杯蓋					口付け 頂部口付け	内:褐灰(7.5YR5/1) 外: "	やや密 ~0.1cm大の 砂粒含む	やや不良	口縁小片	生焼け
194	2004-03	AX-13 包含層	須恵器	高台杯	17.5	3.9	高台径 12.8		口付け 底部口付け	内:灰白色(N7) 外:灰黄色(2.5Y6/2)	やや密 0.5~1mm大 砂粒含む	良好	1/4	
195	049-03	BJ-23 包含層	須恵器	杯蓋					口付け 頂部口付け	内:灰(N7/0) 外:灰(N6/0)	やや密 ~0.1cmの長石多含	やや良	口縁1/5	
196	051-04	BL-25 包含層	須恵器	杯蓋	16.2				口付け 頂部口付け	内:灰黄(2.5Y7/2) 外: "	やや密	やや良	口縁1/8	
197	2017-04	AX-12 包含層	須恵器	杯蓋	20.5	(2.3)			口付け 口付け	内:灰色(N 5/) 外: "	密	良好	底1/12	
198	046-04	CK-3 包含層	須恵器	杯蓋	15.2	(3.3)			口付け 頂部口付け	内:にぶい橙(7.5YR7/4) 外: "	やや密 ~0.2cmの砂粒 含む	良	口縁1/5	生焼け
199	061-03	CN-1 包含層	須恵器	稜碗蓋	16.4	(3.6)			口付け 頂部口付け	内:利フ灰(2.5GY6/1) 外:灰(N6/0)	密 0.1cm大の長石含む	やや良	口縁1/8	

表12 遺物観察表(2)

報告書番号	登録番号	出土遺構	器種など			法量(cm)			調整	色調	胎土	焼成	残存度	備考
			口径	器高	その他	口径	器高	その他						
200	056-04	CO-4 包含層	須恵器	杯蓋		(3.5)			口付テ「底部口付テ」高台 貼付テ	内:灰白(10YR7/1) 外:灰白(5Y7/1)	やや密～0.1cmの大砂粒含む	やや不良	口縁1/10	
201	042-01	CL-4 包含層	須恵器	杯蓋	19.2	(2.2)			口付テ「頂部口付テ」り摘み 貼付テ	内:浅黄(10YR8/4) 外:赤褐(10YR6/6)	やや粗～0.2cmの長石・ 石英含む	やや良	口縁1/10	生焼け
202	062-02	CQ-7 包含層	須恵器	杯	8.5	2.5	底径 4.5		口付テ「底部口付テ」後付	内:灰利-「(5Y6/2) 外:灰(10Y5/1)	やや粗～0.3cm大の砂粒含む	やや良	完形	
203	062-03	CR-6 包含層	須恵器	杯	10.2	3.2			口付テ「頂部口付テ」	内:明青灰(5B97/1) 外: "	やや密	良	ほぼ完形	
204	044-01	CT-3 包含層	須恵器	杯	11.2	3.4			口付テ「口付テ」	内:橙(5YR7/6) 外:浅黄橙(7.5YR8/6)	やや密～0.3cm大の砂粒含む 腐蝕含む	不良	口縁2/1	生焼け
205	020-05	CU-4 包含層	須恵器	杯	11.2	3.6			口付テ「底部口付テ」	内:青灰(5B5/1) 外: "	やや粗	やや良	4/5	
206	063-02	BO-24 包含層	須恵器	杯	10.6	3.8			口付テ「底部口付テ」	内:灰(N6/0) 外: "	やや密～0.3cm大の砂粒含む	良	ほぼ完形	
207	063-01	CL-4 包含層	須恵器	杯	10.8	3.4	底径 6.2		口付テ「底部口付テ」	内:青灰(5B6/1) 外: "	粗～0.2cm以下の砂粒多含む	良	口縁1/12	
208	044-03	CK-3 包含層	須恵器	杯	12.6	3.7			口付テ「口付テ」	内:浅黄橙(10YR8/4) 外: "	密～0.1cmの砂粒含む	やや良	口縁1/6	生焼け
209	044-02	CJ-3 包含層	須恵器	杯	13.2	3.5			口付テ「口付テ」	内:浅黄橙(7.5YR8/4) 外: "	密～0.1cm大の砂粒含む	不良	口縁1/5	生焼け
210	061-01	CO-1 包含層	須恵器	杯	12.8	3.9			口付テ「底部口付テ」	内:青灰(5B6/1) 外: "	やや密	良	口縁1/2	
211	060-03	BG-24 包含層	須恵器	杯	12.8	3.4			口付テ「底部口付テ」	内:灰(10Y6/1) 外: "	密～0.2cm大の砂粒含む	良	口縁1/4	
212	2017-05	AY-10 包含層	須恵器	杯	13.0	(3.5)			口付テ「口付テ」	内:青灰色(5PB6/1) 外: "	やや密～0.5～1mm大砂粒含む	良好	口縁1/8	
213	060-06	BM-25 包含層	須恵器	杯	14.8	3.7	底径 9.6		口付テ「底部口付テ」	内:灰白(7.5Y7/2) 外:利ア「灰(2.5GY6/1)	密	良	底部欠損	
214	048-02	CK-3・4 包含層	須恵器	杯	14.4	4.0			口付テ「口付テ」	内:浅黄橙(10YR8/3) 外: "	密～0.1cmの砂粒含む	良	1/3	生焼け
215	061-05	BT-25 包含層	須恵器	杯	14.2	4.0	底径 7.6		口付テ「底部口付テ」	内:明利ア「(2.5GY7/1) 外: "	やや密	良	1/5	
216	2008-01	AX-11 包含層	須恵器	杯	15.2	3.8			口付テ「口付テ」	内:明緑灰色(5G7/1) 外: "	密	良好	1/4	
217	2018-02	AX-12 包含層	須恵器	杯	16.0	(3.9)			口付テ「口付テ」	内:青灰色(5PB6/1) 外: "	やや粗～0.5～5mm大砂粒含む	良好	口縁1/8	
218	064-03	CL-4 包含層	須恵器	杯	14.2	3.0	底径 11.0		口付テ「底部口付テ」	内:灰(N6/0) 外: "	やや密～0.2cmの砂粒含む	良好	口縁1/3	
219	2018-01	AX-10 包含層	須恵器	杯	14.0	2.7			口付テ「口付テ」	内:灰オリーブ色(7.5Y6/2) 外: "	やや密～0.5～1mm大砂粒含む	良	口縁1/10	
220	060-04	CK-4 包含層	須恵器	杯	14.0	3.1	底径 9.2		口付テ「底部口付テ」	内:灰(10YR6/1) 外:灰(10Y5/1)	密～0.1cm以下の砂粒含む	良	口縁1/5	
221	060-05	BM-25 包含層	須恵器	杯	14.4	3.7	底径 9.4		口付テ「底部口付テ」	内:灰(N6/0) 外: "	やや密～0.2cmの砂粒含む	良	口縁1/10	
222	051-03	BL-24 包含層	須恵器	杯	15.6	3.1			口付テ「口付テ」	内:にぶい黄橙(10YR6/3) 外:灰(5Y5/1)	密～0.2cm大の砂粒含む	やや良	口縁1/10	
223	051-02	CJ-3 包含層	須恵器	杯	17.8	3.3			口付テ「口付テ」	内:灰白(2.5Y7/1) 外: "	密～0.5cm大の砂粒含む	やや良	口縁1/10	
224	051-01	CM-1 包含層	須恵器	杯	19.6	(3.2)			口付テ「口付テ」	内:灰白(5Y7/1) 外:灰(5Y6/1)	密～0.1cm以下の砂粒含む	良	口縁1/10	
225	061-02	CM-5 包含層	須恵器	高台杯	12.8	3.4	高台径 8.7		口付テ「底部口付テ」高台 貼付テ	内:灰褐(5YR6/2) 外:灰(5N6/0)	密～0.1cm大の砂粒含む	やや良	口縁1/10	
226	062-01	BQ-25 包含層	須恵器	高台杯	15.4	4.1	高台径 10.5		口付テ「底部口付テ」高台 貼付テ	内:褐灰(10YR6/1) 外:褐灰(5YR5/1)	密～0.3cm大の砂粒含む	良	口縁1/6	
227	043-01	CL-4 包含層	須恵器	高台杯	17.3	6.2	高台径 10.8		口付テ「底部口付テ」高台 貼付テ	内:浅黄橙(10YR8/3) 外:にぶい赤橙(10R6/3)	やや粗～0.5cm大砂多含む	やや不良	口縁1/3	生焼け
228	2004-04	AY-12 包含層	須恵器	杯蓋	15.5	4.7			口付テ「口付テ」 摘み貼付テ	内:灰白色(N7) 外: "	やや粗～1～3mm大砂粒含む	良	1/10	
229	042-05	CN-24 包含層	須恵器	杯		(2.0)	高台径 (10.4)		口付テ「口付テ」	内:赤褐(10R5/4) 外:橙(7.5YR7/6)	やや密～0.1cm大の長石含む	やや不良	底部のみ	生焼け
230	2016-01	AX-11 包含層	須恵器	高台杯		(1.1)	10.4		口付テ「底部口付テ」高台 貼付テ	内:灰オリーブ色(7.5Y6/2) 外: "	密～0.5～2.0mm大長石含む	良	底1/6	
231	2016-02	AY-12 包含層	須恵器	高台杯		(1.7)	高台径 9.6		口付テ「底部口付テ」高台 貼付テ	内:灰色(N 6 /) 外: "	やや密～0.5～1.0mm大長石含む	良	底1/6	
232	2017-02	AX-12 包含層	須恵器	高台付		(1.4)	高台径 13.0		口付テ「底部口付テ」高台 貼付テ	内:灰白色(5Y7/1) 外:オリーブ色(2.5GY5/1)	密	良	底1/8	
233	041-02	CK-3 包含層	須恵器	杯	12.8	3.7			口付テ「口付テ」	内:褐灰(10YR5/1) 外:浅黄橙(7.5YR8/4)	やや密～0.1cm大の砂粒含む	やや良	1/4	『未名国灰』
234	051-06	BH-25 包含層	須恵器	高杯		(3.7)	底径 8.5		口付テ	内:灰褐(5YR6/2) 外:褐灰(5YR6/1)	やや粗～0.3cm大の砂粒含む	やや良	底1/6	
235	2018-04	AX-11 包含層	須恵器	高盤		(12.5)	最大径 4.0		口付テ	内:灰白色(5Y8/1) 外: "	密	良	脚柱部	
236	069-01	CO-5 包含層	須恵器	円面鏡		(2.4)	観部径 11.2		ナテ	内:灰白(2.5Y7/1) 外: "	やや密～0.1cmの砂粒含む	良	観部/2	
237	069-03	BM-25 包含層	須恵器	円面鏡		(3.2)			ナテ	内:浅黄橙(10YR8/3) 外: "	やや密	不良	脚台部	
238	069-03	CO-4 包含層	須恵器	円面鏡		(3.2)	底径 (22.3)		ナテ	内:浅黄橙(10YR8/4) 外: "	やや密	不良	脚台部	
239	057-02	CQ-25 包含層	須恵器	長頸瓶	10.2	(10.0)			口付テ「沈線2条」	内:灰白(5Y7/1) 外: "	やや密～0.2cm大の砂粒含む	やや良	口縁1/6	
240	061-04	CN-24 包含層	須恵器	長頸瓶	10.2	(11.3)			口付テ	内:浅黄橙(7.5YR8/4) 外:灰(N5/0)	やや粗～0.4cm大の砂粒含む	良	口縁1/10	
241	059-01	BH-23 砂層	須恵器	平瓶		(15.0)	最大径 17.9		口付テ「口付テ」把手貼付	内:明青灰(5PB7/1) 外: "	密～0.1cmの長石含む	良	4/5	
242	048-01	CL-4 包含層	須恵器	平瓶		(12.7)	最大径 20.0		口付テ「口付テ」把手貼付	内:灰白(10Y7/1) 外:灰白(7.5Y7/1)	やや密～0.3cmの長石含む	良	体部4/5	

表13 遺物観察表(3)

報告書 番号	登録番号	出土遺構	器種など	法量(cm)			調整	色調	胎土	焼成	残存度	備考
				口径	器高	その他						
243	037-04	CN-24 包含層	須恵器 横瓶	14.0			叩きテロコウシリタキ	内：にぶい橙(7.5YR 6/4) 外："	やや密～0.3cm以下の小石含む	不良	口縁1/12	生焼け
244	047-01	BL-23 包含層	須恵器 横瓶	14.4	(5.0)		叩きテロコウシリタキ	内：にぶい橙(7.5YR 7/4) 外：橙(2.5YR7/6)	やや密～0.2cm以下の砂粒含む	やや良	口縁1/9	生焼け
245	045-01	BN-24 包含層	須恵器 鉢	21.2	(6.5)		叩きテロコウシリ	内：にぶい黄橙(10YR7/4) 外：淡黄(2.5Y8/4)	密～0.1cm大の砂粒含む	やや不良		生焼け
246	050-01	CO-01 包含層	須恵器 鉢	21.2	(7.1)		叩きテロコウシリ	内：灰白(7.5Y7/1) 外：灰白(10Y7/1)	粗～0.2cm大の砂粒多く含む	やや良	口縁1/10	
247	2008-03	BA-13 包含層	須恵器 豆	28.2	(5.2)		叩きテロ波状文2段	内：褐色(10YR6/1) 外：にぶい赤褐色(5YR4/4) 褐色(10YR6/1)	やや密～0.5～1mm大砂粒含む	良	口縁1/8	
248	060-01	BM-23 包含層	須恵器 豆	34.8	(6.9)		叩きテロ波状文2段	内：灰白(2.5Y7/1) 外："	密～0.2cm大の砂粒含む	やや不良	口縁1/10	
249	055-01	CO-2 包含層	須恵器 豆	32.4	(9.3)		叩きテロタキ	内：灰白(5Y7/1) 外：灰白(N8/0)	やや密～0.1cm大の砂粒含む	良	口縁1/5	8c前
250	049-01	BL-22 砂層	須恵器 豆	32.4	(8.3)		叩きテロタキ	内：灰(5Y6/1) 外：灰(N5/0)	やや密～0.2cm大砂粒含む	やや良	口縁1/10	
251	055-02	BN-23 包含層	須恵器 豆	32.4	(9.3)		叩きテロ列点文2段	内：灰白(5Y7/1) 外：灰白(N8/0)	やや密～0.1cm大の砂粒含む	良	口縁1/5	
252	036-03	CI-2 包含層	土師器 梶	13.4	4.8		口縁ヨコテロケツリ	内：黒楕(10YR2/2) 外：褐灰(10YR4/1)	やや粗～0.2cm～の砂坪含む	やや不良	1/6	
253	036-01	CM-4 包含層	土師器 梶	16.6	6.6		口縁ヨコテロケツリイタキ	内：にぶい橙(5YR6/4)	やや密～0.3cm～砂粒含む	良好	1/3	
254	037-03	BM-25 包含層	土師器 鉢	19.5	6.2		テロ	内：オーリーブ黒(5y3/1) 外：浅黃橙(10YR8/3)	やや密～1mm大の長石含む	良好	口縁小片	
255	025-05	CN-4 包含層	土師器 皿				テロ村工後行 口縁端部ヨコテロ	内：赤(100R5/6) 外："	やや密～0.2cm～大の砂粒含む	良好	底部小片	赤彩
256	024-03	BP-25 包含層	土師器 杯	18.8	4.2		テロ村工後行 口縁端部ヨコテロ	内：橙(2.5YR7/6) 外："	密	良好	口縁1/8	放射暗文 螺旋暗文
257	025-01	BE-25 包含層	土師器 皿	25.0	2.1		テロ櫛描横線	内：橙(5YR6/6) 外："	やや密～0.3mm～大の砂粒含む	絵画校	口縁小片	
258	026-01	BE-25 包含層	土師器 高杯	-	8.2	底径 11.2	テロ脚柱部ケツリ	橙(5YR6/6)	やや粗～0.3mm～大の差粒含む	良好	脚柱部	螺旋暗文
259	027-01	CQ-6 包含層	土師器 豆	12.0	(12.0)		口縁ヨコテロ 外面タケハ内面ヨコハ底部ケツリ	内：橙色 外："	粗～3mm大の砂礫含む	やや不良	9/10	
260	033-04	CQ-6 包含層	土師器 豆	12.6	(8.0)		口縁ヨコテロ 外面タケハ内面ヨコハ	内：橙色 外："	粗～2.5mm大砂礫含む	良	1/6	
261	031-03	BP-25 包含層	土師器 豆	14.2	(3.1)		口縁ヨコテロ 外面タケハ内面ヨコハ	内：にぶい橙色(5YR6/4)	やや粗～0.4mm大の砂礫含む	やや不良	1/12	
262	031-04	BP-25 包含層	土師器 豆	16.0	(4.2)		口縁ヨコテロ 外面タケハ内面ヨコハ	内：にぶい黄橙色(10YR7/3) 外：灰褐色(7.5YR6/2)	粗～2mm大砂礫含む	良	1/7	煤付着
263	086-01	包含層	土師器 豆	17.0	(4.0)		口縁ヨコテロ 外面タケハ内面ヨコハ	内：灰褐色(7.5YR4/2) 外：にぶい橙色(7.5YR7/4)	やや粗～0.2mm大砂礫含む	良	口縁	
264	031-02	BM-25 包含層	土師器 豆	20.6	(3.0)		口縁ヨコテロ	内：灰黄色(2.5Y7/2) 外："	やや粗～0.3mm大砂礫含む	良	口縁1/4	
265	2007-01	AX-12 包含層	土師器 豆	16.1	(3.7)		口縁ヨコテロ 外面タケハ内面ヨコハ	内：灰黃褐色(10YR6/2) 外："	やや密～0.5～1mm大砂粒含む	良	1/10	
266	032-01	CO-3 包含層	土師器 豆	19.0	(5.8)		口縁ヨコテロ 外面タケハ内面ヨコハ	内：にぶい橙色(7.5YR7/3) 外：鈍い橙色(7.5YR7/4)	やや粗～1mm大砂礫含む	良	口縁1/5	
267	037-02	BM-25 包含層	土師器 豆	28.6	(3.9)		口縁ヨコテロ 外面タケハ内面ヨコハ	内：橙色(7.5YR8/6) 外：灰白色(10YR8/2)	粗～4ミリ大砂礫含む	良	口縁小片	
268	032-03	CO-3 包含層	土師器 豆	14.8	(3.0)		口縁ヨコテロ 外面タケハ内面ヨコハ	内：橙色(5YR6/6) 外：橙色(2.5YR6/8)	粗～2mm大砂礫含む	良	口縁1/8	
269	031-01	BP-25 包含層	土師器 豆	16.8	(5.2)		口縁ヨコテロ 外面タケハ内面ヨコハ	内：灰黃褐色(10YR6/2) 外："	やや粗～0.5mm大砂粒含む	良	口縁1/4	くの字
270	033-01	CR-7 包含層	土師器 豆	12.2	(7.7)		口縁ヨコテロ 外面タケハ内面ヨコハ	内：にぶい橙色(7.5YR7/4) 外："	やや粗～0.4mm大砂粒含む	やや不良	口縁1/4	
271	029-01	CK-3・4 包含層	土師器 鋼	24.8	(13.8)		口縁ヨコテロ 外面タケハ内面ヨコハ	内：灰白色(2.5Y8/2) 外："	やや粗～0.2mm大きさ粒含む	良	口縁1/6	
272	030-02	CL-4 包含層	土師器 豆	33.8	(8.3)		口縁ヨコテロ 外面タケハ内面ヨコハ	内：浅黃橙色(10YR/3) 外："	粗～2.0mm大砂礫含む	良	口縁1/12	
273	035-01	CT-4 包含層	土師器 長胴壺	23.0	(26.4)		口縁ヨコテロ 外面タケハ内面ヨコハ	内：にぶい褐色(7.5YR6/3) 外："	やや粗～0.2mm大きさ粒含む	良	口縁1/12	
274	028-01	CQ-7 包含層	土師器 把手壺	28.6	24.4		口縁ヨコテロ 外面タケハ内面ヨコハ	内：黄橙色 外：黄橙色	粗～1.5～2mm大砂礫含む	良	ほぼ完形	
275	064-02	BN-23 包含層	灰釉陶器 梶	15.6	4.3	高台径 7.8	叩きテロ 底部ヨコハケツリ 高台貼付	内：灰白(7.5Y7/1) 外："	やや密	良	口縁1/8	百代寺?
276	064-08	BJ-24 包含層	灰釉陶器 深梶	15.6	6.2	高台径 6.4	叩きテロ 高台貼付	内：灰(5Y6/1) 外："	密	良	口縁1/8	O-53
277	066-01	BM-24 包含層	灰釉陶器 梶	13.2	3.9	高台径 6.2	叩きテロ 底部トキ付	内：灰白(N8/0) 外："	密	良	口縁1/3	
278	084-02	CO-6 包含層	灰釉陶器 梶	11.9	5.9	高台径 6.0	叩きテロ 底部トキ付 高台貼付	内：灰白(N8/0) 外："	密	やや良	口縁1/10	
279	065-02	CQ-5 包含層	灰釉陶器 輪花梶	16.4	(4.4)		叩きテロ	内：灰白(7.5Y7/1) 外："	密	良	口縁1/4	
280	067-01	BG-24 包含層	灰釉陶器 深梶		(5.5)	高台径 8.6	叩きテロ 底部ヨコハケツリ 高台貼付	内：灰白(7.5Y7/1) 外："	密	良	口縁2/3	
281	064-04	CM-2 包含層	灰釉陶器 深梶		(3.9)	高台径 8.0	叩きテロ 底部トキ付 高台貼付	内：灰白(10Y8/1) 外："	やや密	良	底1/2	O-53
282	087-01	CI-2 包含層	灰釉陶器 梶		(2.9)	高台径 8.0	叩きテロ 底部ヨコハケツリ 高台貼付	内：灰白(2.5Y8/1) 外："	やや密～0.1cmの砂粒含む	やや良	底1/2	全面ハケヌリ
283	087-04	BI-25 包含層	灰釉陶器 梶		(2.3)	高台径 7.8	叩きテロ 底部ヨコハケツリ 高台貼付	内：灰(N4/) 外：灰白(7.5Y7/1)	やや密～0.3cm大の砂粒含む	やや良	底1/5	
284	066-06	CM-1 包含層	灰釉陶器 皿	11.6	3.0	高台径 5.8	叩きテロ 高台貼付	内：灰白(N8/) 外："	密	良	口縁1/10	
285	063-08	CM-1 包含層	灰釉陶器 皿	12.2	2.4	高台径 6.7	叩きテロ 底部トキ付 高台貼付	内：灰白(N8/1) 外："	やや密～0.1cm大の砂粒含む	良	口縁1/4	

表14 遺物観察表(4)

報告書 番号	登録番号	出土遺構	器種など			法 量 (cm)		調 整	色 調	胎 土	焼 成	残存度	備 考		
			口径	器高	その他	口径	器高								
286	020-09	BJ-24 包含層	灰釉陶器	輪花皿		13.2	2.5	高台径 7.2	叻けデ ^ル 底部付リ後 ^ル 高台貼付 ^ル	内: 灰白(N8/1) 外: "	やや密	~0.1cm大の砂粒含む	良	口縁2/5	
287	064-01	CN-1 包含層	灰釉陶器	輪花皿		12.6	1.9	高台径 5.8	叻けデ ^ル 底部付リ 高台貼付 ^ル	内: 灰白(7.5Y8/1) 外: "	密	良	口縁2/3		
288	066-02	BO-25 包含層	灰釉陶器	皿		11.6	2.6	高台径 6.4	叻けデ ^ル 高台貼付 ^ル	内: 灰白(2.5Y8/2) 外: "	密	良	底2/3		
289	066-08	BI-25 包含層	灰釉陶器	皿		11.4	2.6	高台径 6.2	叻けデ ^ル 高台貼付 ^ル	内: 灰白(N8/1) 外: "	密	~0.1cmの砂粒含む	良	底1/8	
290	2011-01	AW-12 包含層	灰釉陶器	皿		12.2	2.3	高台径 6.8	叻けデ ^ル 底部付リアリ 高台貼付 ^ル	内: 淡黄色(7.5Y8/3) 外: 灰白色(5Y7/2)	密	良好	口縁1/16	H-72	
291	064-07	BH-24 包含層	灰釉陶器	皿		13.0	2.4	高台径 6.2	叻けデ ^ル 底部付リ 高台貼付 ^ル	内: 灰白(7.5Y7/1) 外: "	やや密	良	口縁1/3	O-53	
292	066-07	CM-2 包含層	灰釉陶器	皿		10.6	2.5	高台径 5.6	叻けデ ^ル 高台貼付 ^ル	内: 灰白(N8/0) 外: "	密	良	底部欠損		
293	020-08	CM-2 包含層	灰釉陶器	皿		12.2	2.7	高台径 7.0	叻けデ ^ル 底部付リ後 ^ル 高台貼付 ^ル	内: 灰白(5Y8/1) 外: "	やや密	良	底部欠損	H-72	
294	067-06	CM-1 包含層	灰釉陶器	皿		12.6	2.2	高台径 6.0	叻けデ ^ル 高台貼付 ^ル	内: 灰白(N8/0) 外: "	密	~0.1cmの砂粒含む	良	高台1/3	
295	020-07	BN-23 包含層	灰釉陶器	皿		11.6	1.8	高台径 7.4	叻けデ ^ル 底部付リ後 ^ル 高台貼付 ^ル	内: 灰白(5Y7/1) 外: 灰白(NT/0)	やや密	~0.1cmの砂粒含む	良	口縁1/3	
296	020-02	BM-24 包含層	灰釉陶器	椀		12.3	2.3	高台径 6.8	叻けデ ^ル 底部付リ後 ^ル 高台貼付 ^ル	内: 灰白(2.5Y7/1) 外: 灰白(2.5Y8/1)	密	~0.1cmの砂粒含む	良	口縁1/2	
297	066-03	CS-3 包含層	灰釉陶器	椀			(1.8)	高台径 7.8	叻けデ ^ル 高台貼付 ^ル	内: 灰白(NT/0) 外: "	やや密	~0.1cm大の砂粒含む	良	高台1/7	
298	067-04	BJ-23 包含層	灰釉陶器	段皿		11.6	1.8	高台径 5.4	叻けデ ^ル 高台貼付 ^ル	内: 灰白(N8/0) 外: "	密	~0.1cmの砂粒含む	良	口縁1/10	
299	064-06	BN-23 包含層	灰釉陶器	段皿		14.2	2.9	高台径 8.4	叻けデ ^ル 高台貼付 ^ル	内: 灰白(7.5Y7/2) 外: "	やや密	良	1/4	O-53	
300	085-02	BM-25 包含層	灰釉陶器	段皿		14.0	2.0	高台径 7.4	叻けデ ^ル 底部付リアリ 高台貼付 ^ル	内: 灰白(5Y7/1) 外: "	やや密	良	1/3	O-53	
301	067-07	CN-2 包含層	灰釉陶器	段皿		13.6	2.0	高台径 7.6	叻けデ ^ル 高台貼付 ^ル	内: 灰白(5Y8/1) 外: "	密	良	口縁1/10		
302	020-04	BN-23 包含層	灰釉陶器	段皿		13.3	2.1	高台径 7.1	叻けデ ^ル 底部付リ後 ^ル 高台貼付 ^ル	内: 灰白(5Y8/1) 外: "	密	良	口縁1/5		
303	066-05	CM-5・N5 包含層	灰釉陶器	段皿		13.6	2.6	高台径 7.6	叻けデ ^ル 高台貼付 ^ル	内: 灰白(5Y7/1) 外: "	密	良	口縁1/7		
304	062-08	BL-23 包含層	須恵器	椀蓋		12.8	2.2	高台径 7.2	叻けデ ^ル 高台貼付 ^ル	内: 灰白(10YR8/2) 外: "	密	良	口縁1/3		
305	041-01	BN-23 包含層	灰釉陶器	段皿		14.2	2.9	高台径 8.2	叻けデ ^ル 底部付リ後 ^ル 高台貼付 ^ル	内: 灰白(5Y7/1) 外: "	密	良	口縁1/5	K-90	
306	085-01	包含層	灰釉陶器	段皿		13.8	2.0	高台径 8.2	叻けデ ^ル 高台貼付 ^ル	内: 灰白(5Y7/1) 外: "	やや密	良	1/3	O-53	
307	085-03	CJ-1 包含層	灰釉陶器	段皿		13.2	2.7	6.8	叻けデ ^ル 高台貼付 ^ル	内: 灰白(2.5Y7/1) 外: "	書いてない	1/3			
308	020-06	CM-1 包含層	灰釉陶器	折縁皿		11.6	2.9	高台径 6.3	叻けデ ^ル 底部付リ後 ^ル 高台貼付 ^ル	内: 灰白(2.5Y8/1) 外: "	密	良	1/4	O-53	
309	056-02	BO-5 包含層	灰釉陶器	短頸壺		9.0	(3.2)		叻けデ ^ル	内: 灰白(5Y7/1) 外: 灰白(NT/0)	やや密	~0.2cm大の砂粒含む	良	口縁1/10	
310	087-02	CP-7 包含層	灰釉陶器	小瓶			(4.0)	高台径 (6.2)	ラヌリ底部付 ^ル 高台貼付 ^ル	内: 灰白(2.5Y7.5/1) 外: "	やや密	~0.1cmの砂粒含む	やや良	底1/3	美濃須衛
311	062-07	BL-23 包含層	綠釉陶器	段皿		13.0	5.5	高台径 6.4	叻けデ ^ル ナガキ高台貼付 ^ル	濃緑色	やや密	良	底部欠損	K-90	
312	071-05	BM-24 包含層	綠釉陶器	椀		15.6	(5.5)		叻けデ ^ル	濃緑色	密	やや不良	底部欠損	近江?	
313	054-04	CJ-1 包含層	綠釉陶器	椀		16.4	(4.2)		叻けデ ^ル ナガキ高台貼付 ^ル	内: 灰(10Y5/1) 外: "	密	良	1/10	O-53	
314	070-03	CK-1 包含層	綠釉陶器	椀		13.2	(2.6)		叻けデ ^ル	内: 灰白(10Y7/1) 外: "	密	良	1/12		
315	073-05	BN-23 包含層	綠釉陶器	椀		16.8	(3.1)		叻けデ ^ル	内: 灰白(10Y7/1) 外: "	密	良	口縁1/10		
316	071-03	BO-24 包含層	綠釉陶器	椀				底径 (3.4)	叻けデ ^ル ラヌリ底部付 ^ル	内: 明緑 外: 濃緑	密	やや良	体1/4	近江?	
317	072-01	BJ-24 包含層	綠釉陶器	段皿			(1.1)		叻けデ ^ル	内: 灰白(N7/1) 外: "	密	良	口縁1/4		
318	070-02	BH-25 包含層	綠釉陶器	段皿			(1.5)	高台径 8.4	叻けデ ^ル ナガキ高台貼付 ^ル	内: 明緑 外: 明緑	密	~0.1cmの砂粒含む	やや良	底1/8	
319	070-04	BG-25 包含層	綠釉陶器	椀			(1.3)	高台径 7.6	叻けデ ^ル 底部付リ高台貼付 ^ル	内: 明緑 外: 明緑	密	やや良	底1/4		
320	075-02	CN-4 包含層	綠釉陶器	椀			(1.5)	高台径 6.7	叻けデ ^ル 高台貼付 ^ル 三叉付痕	内: 浅緑 外: 浅緑	密	やや良	底部	猿投	
321	054-05	CM-5 包含層	綠釉陶器	皿			(1.1)	高台径 (4.1)	叻けデ ^ル ナガキ高台貼付 ^ル	内: 褐灰(10YR6/1) 外: "	密	良	1/10	O-53	
322	075-03	CR-5 包含層	綠釉陶器	皿			(1.2)	高台径 (5.6)	叻けデ ^ル	明緑色	密	良	1/6	猿投	
323	071-06	BJ-25 包含層	綠釉陶器	椀			(1.4)	高台径 (7.2)	叻けデ ^ル 底部付リ高台貼付 ^ル	濃緑色	やや密	~0.1cm以下の砂粒含む	やや不良	1/6	近江?
324	053-04	BI-25 包含層	綠釉陶器	深椀			(1.6)	高台径 8.4	叻けデ ^ル ナガキ高台貼付 ^ル	内: 灰白(N7/0) 外: "	密	良	底	O-53	
325	071-02	BO-24 包含層	綠釉陶器	椀			(2.1)	高台径 8.8	叻けデ ^ル 高台貼付 ^ル	内: 茶緑 外: 濃緑	密	良	底部1/4		
326	073-03	BJ-24 包含層	綠釉陶器	椀			(1.9)	高台径 8.1	叻けデ ^ル 高台貼付 ^ル	内: 褐灰(10YR6/1) 外: "	密	良	底3/10		
327	054-02	CN-21 包含層	綠釉陶器	唾壺			(1.9)	高台径 6.4	叻けデ ^ル ナガキ高台貼付 ^ル	内: 灰白(2.5Y8/1) 外: "	やや密	~0.1cm大の砂粒含む	不良	底1/10	O-53
328	025-04	CO-4 包含層	土師器	皿		8.2	2.1		叻けデ ^ル 村工後 ^ル 口縁端部 ^ル	内: 灰白色(10YR8/2) 外: 灰白色(10YR7/2)	やや粗~2mm大の砂礫含む	良好	口縁1/7		

表15 遺物観察表(5)

報告書番号	登録番号	出土遺構	器種など			法量(cm) 口径 器高 その他	調整	色調	胎土	焼成	残存度	備考
			口徑	器高	その他							
329	2006-06	AV-14 包含層	土師器	皿	7.8	2.1	「テ」村工後ナテ 口縁端部3 コテ	内：灰白色(2.5Y8/2) 外："	やや密 0.5mm大砂粒含む	やや不良	2/3	
330	2003-01	AV-13 包含層	土師器	皿	8.6	1.9	「テ」村工後ナテ 口縁端部3 コテ	内：浅黄色(2.5Y8/2) 外："	やや密 ~0.5mm大砂粒含む	やや不良	完形	
331	024-02	CP-7 包含層	土師器	皿	9.0	1.5	「テ」村工後ナテ 口縁端部3 コテ	内：浅黄橙色 外："	やや粗 0.5mm大砂粒含む	良好	口縁1/9	
332	2003-04	BA-10 包含層	土師器	皿	8.8	1.6	「テ」村工後ナテ 口縁端部3 コテ	内：灰白色(2.5Y8/1) 外："	やや粗 0.5~1mm大砂粒含む	やや不良	完形	
333	2014-02	AV-12 包含層	土師器	皿	9.2	1.5	「テ」村工後ナテ 口縁端部3 コテ	内：淡黄色(2.5Y8/3) 外："	やや粗 ~0.5mm大石英含む		1/3	
334	2001-02	AW-11 包含層	土師器	皿	8.8	1.3	「テ」村工後ナテ 口縁端部3 コテ	内：浅黄橙色(10YR8/3) 外："	やや密	やや不良	1/2	
335	2015-02	AT-10 包含層	土師器	杯	13.6	2.6	「テ」村工後ナテ 口縁端部3 コテ	内：明黄褐色(10YR6/8) 外："	粗	良	口縁1/5	
336	039-04	No.2グリット 包含層	叩土師器	皿	(0.9)	底径 4.8	「叩」け トキリ	浅黄橙色(10YR8/3)	やや粗0.5mm大の砂礫含む	良	底部	
337	040-03	BM-25 包含層	叩土師器	皿	(1.2)	底径 4.2	「叩」け トキリ	内：灰白(2.5Y8/2) 外：灰白(2.5Y8/2)	やや粗0.5mm大の砂礫含む	良	底部	
338	039-01	BN-23 包含層	叩土師器	皿	(1.6)	底径 5.4	「叩」け トキリ	内：灰白色(10YR8/2) 外：赤橙色(10R6/8)	やや粗0.5mm大の砂礫含む	良	底部	
339	040-04	BM-25 包含層	叩土師器	皿	(1.3)	底径 4.2	「叩」け トキリ	内：灰白色(2.5Y8/1) 外："	やや粗0.5~1mmの大砂礫含む	良	底部	
340	040-02	BM-24 包含層	叩土師器	皿	(1.8)	底径 5.4	「叩」け トキリ	内：灰白色(10YR8/1) 外："	粗 ~2mm大の砂礫含む	良	底部	
341	039-02	CM-25 包含層	叩土師器	皿	(1.3)	底径 6.2	「叩」け トキリ	内：灰白色(10YR8/2) 外：淡赤橙色(2.5YR7/4)	やや粗 ~0.5mm大砂礫含む	良	底部	
342	2014-03	AY-10 包含層	叩土師器	皿	(1.0)		「叩」け トキリ	内：淡黄色(2.5Y8/3) 外："	やや粗 ~0.5mm大長石含む	良	底部	
343	039-03	BI-24 包含層	叩土師器	皿	(1.5)	底径 7.2	「叩」け トキリ	灰白(2.5Y8/2)	粗 0.5~1.5mm大砂礫含む	良	底部	
344	2015-01	AY-10 包含層	叩土師器	皿	(2.1)	底径 4.2	「叩」け トキリ	内：灰白色(2.5Y8/2) 外："	粗	良	底部	
345	2008-02	AT-11 包含層	叩土師器	皿	(2.3)		「叩」け トキリ	内：淡橙色(5YR8/4) 外："	密	やや不良	底4/5	
346	030-03	CN-4 包含層	土師器	鍋	16.6	(3.8)	口縁ヨコナテ 外面タケハ 内 面ヨコナ	内：にぶい橙色(10YR7/2) 外：灰赤色(2.5YR4/2)	やや粗~2mm大砂礫含む	良	口縁1/7	
347	2020-04	AV-13 包含層	土師器	甕	14.0	(2.4)	口縁ヨコナテ 外面タケハ 内 面ヨコナ	内：にぶい橙色7.5YR7/4) 外："	やや粗	やや不良	口縁1/12	
348	034-01	CT-4 包含層	土師器	甕	—	(2.6)	「テ」	内：灰褐色(7.5YR6/2) 外："	やや粗0.2mm大砂粒含む	やや不良	口縁小片	
349	098-02	BL-22 包含層	土師器	清掃型鍋	—	(3.4)	「テ」ヒビ 村工	内：にぶい黄橙色(10YR6/4) 外："	粗 ~4mm大砂礫含む	良	口縁小片 D類	
350	102-03	CL-3 包含層	土師器	清掃型鍋	—	(3.4)	「テ」ヒビ 村工	内：橙色(7.5YR7/6) 外："	粗 ~5mm大砂礫含む	良	口縁小片 E類	
351	103-02	BN-25 包含層	土師器	清掃型鍋	—	(2.3)	「テ」ヒビ 村工	内：赤褐色(7.5YR4/6) 外："	粗 ~4mm大の砂礫含む	良	口縁小片 E類	
352	100-01	BN-24 包含層	土師器	清掃型鍋	—	(3.3)	「テ」ヒビ 村工	内：にぶい橙(7.5YR7/4) 外："	粗 ~3mm大の砂礫含む	良	口縁小片 D類	
353	105-01	CN-04 包含層	土師器	清掃型鍋	—	(4.0)	「テ」ヒビ 村工	内：明褐色(7.5YR5/6) 外："	粗 ~3mm大の砂礫含む	良	口縁小片 D類	
354	102-01	BM-25 包含層	土師器	清掃型鍋	—	(3.8)	「テ」ヒビ 村工	内：橙(2.5YR6/6) 外："	粗 ~3mm大きさ曇含む	良	口縁小片 D類	
355	101-02	BA-21 包含層	土師器	清掃型鍋	—	(5.0)	「テ」ヒビ 村工	内：灰黄褐色(10YR4/1) 外："	粗 ~3mm大砂礫含む	良	口縁小片 D類	
356	100-02	CJ-1 包含層	土師器	清掃型鍋	22.8	(3.0)	「テ」ヒビ 村工	内：にぶい橙(7.5YR7/4) 外："	粗 ~3mm大の砂礫含む	良	口縁1/12 E類	
357	099-01	CM-1 包含層	土師器	清掃型鍋	27.3	(6.8)	「テ」ヒビ 村工	内：にぶい橙色(7.5YR6/4) 外："	粗 ~3mm大の砂礫含む	良	口縁1/12 D類	
358	101-01	CI-1 包含層	土師器	清掃型鍋	23.0	(5.0)	「テ」ヒビ 村工	内：灰黄褐色(10YR4/12) 外："	粗 ~3mm大の砂礫含む	良	口縁1/12 D類	
359	099-03	BI-25 包含層	土師器	清掃型鍋	22.0	(3.9)	「テ」ヒビ 村工	内：赤灰色(2.5YR4/1) 外：橙色(2.5YR6/6)	やや粗 1~2mm大きさ曇含む	良	口縁1/8 E類	
360	102-02	BK-24 包含層	土師器	清掃型鍋	22.0	(3.8)	「テ」ヒビ 村工	内：橙色(2.5YR6/8) 外："	やや粗	良	口縁1/7 E類	
361	098-03	CM-1 包含層	土師器	清掃型鍋	27.2	(3.0)	「テ」ヒビ 村工	内：黄褐色(10YR5/6) 外："	粗~6mm大の砂礫含む	良	口縁1/6 E類	
362	101-03	2フリッド 包含層	土師器	清掃型鍋	19.4	(3.8)	「テ」ヒビ 村工	内：橙色(2.5YR7/8) 外："	やや粗	良	口縁1/9 D類	
363	100-03	包含層	土師器	清掃型鍋	21.0	(2.8)	「テ」ヒビ 村工	内：黄褐色(10YR5/8) 外："	やや粗 ~1mm大の砂粒含む	良	口縁1/9 D類	
364	104-01	BM-24 包含層	土師器	清掃型鍋	21.6	(2.1)	「テ」ヒビ 村工	内：にぶい褐色(7.5YR5/4) 外："	やや密 0.5~1.0mm大の砂粒含む	良	口縁1/5 D類	
365	099-02	BM-25 包含層	土師器	清掃型鍋	23.5	(4.4)	「テ」ヒビ 村工	内：褐灰色(10YR4/1) 外："	粗 ~4mm大の砂礫含む	良	口縁1/6 D類	
366	103-01	BJ-23 包含層	土師器	清掃型鍋	27.6	4.4	「テ」ヒビ 村工	内：灰褐色(5YR4/2) 外："	やや粗	良	口縁小片 D類	
367	103-03	CO-5 包含層	土師器	清掃型鍋	25.6	(3.8)	「テ」ヒビ 村工	内：赤褐色(7.5YR4/6) 外："	やや粗	良	口縁小片	
368	038-02	BH-22 包含層	土師器	伊勢型鍋	21.6	(2.4)	「テ」ヒビ 村工	内：にぶい黄橙色(10YR7/2) 外："	やや粗0.5~1mm大砂礫含む	良	口縁1/12	
369	033-01	CL-4 包含層	土師器	甕	24.2	(5.2)	口縁ヨコナテ 外面タケハ 内 面ヨコナ	内：浅黄橙色(10YR8/3) 外：橙(5YR8/4)	粗0.5~2mm大の砂礫含む	良	口縁1/7	
370	025-03	CM-3 包含層	土師器	伊勢型鍋	—	(3.0)	「テ」ヒビ 村工	内：にぶい橙色(7.5YR7/3) 外："	やや粗~2mm大砂粒含む	良	口縁小片	
371	025-02	BN-24 包含層	土師器	羽釜	22.6	(2.2)	「テ」ヒビ 村工	内：浅黄橙色(7.5YR8/3) 外：浅黄橙色(10YR8/3)	やや粗~1.5mm大砂礫含む	良	口縁1/12	

表16 遺物観察表(6)

報告書 番号	登録番号	出土遺構	器種など			法量(cm)		調 整	色 調	胎 土	焼 成	残存度	備 考
			口径	器高	その他	口径	器高						
372	2004-01	AW-12 SK 1	陶器 山茶椀	13.7	5.6	高台径 5.4	口かけ 底部付判 高台貼付付	内：灰白色(7.5Y8/1) 外：" "	やや粗 0.5~3mm大砂粒含む	良好	1/2	7型式	
373	064-05	CO-1 包含層	山茶椀 茶椀	14.9	5.1	高台径 6.0	口かけ 底部付判 高台貼付付	内：灰白(N7/0) 外：" "	やや粗 ~0.2cm以下の砂粒含む	良	完形		
374	2005-02	AV-14 包含層	陶器 山茶椀	13.7	5.2	6.4	口かけ 底部付判	内：灰白色(7.5Y8/1) 外：" "	粗 2~6mm大砂粒含む	良好	2/3	6~7型式	
375	2012-01	AV-11 包含層	陶器 山茶椀	13.8	4.6	高台径 5.8	口かけ 底部付判 高台貼付付	内：灰白色(5Y8/1) 外：" "	やや密 0.5~1.5mm大砂粒含む	良好	1/3	5~6型式	
376	086-02	包含層	陶器 山茶椀	14.6	5.1	高台径 5.1	口ナデ 底部付判 高台貼付付	内：灰白(10Y8/2) 外：" "	やや粗 ~0.2cmの長石・石英含む	やや良	完形	7~8型式	
377	027-02	BM-25 包含層	陶器 山茶椀	12.4	3.8	底径 5.8	口かけ 底部付判	内：灰白 外：" "	密	やや良	完形		
378	063-06	CS-8 包含層	山茶椀 山皿	8.0	2.1	底径 4.2	口かけ 底部付判	内：灰黄(2.5Y6/2) 外：灰黄(2.5Y7/2)	やや粗 ~0.2cm以下の砂粒含む	やや不良	口縁1/6 墨書き		
379	067-05	BM-25 包含層	陶器 小椀	10.8	2.4	高台径 5.2	口かけ 底部付判	内：灰白色(N8/) 外：" "	密	量	口縁1/10		
380	2006-03	AX-11 包含層	陶器 山皿	8.3	2.1		口かけ 底部付判	内：灰白色(5Y7/2) 外：" "	やや密 0.5mm大砂粒含む	良好	4/5	5型式	
381	2006-05	BA-10 包含層	陶器 山皿	7.7	1.7		口かけ 底部付判	内：灰白色(N7/1) 外：" "	やや密 0.5mm大砂粒含む	良好	3/4	6~7型式	
382	2013-01	AY-11 包含層	陶器 山皿	8.4	2.0		口かけ 底部付判	内：灰白色(5Y8/1) 外：" "	やや密 ~0.2cm大砂粒含む	良好	1/3	5型式	
383	2012-04	BA-12 包含層	陶器 山皿	7.6	2.1		口かけ 底部付判	内：灰白色(5Y8/1) 外：" "	密	良好	1/6	5型式	
384	2013-03	AW-13 包含層	陶器 山皿	7.8	2.2		口かけ 底部付判	内：灰白色(5Y7/1) 外：" "	やや密 0.5~3mm大砂粒含む	良好	口縁1/5 底充存	6型式	
385	2013-02	AW-11 包含層	陶器 山皿	8.2	2.3		口かけ 底部付判	内：灰白色(5Y8/1) 外：" "	やや密 0.5~2mm大砂粒含む	良好	1/2	5型式	
386	2001-01	BA-10 包含層	陶器 山皿	8.2	2.3		口かけ 底部付判	内：灰白色(7.5Y7/1) 外：" "	やや密	良好	完形	5型式	
387	2006-04	AV-14 包含層	陶器 山皿	7.6	1.8		口かけ 底部付判	内：灰白色(7.5Y8/1) 外：" "	やや粗 0.5~2mm大砂粒含む	良好	2/3	6~7型式	
388	2020-02	BB-13 包含層	陶器 梶	35.6	(5.2)		口かけ	口縁：にいいろ褐色(5YR5/3) 体部：灰白色(2.5Y7/1)	やや粗	良	口縁1/12 常滑		
389	2020-03	AW-13 包含層	陶器 梶		(3.6)		口かけ	口縁：明赤褐色(5YR5/6) 体部：灰黄色(2.5Y7/2)	やや密	良	口縁	常滑	
390	2009-01	AW-13 包含層	陶器 常滑 梶	30.8	(8.1)		口かけ	内：褐色(10YR4/1) 外：灰白色(N7/1)	やや粗 1~3mm大砂粒含む	良	口縁		
391	088-03	CO-4 包含層	常滑 常滑 梶	26.0	(7.0)		口かけ	釉：灰白色(7.5Y8/1)	やや粗 ~1.5mm大砂粒含む	良	口縁1/4		
392	2021-02	AV-13 包含層	陶器 常滑 梶		(4.8)	底径 15.6	口かけ	内：灰色(10Y6/1) 外：" "	やや密	良	底1/3	常滑	
393	2021-01	AX-14 包含層	陶器 常滑 梶		(7.0)	底径 15.2	口かけ	内：灰色(10Y6/1) 外：" "	やや密	良	底1/5	常滑	
394	088-01	CO-04 包含層	古瀬戸 折縁深皿	31.2	3.4		口かけ	素地：灰白色(2.5Y8/2)	密	良	口縁1/10		
395	2020-01	AW-13 包含層	古瀬戸 四耳壺	16.4	(2.0)		口かけ	釉：オリーブ色(5Y6/8) 素地：灰黄色(2.5Y7/2)	密	良	口縁1/14		
396	2019-04	AY-12 包含層	古瀬戸 梶		(2.1)	高台径 7.2	口かけ ケズリ	釉：オリーブ黄色(5Y6/4) 素地：灰白色(7.5Y7/1)	やや密 0.5~1.0mm大長石含む	良	底1/10		
397	096-03	CP-3 包含層	白磁 梶	15.2	(2.3)		口かけ	釉：灰白色(5Y7/1) 素地：灰白色(5Y8/1)	密	良	口縁小片	玉縁口縁	
398	096-01	BD-24 包含層	白磁 梶	15.2	(3.3)		口かけ	釉：灰白色(5Y7/1) 素地：灰白色(5Y8/1)	密	良	口縁小片	玉縁口縁	
399	096-02	BI-23 包含層	白磁 梶	18.0	(2.3)		口かけ	釉：灰白色(5Y8/1) 素地：灰白色(5Y8/2)	密	良	口縁小片	玉縁口縁	
400	097-02	BA-22 包含層	白磁 梶	19.6	(2.5)		口かけ	釉：灰白色(7.5Y7/1) 素地：灰白色(5Y8/2)	密	良	口縁小片	玉縁口縁	
401	097-01	BG-24 包含層	白磁 梶	14.4	(3.0)		口かけ	釉：灰白色(5Y7/2)	密	良	口縁小片		
402	094-05	CP-1 包含層	青磁 梶	13.6	(1.5)		口かけ	釉：オリーブ黄色(5Y6/3) 素地：灰白色(N 7/)	密	良	口縁小片		
403	096-04	CC-2 包含層	白磁 梶		(2.9)	高台径 6.6	口かけ	灰白色5Y7/1	密	良	高台1/6	高台	
404	090-04	CM-5 包含層	青磁 篷蓮弁文 梶	17.2	(5.2)		口かけ	オリーブ灰(10Y6/2)	密	良	口縁小片	龍泉I-5	
405	091-04	BJ-23 包含層	青磁 篷蓮弁文 梶	16.8	(3.1)		口かけ	釉：オリーブ灰(10Y6/2) 素地：灰白色(N 7/)	密	良	口縁小片	龍泉I-5	
406	091-01	CR-5 包含層	青磁 劇花文 梶	16.4	(2.7)		口かけ	釉：明オリーブ灰(2.5Y7/1) 素地：灰白色(5Y7/1)	密	良	口縁小片	龍泉I-6	
407	091-02	CP-4 包含層	青磁 劇花文 梶	16.4	(3.7)		口かけ	釉：灰オリーブ色(5Y6/2) 素地：オリーブ灰色(10Y6/2)	密	良	口縁小片	龍泉I-6	
408	091-03	CN-5 包含層	青磁 劇花文 梶	13.2	(3.2)		口かけ	釉：明オリーブ色(5Y7/1) 素地：灰白色(2.5Y8/2)	密	良	口縁小片	龍泉I-6	
409	090-03	BJ-25 包含層	青磁 梶	—	(3.5)		口かけ	釉：灰オリーブ色(7.5Y5/3) 素地：灰白色(5Y7/1)	密	良	口縁小片	龍線	
410	093-01	CP-7 包含層	青磁 梶		(2.7)	高台径 6.6	口かけ	釉：オリーブ灰色(10Y6/2) 素地：灰白色(N 8/)	密	良	口縁1/3	龍泉I-3	
411	092-01	CJ-3 包含層	青磁 篷蓮弁文 梶		(2.9)	高台径 5.4	口かけ	釉：灰色(10Y5/1) 素地：灰色(5Y6/1)	密	良	高台1/6	龍泉I-5	
412	093-05	CJ-1 包含層	青磁 梶	—	(1.9)		口かけ	釉：灰オリーブ色(5Y6/2) 素地：灰白色(5Y8/1)	密	良	口縁小片	同安	
413	094-06	CI-1 包含層	青磁 梶		(1.8)	高台径 5.0	口かけ	釉：オリーブ黄色(5Y6/4) 素地：オリーブ色(5Y5/6)	密	良	高台1/4	同安	
414	091-05	BI-22 包含層	青磁 梶	12.8	(2.4)		口かけ	釉：灰白色(5Y7/2) 素地：灰白色(5Y7/1)	密	良	口縁小片	同安	

表17 遺物観察表(7)

報告書 番号	登録番号	出土遺構	器種など			法量(cm) 口径 器高 その他	調 整	色 調	胎 土	焼 成	残存度	備 考	
			口径	器高	その他								
415	094-02	BM-23 包含層	青磁	楕	—	(2.1)	口付	釉：オリーブ黄色(Y6/3) 素地：灰白色(N 7/(5Y7/1))	密	良	口縁小片	龍泉I	
416	094-04	CP-7 包含層	青磁	楕	16.8	(2.0)	口付	釉：オリーブ色(GY5/4) 素地：灰白色(GY7/2)	密	良	口縁小片	同安	
417	093-03	CG-1 包含層	青磁	楕	—	(2.5)	—	釉：オリーブ黄色(Y6/3) 素地：オリーブ色(Y6/6)	密	良	体部	同安	
418	095	包含層	青磁	盤	23.6	(3.5)	口付	釉：灰オリーブ色(7.5Y5/2)	密	良	口縁1 1/ 9	龍泉	
419	2010-01	BA-13 包含層	陶器	天目茶碗	11.6	(6.0)	口付	釉：紫黒色(5P1.7/1) 素地：灰黄色(2.5Y6/2)	やや密	良	口縁1/6		
420	062-05	BH-25 包含層	陶器	天目茶碗	11.2	4.8	口付	釉：黒(10YR1.7/1) 素地：(2.5Y6/3)	密	良	口縁1/6		
421	087-05	CJ-1 包含層	陶器	天目茶碗		3.2	高台径 4.0	口付 内：赤褐色(2.5YR3/4)	密	良	底部		
422	2019-03	BA-13 包含層	陶器	皿		(1.2)	高台径 7.2	口付	釉：赤褐色(2.5Y8/2) 素地：灰白色(2.5Y8/1)	密	良	底1/4	
423	097-05	BK-23 包含層	陶器	吉瀬戸 志野菊皿	14.6	2.7	高台径 9.8	口付	釉：灰白色(10Y8/1)	密	良	口縁1/2	
424	082-02	BK-23 包含層	墨書土器 灰釉陶器	楕		14.4	高台径 6.9	口付 内：赤褐色(5Y7/1) 外："	やや密	良	口縁1/6	転用観	
425	085-04	CN-2 包含層	墨書土器 灰釉陶器	皿		12.6	2.9	高台径 6.2	口付 内：灰白色(5Y8/1) 外："	密	良	口縁1/2	『福』?
426	083-02	BN-23 包含層	墨書土器 灰釉陶器	皿		12.0	3.0	高台径 6.0	口付 内：灰白色(5Y7/1) 外："	やや密 0.5~1.5mm大 の砂粒含む	良	口縁1/4	『◆西』
427	081-03	BI-23 包含層	墨書土器 灰釉陶器	楕		1.6	高台径 6.0	口付 内：灰白色(5Y7/1) 外：灰白色(N 7/)	やや粗 0.5~2.0mm大 の砂礫含む	良	高台2/3	『富』	
428	082-01	BM-24 包含層	墨書土器 灰釉陶器	楕		2.8	高台径 7.0	口付 内：灰白色(2.5GY8/1) 外："	密	良	高台1/2	転用観	
429	081-02	BO-24 包含層	墨書土器 灰釉陶器	楕		2.4	高台径 7.0	口付 内：灰白色(5Y7/1) 外："	密	良	高台1/4	『新』?	
430	083-03	BM-22 包含層	墨書土器 灰釉陶器	皿		1.6	高台径 6.6	口付 内：明褐灰色(7.5YR7/1) 外："	やや粗 ~1mm大砂粒含 む	良	高台1/4	『西』	
431	081-01	BM-24 包含層	墨書土器 灰釉陶器	楕		1.2	高台径 6.4	口付 内：灰白色(5Y7/1) 外："	やや粗 ~1mm大の砂粒 含む	良	高台1/5	『福』?	
432	076-02	BM-24 包含層	墨書土器 灰釉陶器	楕		2.0	高台径 6.4	口付 内：灰白色(N 7/) 外："	やや粗 0.5~2.0mm大 の砂礫含む	良	高台2/5	『富加』?	
433	077-05	CT-3 包含層	墨書土器 灰釉陶器	楕		1.3	高台径 8.0	口付 内：灰白色(2.5Y8/1) 外："	密	良	高台1/4	判読不明	
434	080-01	BM-25 包含層	墨書土器 灰釉陶器	皿		1.4	高台径 6.4	口付 内：灰白色(5Y7/1) 外：灰白色(N 7/)	密	良	高台1/6	判読不明	
435	079-01	BM-23 包含層	墨書土器 灰釉陶器	楕		2.2	高台径 5.4	口付 内：灰白色(N 8/) 外："	密	良	高台完存	転用観	
436	070-01	BL-22 包含層	転用観 綠釉陶器	楕		(3.1)	高台径 9.2	口付 内：浅緑色 外："	密	良	高台1/3	転用観	
437	2001-03	BA-11 包含層	墨書土器 陶器	山茶碗	15.0	5.2	高台径 7.2	口付 内：灰白色(7.5Y7/1) 外："	やや密	良	3/4	花押	
438	2002-03	BA-10 包含層	墨書土器 陶器	山茶碗	15.4	5.1	高台径 5.1	口付 内：灰白色(5Y7/1) 外："	やや粗 ~2mm大の砂礫 含む	良	完存	「西」	
439	2003-03	AV-12 包含層	墨書土器 陶器	山茶碗	13.2	4.7	高台径 5.4	口付 内：灰白色(10Y8/1) 外："	やや粗 1~5mm大の砂 粒含む	良	完形	「◇」	
440	078-01	CP-3 包含層	墨書土器 陶器	山茶碗	15.0	4.7	高台径 6.0	口付 内：灰白色(5Y7/1) 外："	粗 ~5mm大の砂礫含む	良	口縁1/3		
441	083-01	CO-1 包含層	墨書土器 陶器	山茶碗	14.8	5.5	高台径 7.0	口付 内：灰白色(7.5Y7/1) 外：灰白色(N 7/)	粗 ~4mm大の砂礫含む	良	高台1/10	『の』?	
442	2003-02	BA-13 包含層	墨書土器 陶器	山茶碗		(2.5)	高台径 7.5	口付 内：灰白色(7.5Y7/1) 外："	やや密 ~0.5mm大砂粒 含む	良	底1/8	「上」	
443	080-02	包含層	墨書土器 陶器	山茶碗		(1.7)	高台径 5.4	口付 内：灰白色(7.5Y7/2) 外："	やや密 ~0.6mm大砂粒 含む	良	底1/2		
444	081-04	包含層	墨書土器 陶器	山茶碗		(1.2)	高台径 5.6	口付 内：灰白色(7.5Y7/1) 外：灰白色(N 7/)	やや密 ~0.7mm大砂粒 含む	良	底3/5	判読不能	
445	076-01	包含層	墨書土器 陶器	山皿	8.6	1.7	口付 内：灰白(7.5Y8/) 外："	密 ~0.2mm大砂礫含む	良	底1/4	『こき』		
446	2005-01	BA-10 包含層	墨書土器 陶器	山皿	8.4	2.1	口付 内：灰白色(10Y7/1) 外："	やや密 0.5~1mm大砂 粒含む	良	4/5	『上』		
447	2005-03	AV-14 包含層	墨書土器 陶器	山皿	7.6	2.0	口付 内：灰白色(10Y8/1) 外："	やや密 0.5~1mm大砂 粒含む	良	1/2	『山』		
448	063-05	BH-24 包含層	墨書土器 陶器	山皿	8.0	2.1	口付 内：灰黄(2.5Y6/2) 外："	密 ~0.2mm大砂礫含む	良	完形			
449	077-04	CO-05 包含層	墨書土器 陶器	小皿		(1.1)	口付 内：灰白(7.5Y7/1) 外："	やや粗 ~2mm大の砂礫 含む	良	底	『=』		
450	079-03	CO-02 包含層	墨書土器 土師器	皿		(0.7)	口付 内：灰白(2.5GY8/1) 外："	やや密 0.5~1mm大砂 粒含む	良	底小片			
451	076-03	CL-04 包含層	土師器	皿			口付 内：にぶい橙(5YR6/4) 外："	密 ~0.2mm大砂礫含む	良	底小片	『乃秋』?		

表18 遺物観察表(8)

V まとめ

遺構の変遷について

今回の調査では、縄文時代後期と晩期晩期および奈良時代から鎌倉時代にかけての遺構が確認された。ここでは、各時代の遺構の変遷について建物を中心に考察してみたい。

縄文時代については、後期の土坑2基の他、晩期の土器棺墓が2基確認されたのみである。周辺では、当該期の遺物が表面採集されてはいるものの、その実体についてはよく知られていない。この点については今後の課題としたい。

弥生時代については、出土遺物はあるものの、遺構は確認されなかった。隣接する東村城跡の調査においても弥生時代の各時期にわたる遺物が出土しているものの、権現坂遺跡と同様に、遺構の存在は確認されていない^①。のことから周辺に、同時期の遺構の存在する可能性は高いものと考えられる。

古墳時代については、遺構・遺物ともに確認されたものは皆無である。

本格的に遺構が確認されるようになるのは、奈良時代以降になってからである。ただし、奈良時代とした竪穴住居の中には、その成立が飛鳥時代にまで遡る可能性の考えられるものもあるが断定はできない。遺物は包含層から若干量の須恵器、土師器が出土している。

奈良時代には、竪穴住居が3棟、掘立柱建物が6棟存在する。竪穴住居は約11mずつ隔てて南北に並んで配置される。出土遺物から明確な時期的差は認められないため、3棟の住居は同時存在していたものと考えられる。SH19出土の須恵器杯蓋（第20図114）は、口縁端部を下方に折り曲げ、杯身（第20図115）は、底部に高台が付き腰部の屈曲は見られない。こうした特徴から判断して、8世紀前半代の住居と考えられる。

掘立柱建物は、灰釉陶器を伴わない段階のものである。SB18、20～22は桁行5間、梁行は全体が確認されていないが2間になると考えられる。出土遺物が少なく、かつ竪穴住居との関係についても、直

接の重複関係にないため、明確にできず時期判断が困難ではあるが、出土した遺物から見る限りでは、8世紀後半代になると考えられる。これらの建物は、徐々に位置をずらしながら建替えを行ったもので、すべてが同時存在したものではないと考えられるが、いずれの建物が同時存在していたかは判断し難い。

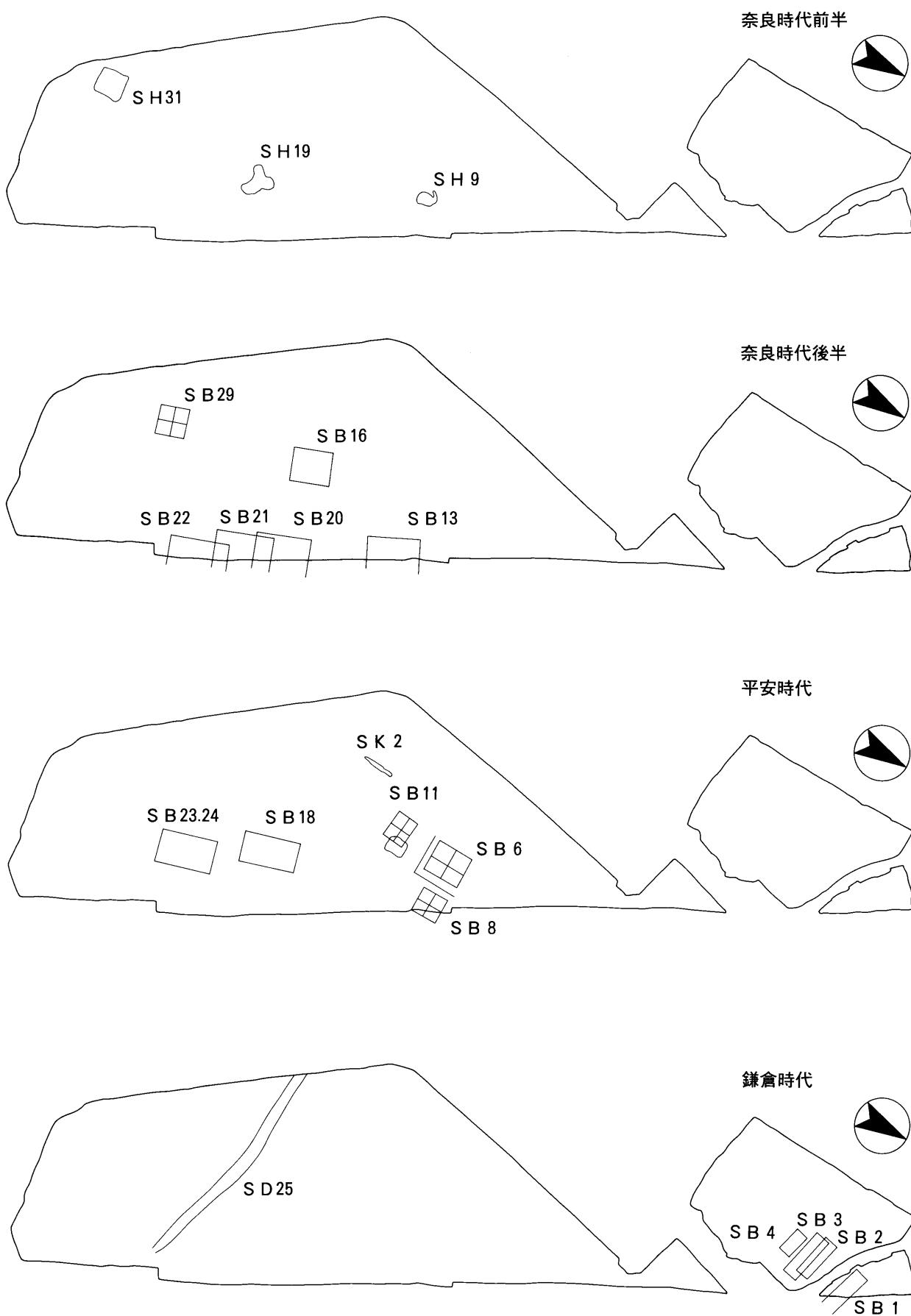
この他に、先に述べた4棟と主軸方向をほぼ同じくするSB16、SB29がある。SB29は2間×2間の総柱建物で、高床式の倉庫であろう。

平安時代になると、SB16・SB23・SB24が建てられる。出土した灰釉陶器は、折戸53～東山72号窯式期のものがみられることから、10世紀代の建物と考えられる。梁行3間×桁行4間のSB23はSB24への建替えを行うが、その後これらの建物から継続する建物は確認されていない。12世紀後半になると2棟の倉庫を伴うSB6が建てられる。SB6については、さらに規模の大きい建物であった可能性も考えられるが、これ以前の時期に見られた側柱建物とは異なり、総柱の建物で中世的な要素をもった建物に変わる。また、SK12はこれらの建物と方向を揃えており、現段階では確認されていないが、条里に方向性を規制されていた可能性も考えられる。

鎌倉時代になると、第2次調査区で検出された4棟の掘立柱建物がある。出土した山茶椀から判断して、13世紀後半代の建物と考えられる。建物の性格として、いずれも梁行1間で、柱掘形も小さいことから構造的に耐久性に乏しい建物と考えられる。小屋のような性格の建物であろうか。

こうして見てみると、権現坂遺跡は8世紀代、10世紀代、12世紀末～13世紀初頭、13世紀後半の各時期に、断続的に建物が配置されていたものと判断される。

以上のような状況は、鈴鹿市高井A遺跡と類似している。報告書によると、高井A遺跡は飛鳥・奈良時代～平安時代初期、平安時代末期～鎌倉時代初期の二時期を中心とする集落遺跡である^②。しかし、出土遺物の中には施釉陶器が含まれており、平安時代末期～鎌倉時代初期とされる掘立柱建物の中には時



第38図 遺構変遷図

期がさかのぼるものもあるように思われる。また、綠釉陶器も多数出土しており、そうした点も權現坂遺跡と共に通する。しかし、高井A遺跡では同一地点で建替えを行う主屋となる大型掘立柱建物があり、宅地的様相を示している。この点が權現坂遺跡とは大きく異なるが、今回の調査区は遺構の検出状況や遺物の散布状況から判断して、遺跡全体の端部付近であることが想定される。したがって、今回1・2棟の建物しか確認されなかったが、大型の掘立柱建物を含む建物群が隣接する地区に存在する可能性が考えられる。

「棄名国依」および施印須恵器について

「棄名国依」および施印土器について、既に清水正明氏、榎村寛之氏が詳細に論じているので^③、ここではその論考を参考に述べたい。

施印された須恵器杯身は、口縁部は約1／3程度であるが、底部はほぼ全体が残存する。口径は推定で14.2cm、器高は3.5cmである。底部外面はヘラで切り離された後、粗くナデが施される。胎土は軟質で色調は淡橙灰色を呈しており、焼成の状態は良くない。時期的には、8世紀後半代と考えられる。

「棄名国依」の4字は底部内面のほぼ中央に施される。文字は、一辺約2.4cmの「田」字状に区画された中に右上から「棄名国依」と縦書きされる。区画と文字の線幅は約1mm、深さは中央部の深い部分で約1mmを測る。断面形は逆三角形である。輪郭の上辺と下辺はほぼ直線的であるが、左右の辺は丸くふくらみをもつ。

文字は「棄」の縦線のみ区画線に接するが、他の3字は区画する枠の中におさまる。「国」の一画を略するのはスペースの問題にもよるものと考えられる。

この文字がヘラ書きであるか、施印によるものであるかという問題があるが、印影を観察すると中央部分の切れ込みが深くその周辺の土が盛り上がり、逆に、周囲では線が浅く土も平坦なままという線の不均等さが目につく。こうした点から、ヘラ書きされたものではなく、施印によるものと判断される。

中央部分が深く、周囲が浅くなる点について榎村氏は鈕のついた印を粘土板に押しつけると鈕の直下

の中央部分に最初に力が加わるため、中央の印面の線が深くめり込み、周囲が持ち上げられ、周辺部分になればなるほど、力のかかり方が放射状に弱くなり線の切れ込みが浅くなると推定した。そして、このことは文書の捺印時には印面に力の強弱は現れにくいが、柔らかい粘土板になると顕著に現れる。従って、この文字がヘラ書き文字ではなく、施印によるものであり、しかも「古印」形の鈕付印であるとした。

しかし、力が中央に最も加わるのであれば、粘土は周辺部に向かって押し出されることになると考えられるが、印影を観察すると、印の中央が盛り上がり、逆に周囲は低くなっている、さほど力を加えたという感じではない。したがって、この場合、成形段階のナデにより生じた凹凸の盛り上がった部分に、印の中央が偶然であるか意図的であるのかはわからないが、配置されただけではなかろうか。その結果、中央部分の文字が深く、逆に周辺部が浅くなつたと考えられる。

印の材料としては、木・金属・土・石等が考えられる。施印された面には木目の圧痕は肉眼観察からは認められない。しかし、施印された文字の線の輪郭や角の鋭さや逆三角形をなす断面形などから、陶印や銅印よりむしろ、細工を施しやすい木印である可能性が高いと考えられる。

文字に対する意識であるが、「依」の字などは特に右上がりの字体を示している。これは印の製作段階にそのことを十分意識していたからであり、単に手本となったものを模倣しただけでは左上がりになることもあり得る。したがって、印を作成した人物か、あるいはそれに関わった人物が文字に対しての知識が相当にあったものと推測される。

印に見られる「桑名」は、伊勢国13郡の1つ、桑名郡を本拠とする氏族である桑名氏にちなむものと考えられる。古文書に見られる桑名首に関わると考えられる記述は以下のものが挙げられる。

桑名（名欠）（『大日本古文書』卷七418頁）

桑名牛養（『寧樂遺文』中卷635頁）

また、「国依」についても

- 国依 『平安遺文』古文書編第一巻3号)
- 出納国依 『平安遺文』古文書編第四巻1513・1514・1529号、第9巻4661・4662号、第十巻の補197号)

等いくつか見ることができる。また、千葉県八千代市権現後遺跡からは、「村神郷丈部国依甘魚」と書かれた墨書き土器が出土しており、人物名を表すものと考えられている^④。これらの史料から判断して、「乗名国依」は人名を表しているものと考えられる。

「乗名国依」印について榎村氏は「私印」であることは疑いなさうだとして、この「私印」を施された土器=「私印土器」は、「生産段階から印をもつ階層の人物の所有物として弁別されていた「私物」ではないのだろうか。」とした。そのうえで、「印を施した土器は里長・郡司級以上の権力者が、きわめて限定された祭祀や呪術に用いるために特別に発注した」と考え、その行為については、墨書き土器以上に「土器の所有者の強い権力を示していた」と推測した。

では、この土器は権現坂遺跡に所在した人物（乗名国依）がつくらせたものか、あるいは交易等によって権現坂遺跡にもたらされたものであるかは現段階では判断し難い。今後の検討課題としたい。このことと関連して、「乗名国依」は当然、焼成前に施印されたものであり、その印が存在する以上、同様に施印された土器が複数生産された可能性が考えられる^⑤。今後の資料の増加に期待したい。

円面硯について

円面硯は3点が出土した（第30図236～238）。いずれも破片であるが、別個体であると考えられる。脚台部の2点は焼成状態が良くなく、赤褐色を呈しており、とても実用されたとは考えられない。236のみが唯一、実用に耐えうる製品である。しかし、この時期の出土遺物の中に墨書きが施されたものは1点もなく、また、241についても硯面に使用痕跡は認め難い。「乗名国依」施印土器は出土していても、実際、権現坂遺跡に識字者がいたかどうかは疑問が

残る。文字を書く対象は勿論、土器だけではなく、紙や木といった有機質のものの方が一般的であったと思われるが、一方で円面硯を文房具としてではなく、それ自体を所有するということに、何らかの意味があったと考えることもできる。

緑釉陶器について

緑釉陶器は総数70点が出土した。一遺跡からの出土量としては多い方といえよう。そのほとんどは小片で、かつ遺物包含層からの出土で、遺構に伴うものはわずかである。椀、皿がほとんどで、それ以外には唾壺の可能性も考えられる壺が1点見られるのみである。仮に唾壺であるとすれば、三重県内での出土遺跡としては5遺跡目となる^⑥。

産地別に見ると、尾張産、美濃産、近江産と考えられる製品を確認することができる。しかし、製品としての質の点からみた場合、高品質のものではなく、粗雑な「普及品」^⑦とでもいいくべきものである。陰刻花文が施されるようなものは認められない。この点が国衙や郡衙とは異なり、権現坂遺跡の性格を表すものと考えられる。

緑釉陶器の出土量を郡内の他の遺跡と比較した場合、圧倒的に出土量が多く、明確な差が認められる^⑧。

また、灰釉陶器との比率では、圧倒的に灰釉陶器の方が多いものの、緑釉陶器と灰釉陶器との格差^⑨を考慮すれば、他の遺跡との緑釉陶器の量比の差は、権現坂遺跡の優位性を示すものであろう。

流通や使用形態等、検討すべき課題があるものの、今回はそこまで踏み込んだ検証ができなかった。緑釉陶器の流通・消費状況については、全国レベル、地域(国)レベル、遺跡(郡)レベル、遺跡レベルとさまざまな対象領域を設定しながら研究を行うことが必要である^⑩。こうした点を今後の課題としたい。

清郷型鍋について

権現坂遺跡からは比較的まとまった量の清郷型鍋が出土した。いずれも口縁部の破片であるため、正確な個体数は把握できないものの、総数22点が確認されており、同時期の南伊勢系鍋より全体に占める割合が勝っている。県内では北伊勢を中心に、これまで出土しても1～2点ないしは少量が見られる遺

跡は多く見られるが、これだけの量が見られる遺跡は、四日市市宮の西遺跡^⑪などわずかが知られる程度である。

胎土の肉眼的観察から判断して、在地産と考えられる他の土器との相違は大きく、他の地域から持ち込まれたものであることは疑いようがない^⑫。

出土した清郷型鍋は永井分類のD～F類に相当し、実年代では10世紀後半から11世紀代に比定される^⑬。

清郷型鍋について、佐野五十三氏は「東海地方における広域交易圏成立の背景として、寄進地系莊園の拡大に伴う物資の流通体系が重要な要素の一つであると思われる。そして莊園領主への物資の輸送は、律令的な陸路による人担方式ではなく、少人数で大量輸送の可能な船による海上交通の発展が前提となる。」としたうえで、清郷型鍋を「東海地方における交易圏を背景にして成立した」と捉えた^⑭。さらに永井氏は清郷型鍋を「広域に流通した“商品”として捉えるならば、後出してさらに広範囲に分布する「伊勢型鍋」以前の広域流通品とも考えられる。」とした^⑮。

員弁川はやがては伊勢湾へと注ぎ、三河湾あるいは太平洋へとつながる。この海を媒介として他地域との交易は容易であったと考えられる。また、先に述べた、津料・関料免除の特権行使してより活発に交易活動を行っていたと考えられる。清郷型鍋は、こうした交易活動の中で權現坂遺跡にもたらされた商品という位置づけができる。

条里制について

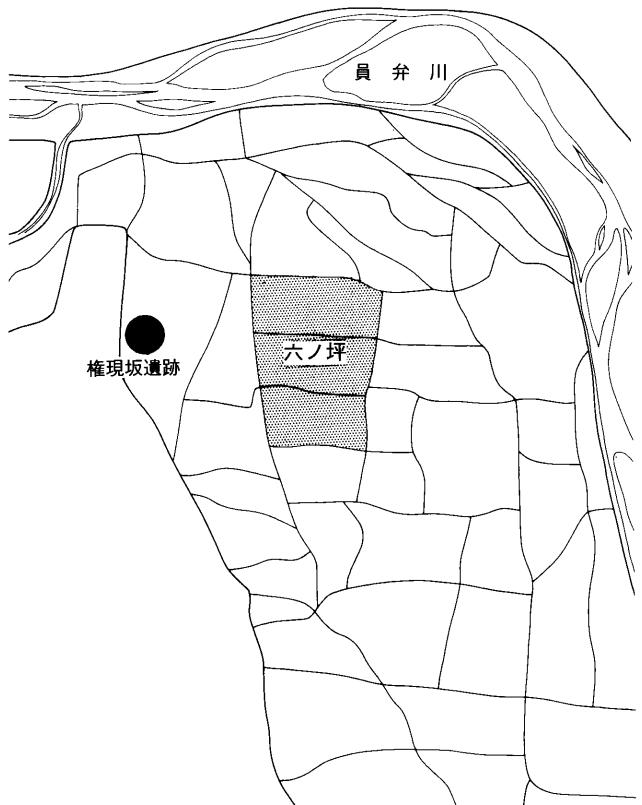
權現坂遺跡の東に位置する所に「六ノ坪」と称する字名がある。また、『治田村誌』によると明治初年の地図には他に「一ノ坪」「九ノ坪」と呼ばれる土地があったことが記載されている。しかし、現在のところ「六ノ坪」以外は、どの土地を示した地名であるか確認することはできない^⑯。

この地域に条里(型)地割の存在することは古くから指摘されており^⑰、発掘調査によって条里遺構の存在が確認されているわけではないので、確かなことはいえないが、条里地割の存在した可能性は高いといえよう。今回の調査で検出された平安時代末の掘立柱建物S B 6・8・11はN 4°～6° Wの方位をと

る。これに方向を合わせてSD 2が掘削され、さらにSD 25はこれらと直交する形で調査区を横断している。これらの方向性が条里地割によって規制とまではいかなくとも、何らかの影響を受けている可能性は考えられる。

「六ノ坪」周辺や員弁川を挟んだ対岸の麻生田地区の平野部は「川原」のついた字名が多く、員弁川の氾濫源であったことを示している。また、「新貝」(新開と同意)といった字名も多く見られ、後世になってから開発が行われたことがわかる。こうした状況から、施行された条里地割のうち実際に耕作地として利用されていたのは「六ノ坪」だけであったとも解釈できよう^⑯。

員弁郡において条里(型)地割は、田中欣治氏が「条里型地割の卓越地帯」と評価したように東員町役場周辺の旧久米郷で最もよく観察される。現状では圃場整備により、整然と区画された水田が広がるが、圃場整備に伴う発掘調査では狭小なトレーンチ調査ながら条里制に関わると考えられる溝が数条検出されており、N 15°～20° E の方向をとっている。これらの溝が条里遺構に関わる可能性もある。



第39図 条里関連字名

現段階では、考古学的資料によって条里遺構の存在を裏付けるものは確認されていないが、各地に条里制に関係する地名が残っており、条里地割が存在していた可能性が考えられる。今後も検討が必要である。

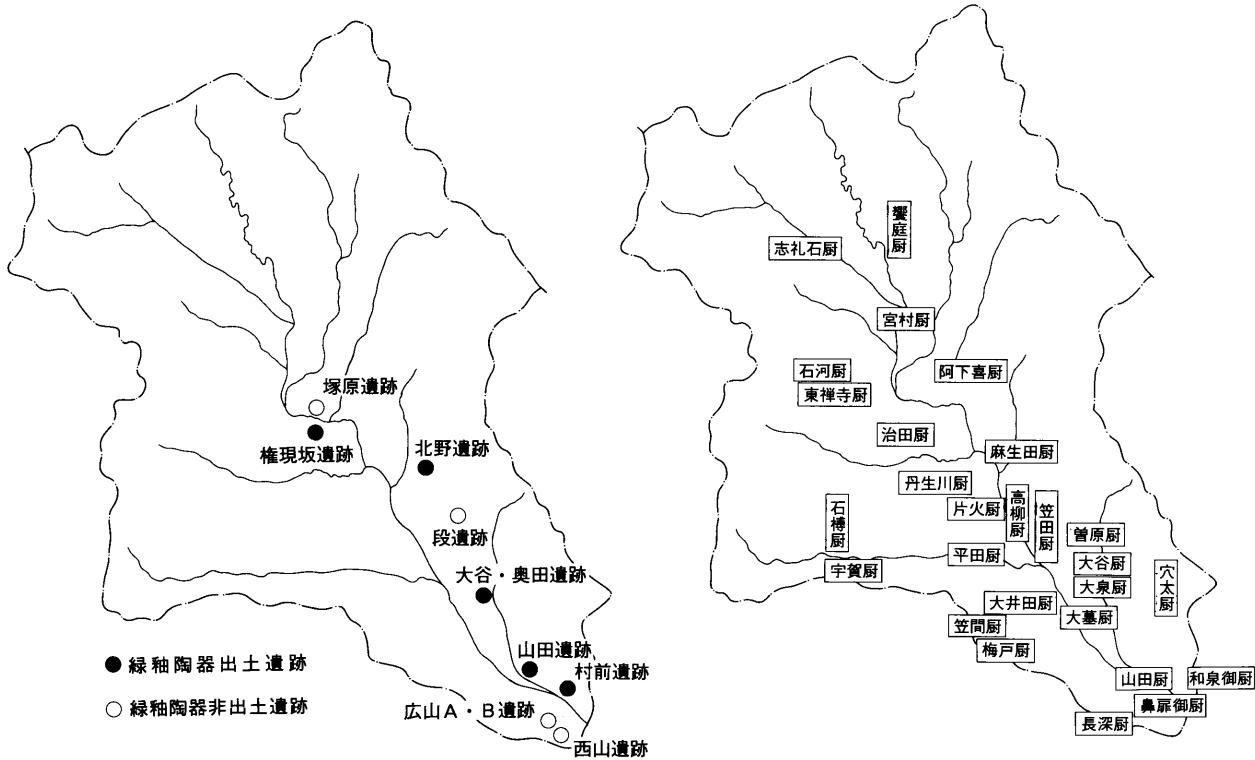
権現坂遺跡について

員弁郡は度会、多気、飯野の三郡に加え、三重郡、安濃郡などとともに神八郡の一つであった。伊勢神宮と員弁郡との関係は、天慶三年（940）に「二〇〇烟」をもって「神郡」として寄進されたことによって成立する²。この神郡への寄進の背景には、6世紀以来の王権との深い繋がりによるものとする見方もある³。その後、律令体制の崩壊とともに、神宮の体制基盤が神郡・神戸から御厨・御園へと移行していく。この御厨・御園の成立背景の一つに神郡・神戸内で成長した有力者が中心となって形成、成立したことがあげられる。員弁郡内においても多数の御厨が成立していたことが『神鳳抄』等からうかがい知ることができる。この点について、蔭山誠一氏が「員弁川左岸の中位段丘上に、御厨・御園が広がって

いたことが伺われ、それらが平安時代の遺跡の分布と重なってくる」と指摘したように⁴、当該時期の遺跡と『神鳳抄』などに記載される御厨・御園との関係が注目されるところである。

当該期の遺跡を考えるうえで、緑釉陶器に注目したい。員弁郡内で当該時期の遺跡は、権現坂遺跡の他、員弁町北野遺跡⁵、段遺跡⁶、大谷・奥田遺跡⁷、東員町村前遺跡⁸、山田遺跡⁹、西山遺跡・新野遺跡¹⁰、広山A・B遺跡¹¹などが知られている。これらの遺跡は北野遺跡、西山・新野遺跡以外、正式な報告書が刊行されていないため、詳細を知ることができないが、町史などからうかがい知る限りでは、竪穴住居や掘立柱建物を中心とした集落遺跡とされる。このうち緑釉陶器の出土が知られている遺跡は、権現坂遺跡、北野遺跡、大谷・奥田遺跡、山田遺跡、村前遺跡が挙げられる。

国衙やその周辺以外の遺跡から出土する緑釉陶器について北陸地域での荘園遺跡の調査の実績から、その中心的な庄家が所在したと見られる遺跡は、荘園として中央とも関連を持つため、平安京などの都市的な文化を受け入れやすかったと考えられ、一般



第40図 員弁郡における奈良・平安時代の遺跡および御厨

集落に比べ緑釉陶器の消費量がやや多めであるという指摘もある^⑧。

権現坂遺跡をはじめとする先に挙げた各遺跡は、律令体制の崩壊とともに成長した在地有力者層と関わるものと考えられる。出土した緑釉陶器は10世紀代のもので、一般的に緑釉陶器が大量生産される時期に相当するものの、神郡に寄進された時期とほぼ一致することから、その入手は神郡として寄進されたことが契機になったとも解釈できる。つまり、神宮との繋がりを持つことによって、荘園と中央の繋がりと同じ図式が出来上がり、その結果、緑釉陶器という高級品を多量に入手することができたのでないだろうか。

さらに平安時代末期になると神人・供御人は津料・閥料を免除されて、自由に広域的交易活動に従事していたことが知られている^⑨。こうした特権を利用していたことが、多量の清郷型鍋などの存在を説明できるのではないだろうか。

大量の緑釉陶器や清郷型鍋の存在は神宮との関わりを得た結果によるものと考えられる。しかし、それは遺跡ごとに較差が見られることから、神宮から一律に与えられたものではなく、特権を利用し自発的に行なった交易活動によるものであり、権現坂遺跡の量の多さは、その積極性を示すものと考えられる。ただし、他の遺跡の状況を充分に検討していないので、この点は今後の課題としたい。

先に述べたように、権現坂遺跡は『神鳳抄』に見られる「治田御厨」の所在地と一致している。また、出土遺物には、神宮との関係を伺わせる高級品や広域的な交易活動の結果入手し得たと考えられるものが多数見られる。こうした状況から、権現坂遺跡が伊勢神宮の御厨の一つ、『治田御厨』に関わりのある遺跡である可能性を指摘したい。

また、現段階では推測の域をでないが、員弁郡内の他の遺跡についても権現坂遺跡と類似した要素をもっており、たんなる集落遺跡ではなく、権現坂遺跡と同様に、神宮の御厨に関わる遺跡であった可能性が考えられる。

【註】

- ①清水弘之他 『一般国道475号東海環状自動車道東村城跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 2000
- ②筒井昭仁 『一般国道23号中勢道路(6工区)建設事業に伴う高井A遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 1998
- ③清水正明「権現坂遺跡出土の刻印須恵器から」『国立歴史民俗博物館研究報告』第79集 国立歴史民俗博物館 1999
榎村寛之「古印を捺した土器 土器に印を捺すということ」『国立歴史民俗博物館研究報告』第79集 国立歴史民俗博物館 1999
- ④阪田正一他『八千代市権現後遺跡－萱田地区埋蔵文化財調査報告書I－』住宅・都市整備公団 首都圏都市開発本部 (財)千葉県文化財センター 1984
- ⑤竹内英昭「第一章 員弁川流域と三滝川流域」『日本の古代遺跡 52三重』保育社 1996
- ⑥『彩釉杯出土遺跡地名表(3)日本出土の三彩・緑釉陶器』の集成データによる。(井上喜久男他『日本の三彩と緑釉一天平に咲いた華』展示図録 愛知県陶磁資料館 1998)
- ⑦平尾政幸「施釉陶器の変質と波及」『古代の土器研究－律令の土器様式の西東3－』古代の土器研究会 1994
- ⑧高橋照彦「『瓷器』『茶碗』『葉椀』『様器』考文献にみえる平安時代の食器名を巡って」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集 国立歴史民俗博物館 1997
- ⑨糸淳一郎『陶磁(原始・古代編)』日本の美術235号 至文堂 1985
- ⑩高橋照彦「平安期施釉陶磁器研究の現状と課題－緑釉・灰釉陶器を中心に－」『中近世土器の基礎研究』XV 日本中世土器研究会 2000
- ⑪春日井亘『宮の西遺跡』四日市市遺跡調査会 1988
- ⑫胎土分析の結果からは西三河が有力な産地として推定されている。(鈴木正貴「土器胎土重鉱分析報告」『清洲城下町遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター 1990)
- ⑬永井宏幸「清郷型鍋再考」『年報 平成7年度』(財)愛知県埋蔵文化財センター 1996
- ⑭佐野五十三「清郷型甕の研究」『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要』Ⅲ 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1990
- ⑮註⑭文献に同じ
- ⑯近藤空編『治田村誌』三重県員弁郡治田村公民館 1953
- ⑰濱辺一機氏のご教示によると、「一ノ坪」「九ノ坪」については伝承のみで、具体的な所在地は不明であるという。
- ⑱弥永貞三・谷岡武雄編『伊勢湾岸地域の古代条里制』東京堂 出版 1979
- ⑲『北勢町史』北勢町 2000
- ⑳田中欣治「三重県員弁郡における勅旨田一百町歩の位置について」『歴史地理研究と都市研究(上)』(藤岡謙二郎先生退官記念事業会)大明堂
- ㉑『和名抄』に見える員弁郡五郷のひとつ。旧久米郷は、員弁郡東員町長深、中上および桑名市志知、坂井、友、赤尾、島田、桑部、東西金井、亀崎の地域を指す。
- ㉒『神宮雑例集』 平将門の乱平定を祈願して、神宮に寄進されたものである。
- ㉓山中章氏「伊勢国北部における大安寺施入墾田地成立の背景」『ふびと』第54号 三重大学歴史研究会 2002
- ㉔蔭山誠一『三重県員弁郡員弁町石仏段遺跡発掘調査報告』員弁町教育委員会 1994
- ㉕当該時期の遺構は確認されていないが、緑釉陶器の出土が知られている。(『員弁町史』員弁町教育委員会 1991)
- ㉖蔭山誠一『段遺跡発掘調査報告』員弁町教育委員会 1994
- ㉗山田猛『山田遺跡発掘調査報告－縄文時代編－』東員町教育委員会 1991
- ㉘『員弁町史』員弁町教育委員会 1991
- ㉙『村前遺跡現地説明』資料 東員町教育委員会 1992
- ㉚小玉道明『西山・新野遺跡』東員町教育委員会 1976
- ㉛今尾宏記「IV 広山B遺跡」『一般国道475号東海環状自動車道埋蔵文化財発掘調査概報VII』三重県埋蔵文化財センター 2001
- ㉜高橋照彦「地方官衙出土の平安時代の緑釉陶器」『考古学ジャーナル』No.475 ニューサイエンス社 2001
- ㉝網野善彦「第三章 海と海民の活動－太平洋の海上交通と紀伊半島』『海と列島文化 第八巻 伊勢と熊野の海』小学館 1992

写 真 図 版



調査区全景（北西から）



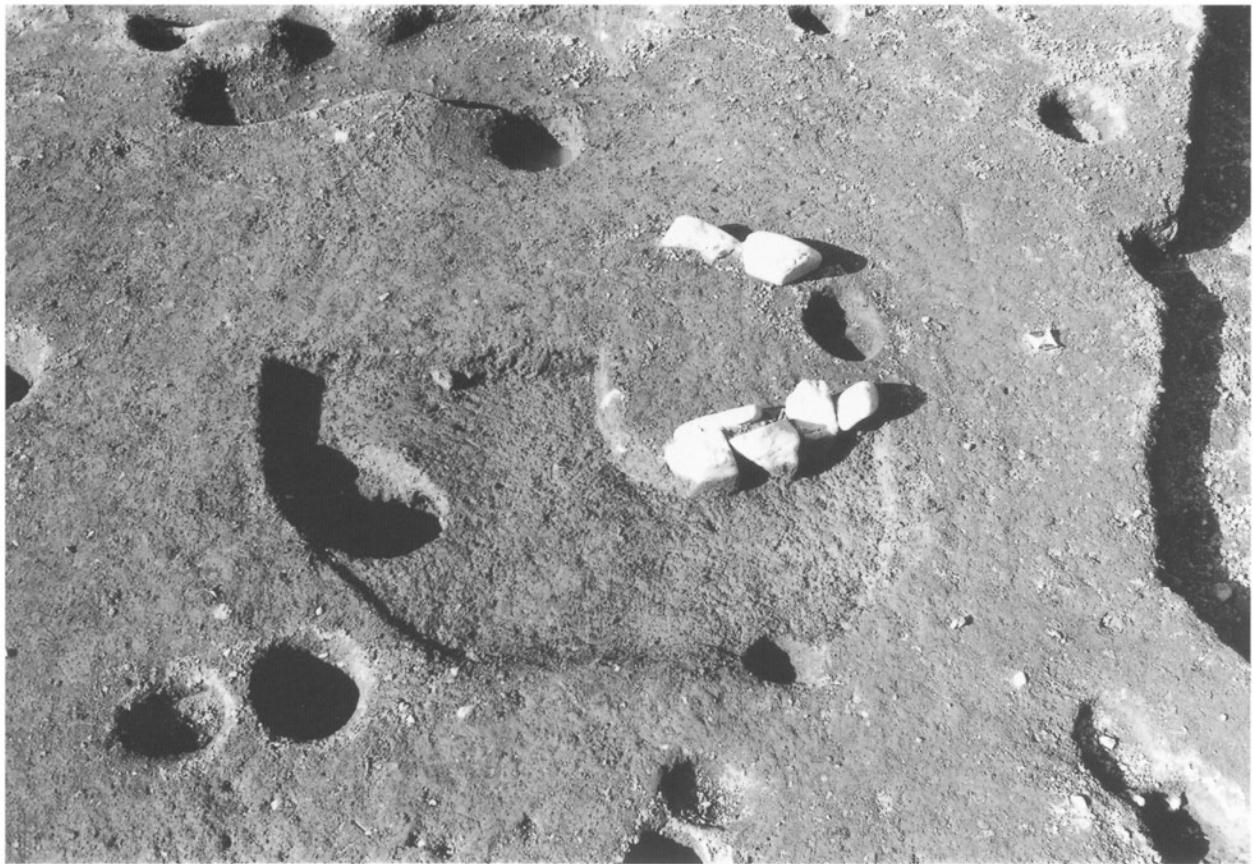
調査区全景（南東から）



S X 34・35出土状況（南西から）



S X 34出土状況（南東から）



S H 9 (南東から)



S H 9 窟 (西から)



S H 19 (南西から)



S H 31 (東から)



S B 13 (西から)



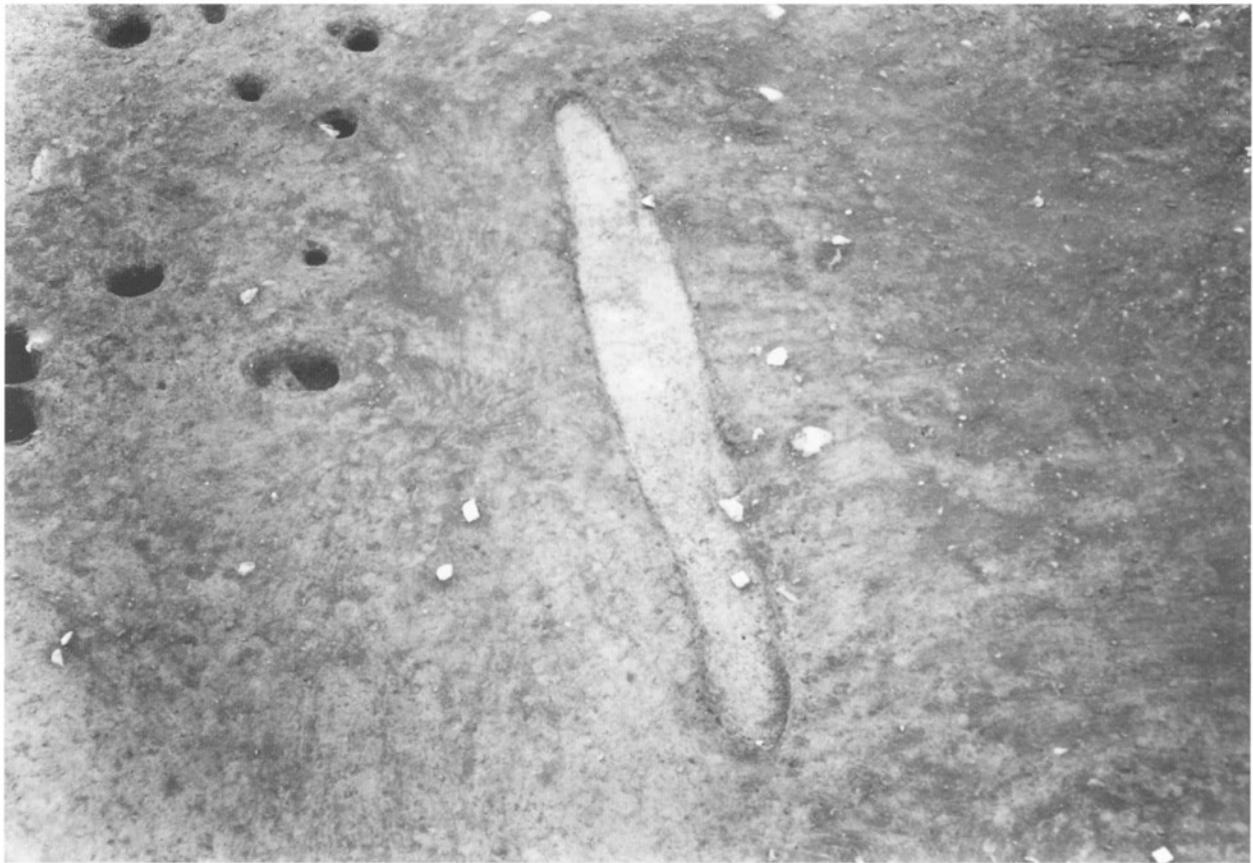
S B 20~22 (南西から)



S B 21・22 (南から)



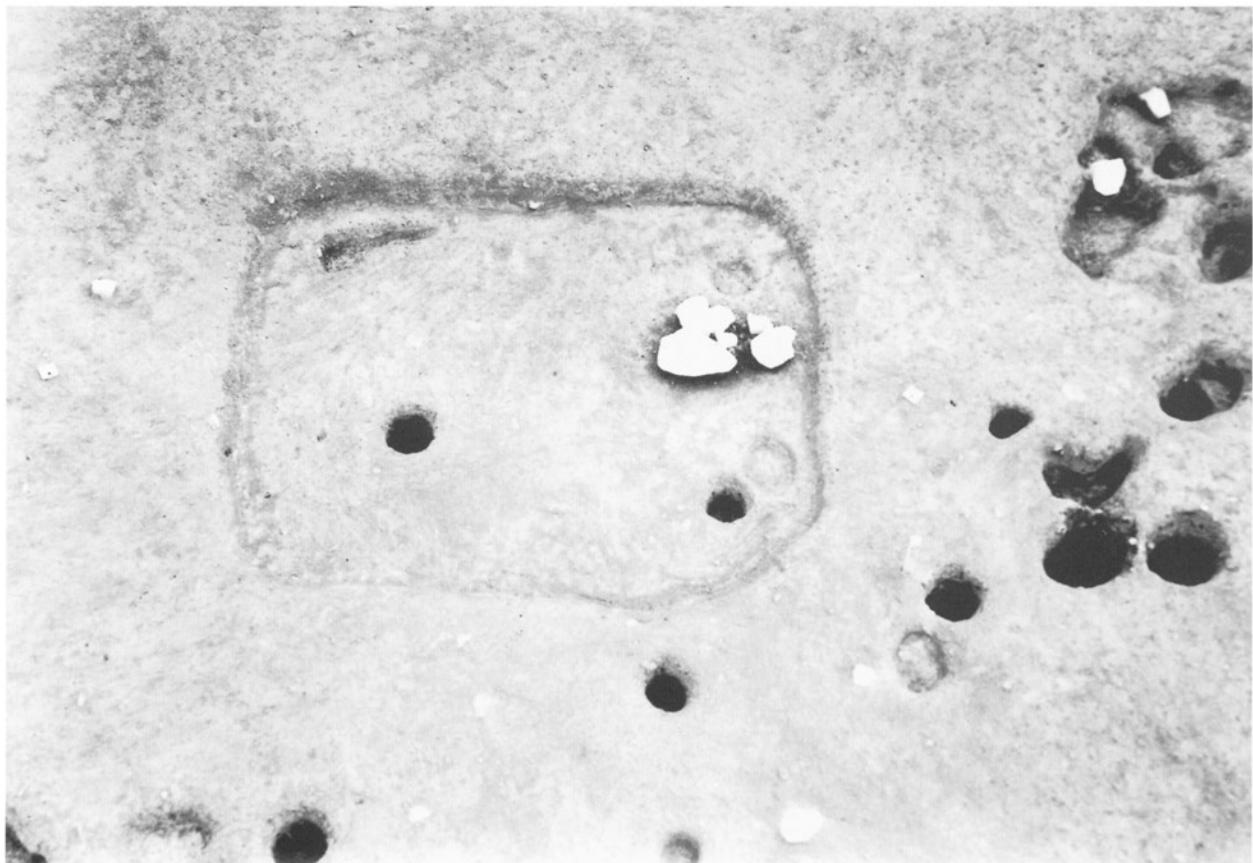
S B 23・24 (南から)



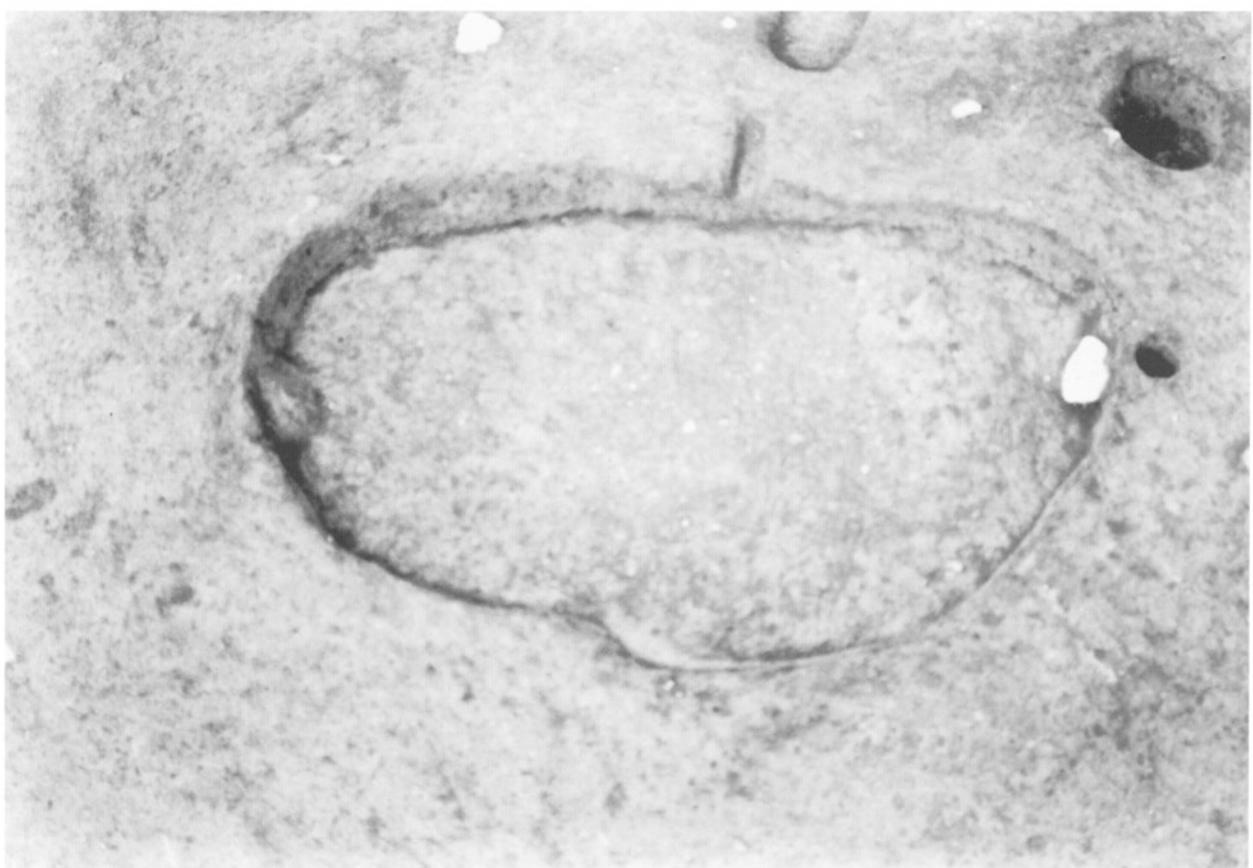
SK 12 (北から)



SK 15 (南西から)



S K 10 (西から)



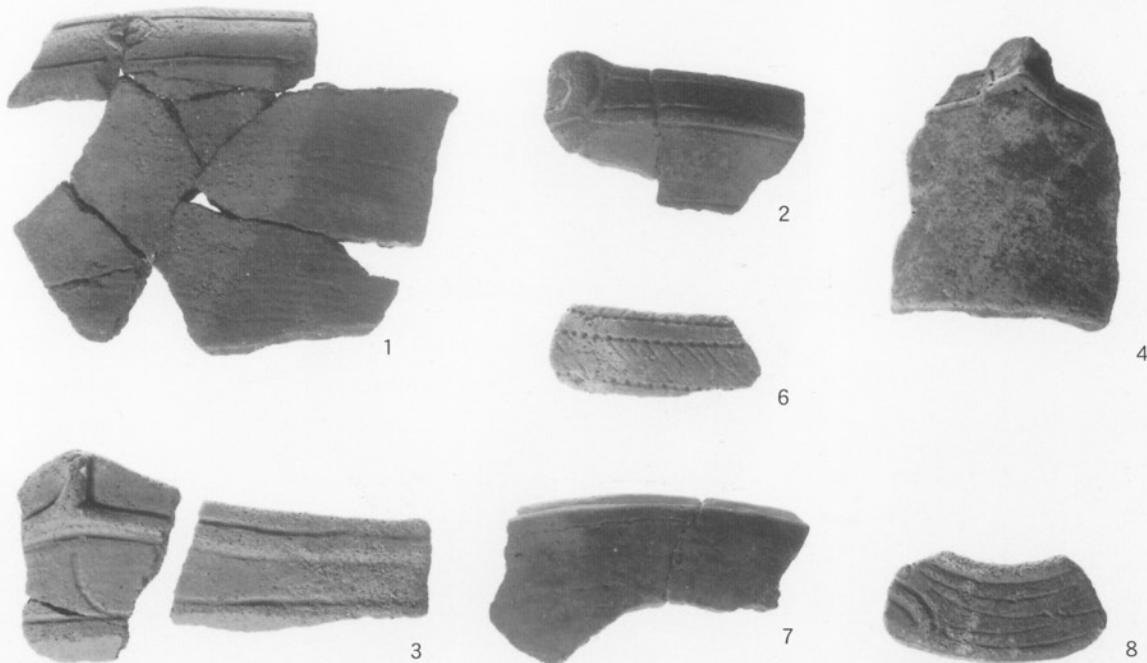
S K 17 (南東から)



S K 37 (東から)



S D 25 (東から)



出土遺物(1) (縄文土器)



出土遺物(2) (縄文土器)



17

出土遺物(3) (縄文土器)

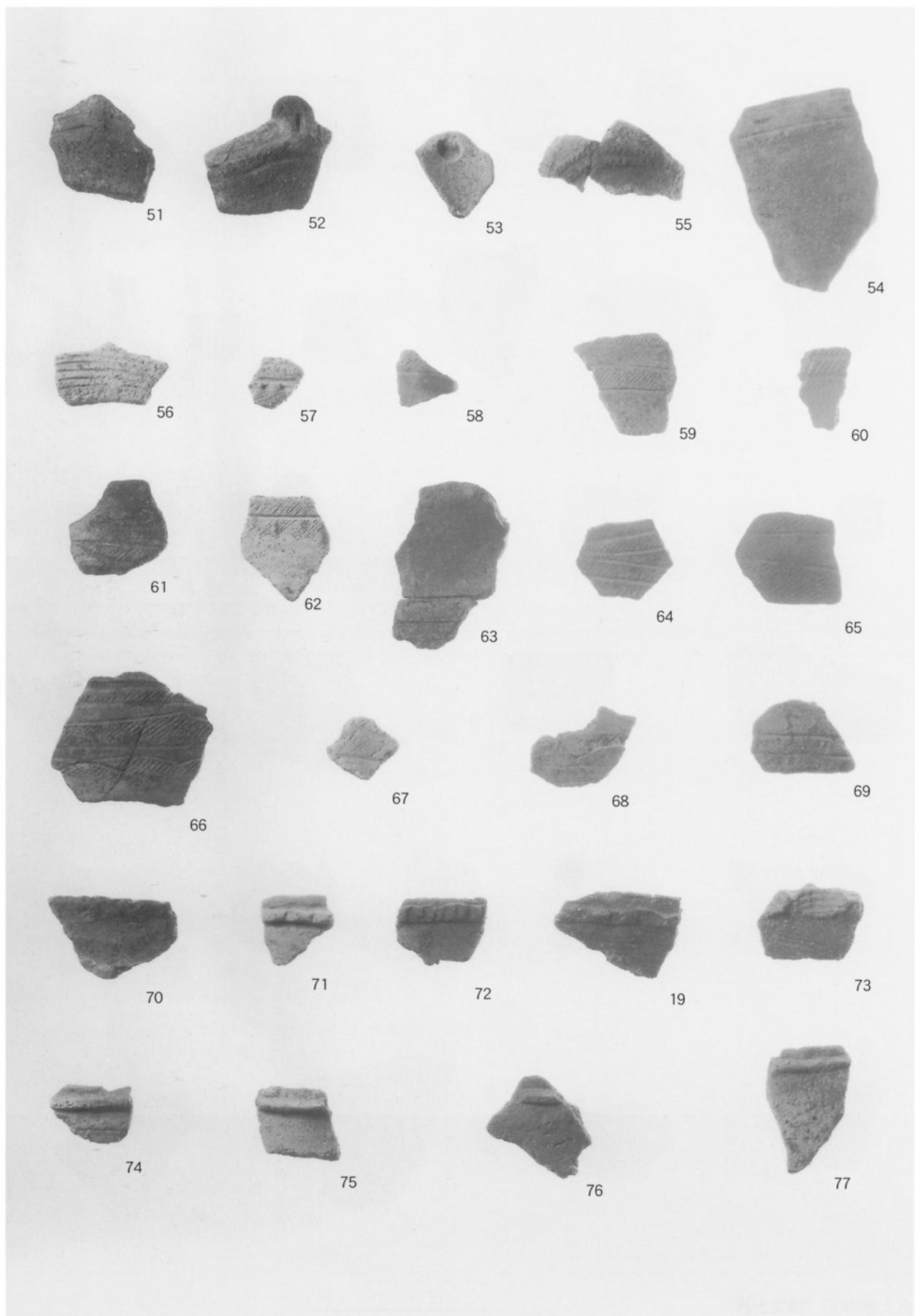


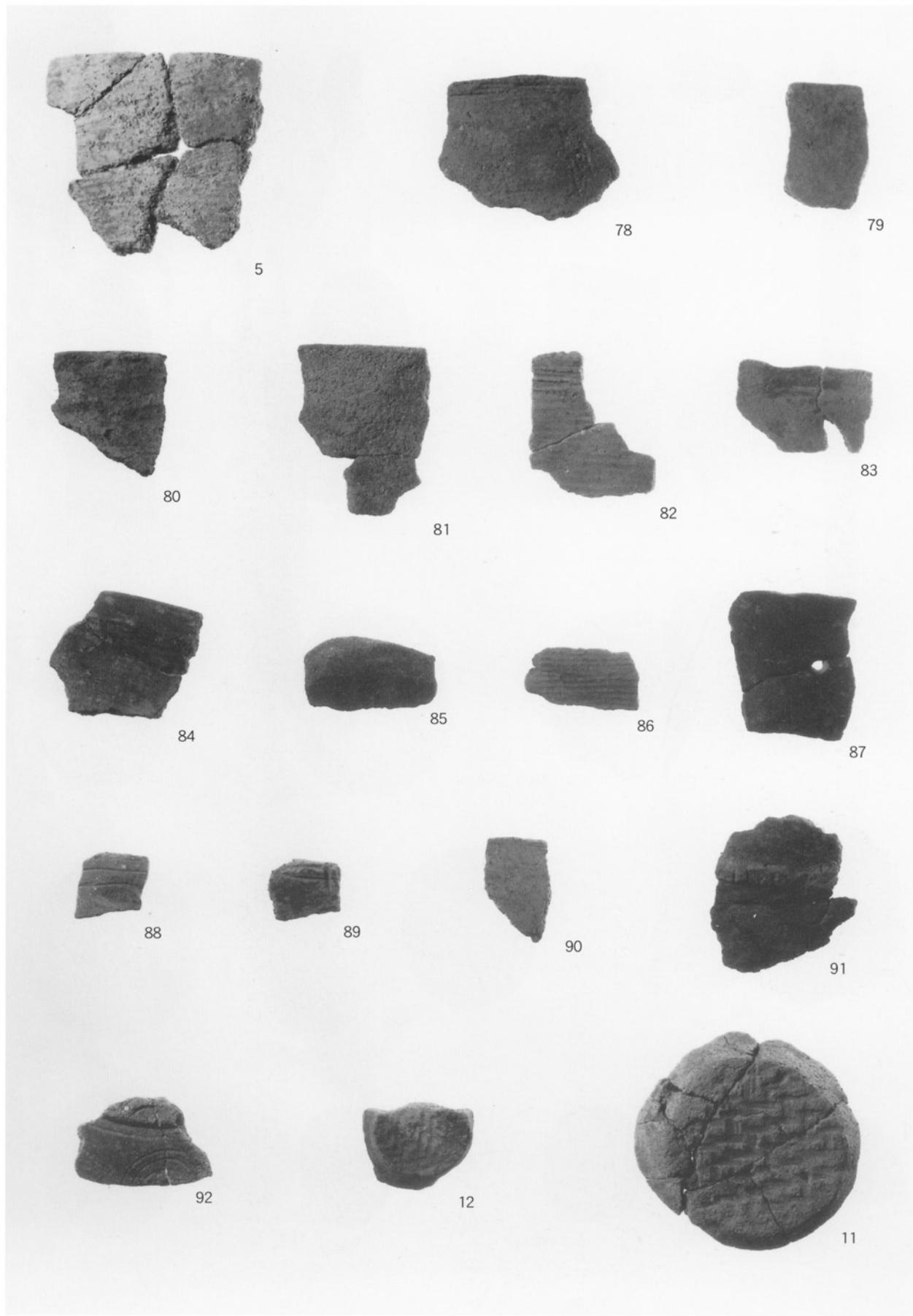
20

出土遺物(4) (縄文土器)

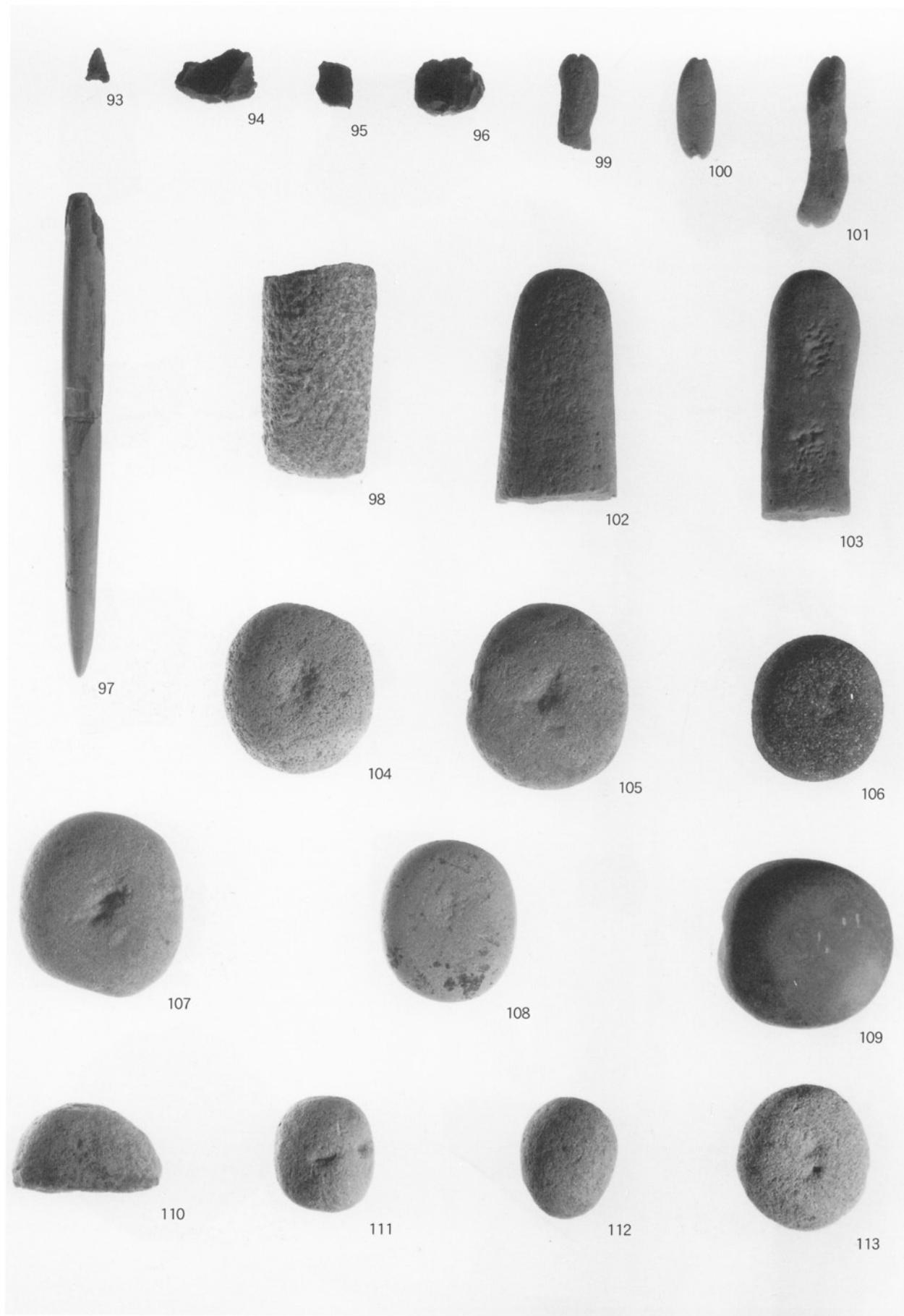


出土遺物(5) (縄文土器)

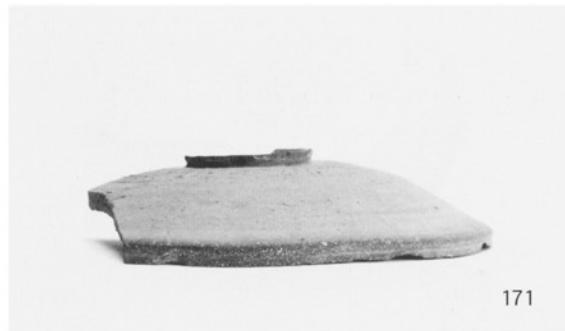
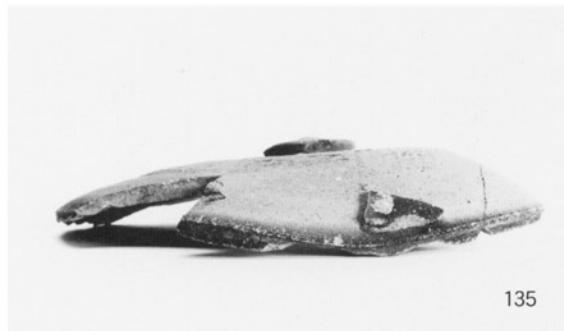




出土遺物(7) (繩文土器)



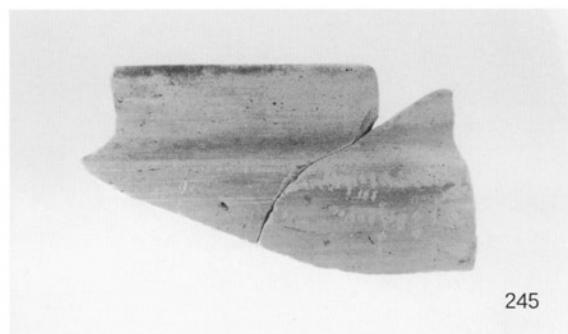
出土遺物(8) (石器・石製品)



出土遺物(9) (須恵器)



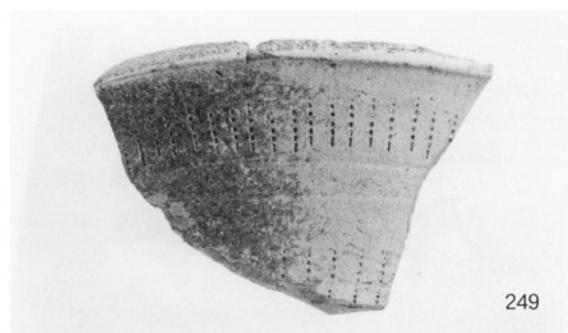
出土遺物(10) (須恵器)



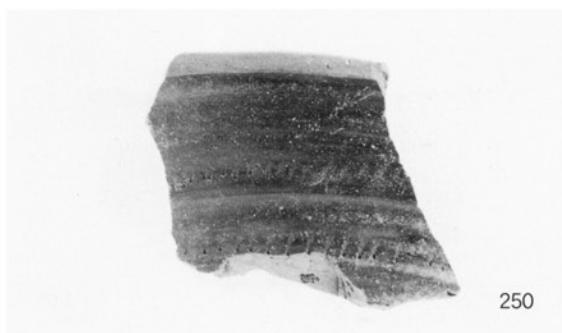
245



246



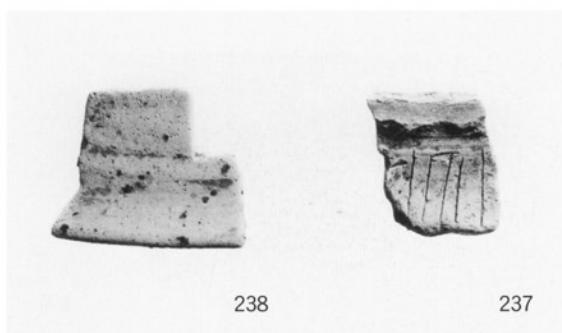
249



250



236

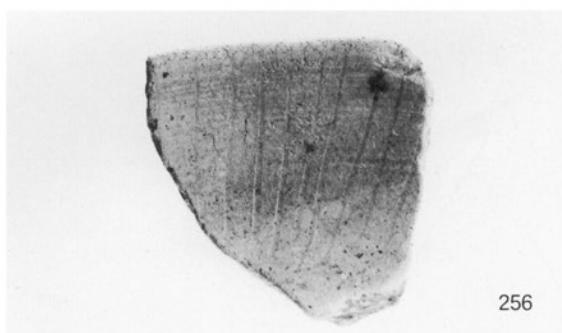


238

237



116



256



252



253

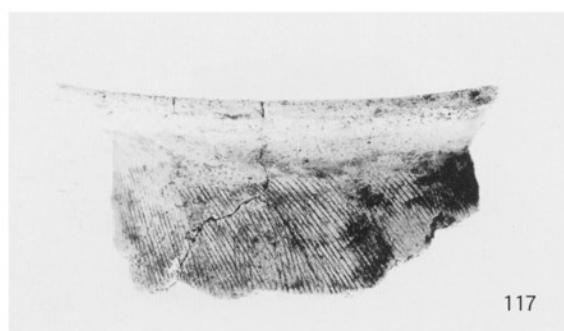
出土遺物(11) (須恵器・土師器)



258



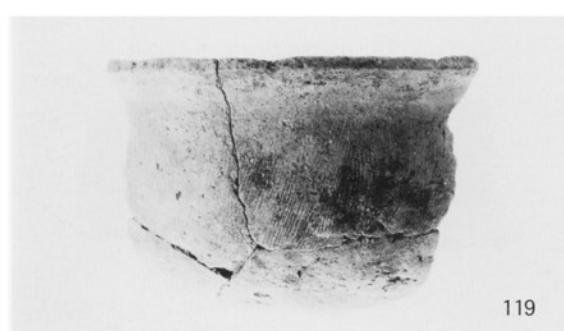
131



117



118



119



259



161



158



340



343

出土遺物(12) (土師器)



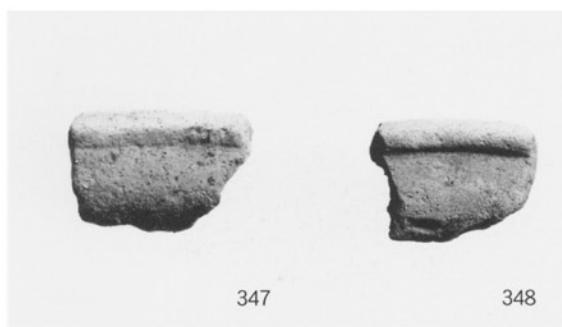
333



334



346



347

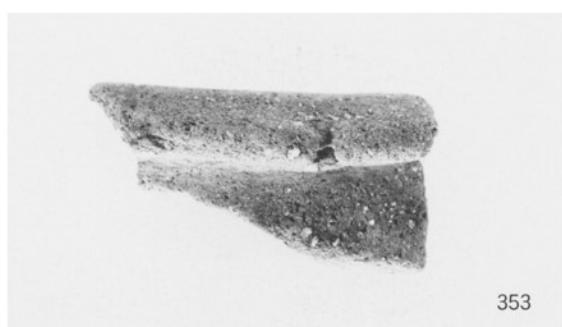
348



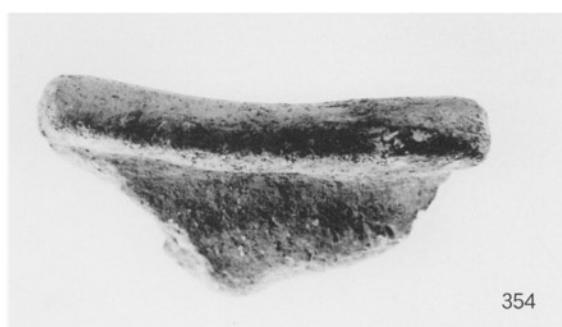
352



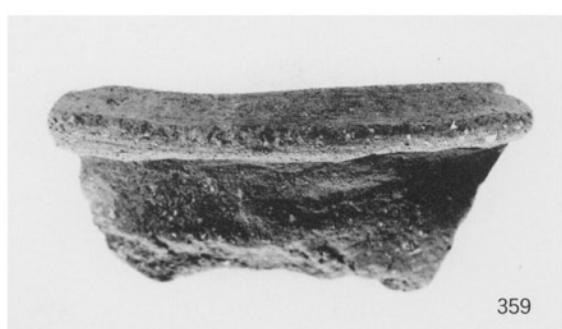
350



353



354



359



360

出土遺物(13) (土師器)



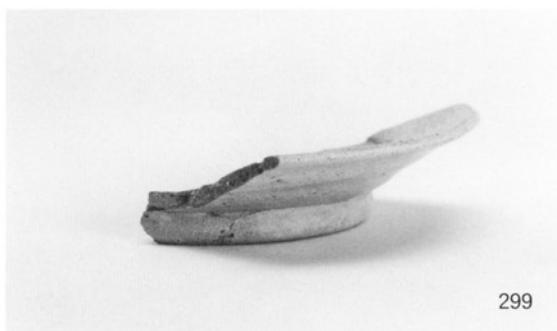
275



286



296



299



305



300



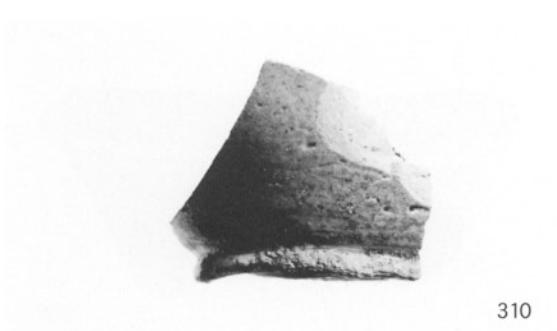
208



425



146



310

出土遺物(14) (灰釉陶器)



出土遺物(15) (緑釉陶器・陶器)



380



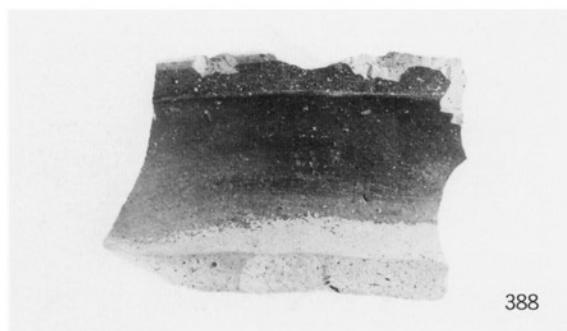
381



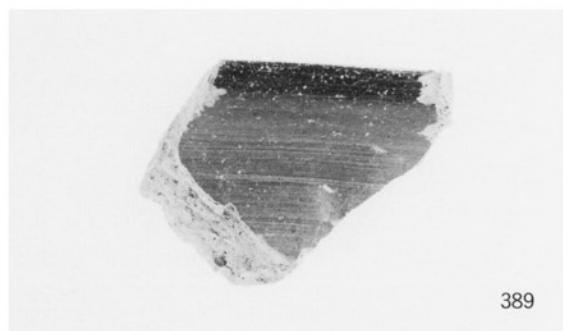
382



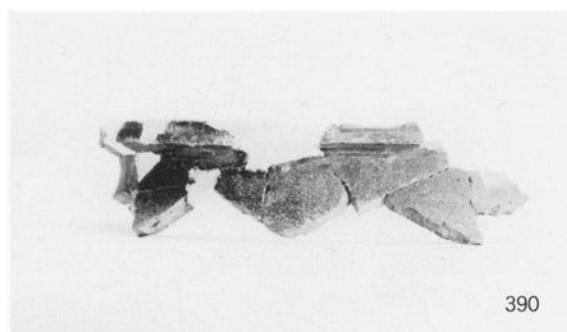
387



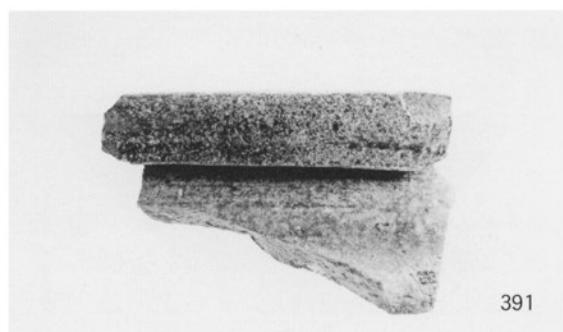
388



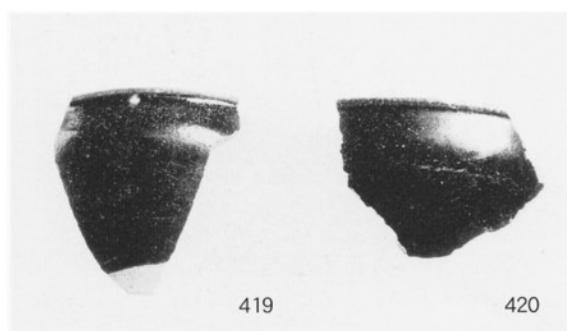
389



390

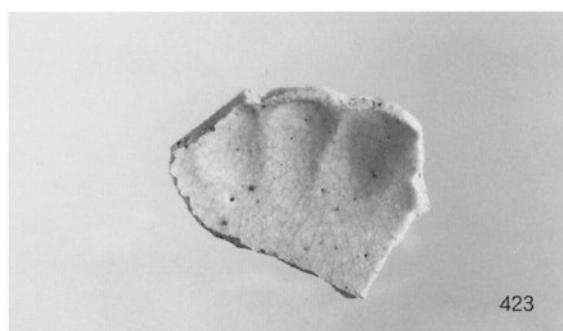


391



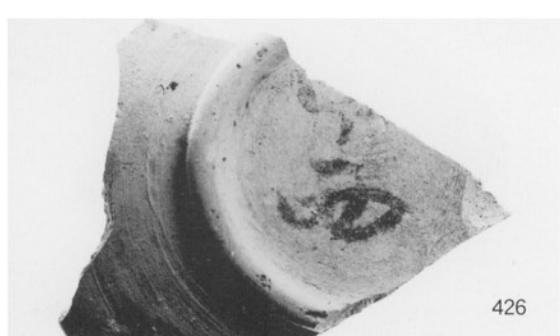
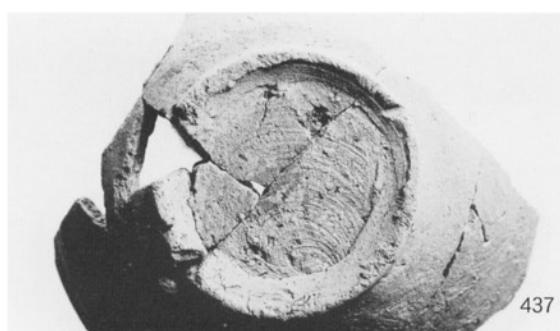
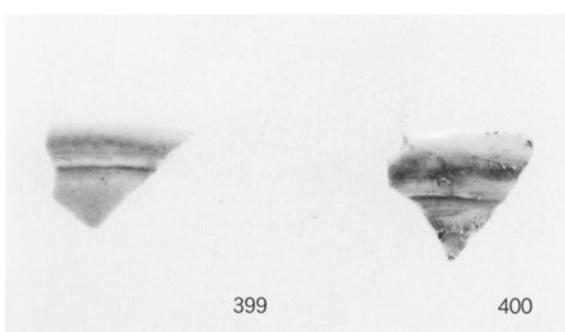
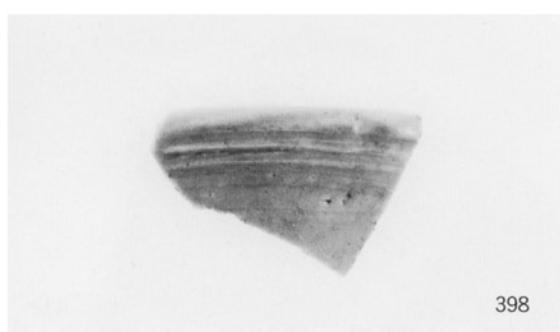
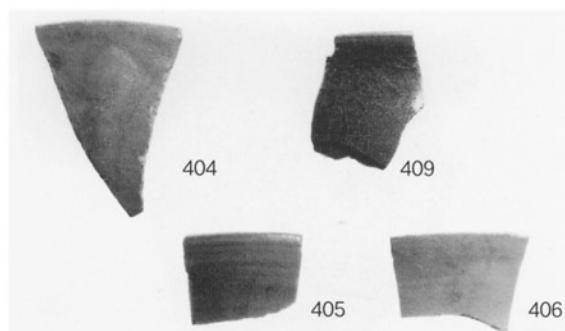
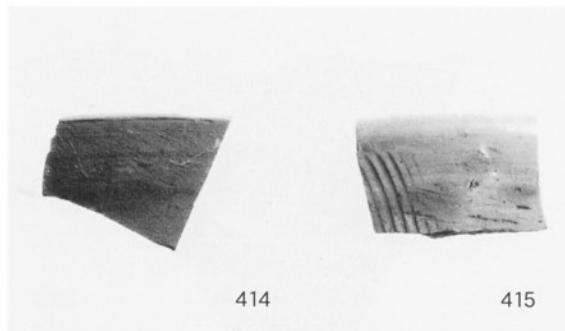
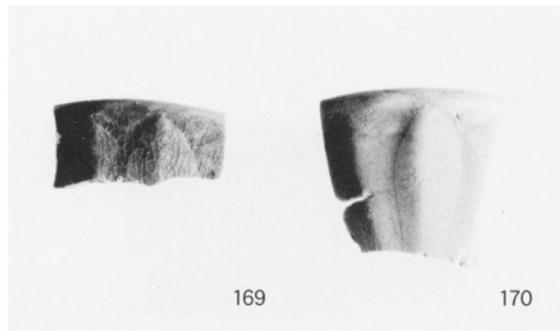
419

420



423

出土遺物(16) (陶器)



出土遺物(17) (磁器・墨書土器)



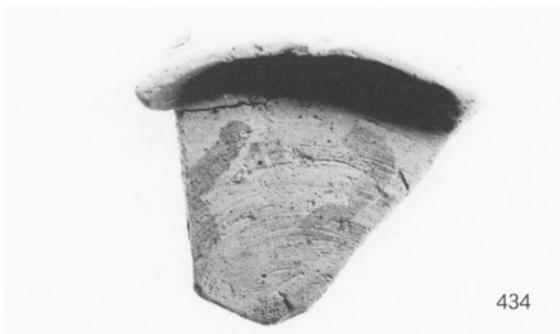
430



431



432



434



441



442



445



446



449



451

出土遺物(18) (墨書土器)

報告書抄録

ふりがな	ごんげんざかいせきはつくつちょうさほうこく							
書名	権現坂遺跡発掘調査報告							
副書名								
巻次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	186-4							
編著者名	清水正明 森川幸雄 片岡博 角正 芳浩							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 0596-52-1732							
発行年月日	2002年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″		m ²	
ごんげんざかいせき 権現坂遺跡	いなべぐん 員弁郡 ほくせいちょう 北勢町 ひがしむら 東村 あざはつたども 字治田外面	24321	43	35° 08' 52"	136° 30' 56"	19941121 ~19950303 19961001 ~19961120	2,430 756	一般国道475号線 東海環状自動車道 建設に伴う事前調
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
権現坂遺跡	集落跡	縄文時代 飛鳥時代 ~平安時代 鎌倉時代	土坑 土器棺墓 竪穴住居 掘立柱建物 土坑 掘立柱建物 溝	深鉢 石器・石製品 土師器甕 須恵器・灰釉陶器 綠釉陶器・山茶椀 口クロ土師器 山茶椀	『棄名国依』施印須恵器			

平成 14(2002) 年 3 月に刊行されたものをもとに
平成 19(2007) 年 9 月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告186－4

一般国道475号東海環状自動車道

権 現 坂 遺 跡

発掘調査報告

2002.3

編 集 三重県埋蔵文化財センター

発 行

印 刷 共栄堂印刷株式会社
